

くものいと No.32

KU MO NO I TO

2002 October 20

関西クモ研究会
大阪府茨木市

くものいと

No.32, Oct. 2002

目次

『くものいと』発刊 20 周年。編集の軌跡	
1	編集者：くものいと の編集を担当して 吉田 真
3	編集者：「くものいと」創刊のころ 清水裕行
8	読者：「おおきなお世話」かも知れませんが… 新海 明
10	読者：会報「くものいと」を読んで 須賀瑛文
フィールド紹介⑥	
11	山陰海岸国立公園内 城山園地【兵庫県美方郡浜坂町】 山本一幸
フィールド紹介⑦	
14	津堂城山古墳【大阪府藤井寺市津堂】 池田勇介・幸二
同定指南V	
16	ワシグモ科 Gnaphosidae (その4) 加村隆英
23	ワシグモ科 Gnaphosidae (その5) 加村隆英
海外の研究トレンド (5)	
26	最初が最後—ゴケグモ <i>Latrodectus hasselti</i> の雄の配偶戦略 梶元敏也
クモリスト	
29	亀岡市で採集されたクモ 吉田 真
31	加茂町と南山城村のクモ 吉田 真
関西クモ研究会採集会報告	
34	京都府八幡市 石清水八幡宮周辺 (2002 年 6 月 2 日) 赤松史憲
研究・観察報告	
38	ヒトエグモの分布記録 吉田 真
39	社会性ウズグモ (<i>Philoponella</i> sp.) の行動と日周期 吉田 真
46	アマゾン源流の半円網について 吉田 真
49	兵庫県におけるセアカゴケグモの生息状況に関するやや大胆な推理 清水裕行
52	ウズグモとカタハリウズグモが張る様々な形の網 船曳和代
60	Spider Kids
62	Photo-Report クモ学会 加治木町大会 梶元敏也
66	トピック TOPIC トピック 吉田哉さんと谷川明男さんが理学博士に!
68	OPINION 関西発のクモに関するホームページ 清水裕行
72	Essay 重箱通信 (1) 「過修正」と地名の読み方 清水裕行
75	会費納入のお願い／お詫びと訂正
76	編集後記

『くものいと』 発刊20周年。編集の軌跡。

編集者

くものいと編集を担当して

吉田 真

創刊以来の「くものいと」の発行状況を調べてみた。「くものいと」は、1982年8月20日に創刊された。故・八木沼先生がガリ版で印刷されたものである。この号には、総会の決議事項として、「東亜蜘蛛学会会則改正に伴い、会の名称を『東亜蜘蛛学会関西支部』から『関西クモ研究会』に変更」し、「機関誌『くものいと』を年2回程度発行」と記しているが、諸般の事情から、発行は1991年まではほぼ1年に1回に留まった。

号数	発行年月	ページ数	編集者	備考
1	1982/8/20	4	八木沼健夫	
2	1983/7/15	8	清水裕行	
3	1984/11/18	12	清水裕行	
4	1985/8/24	10	清水裕行	
5	1986/7/23	14	清水裕行	
6	1988/9/30	10	清水裕行	
7 & 8	1990/12/31	22	清水裕行	
9	1991/7/25	10	清水裕行	
10	1992/1/29	10	清水裕行	
11	1992/7/2	10	吉田真	
12	1993/2/1	22	吉田真	
13	1993/8/10	15	吉田真	
14	1994/3/10	28	吉田真	
15	1994/8/10	21	吉田真・畑守有紀	
16	1994/12/31	23	吉田真・畑守有紀	
17	1995/6/1	11	吉田真・畑守有紀	
18	1995/7/31	73	吉田真・畑守有紀	追悼号
19	1995/12/31	19	吉田真・畑守有紀	
20	1996/6/30	23	吉田真・畑守有紀	
21	1996/12/31	17	吉田真・畑守有紀	
22	1997/6/30	13	吉田真	
23	1997/12/31	28	吉田真	
24	1998/8/10	20	吉田真	
25	1999/1/10	31	吉田真	
26	1999/6/13	23	吉田真	
27	2000/1/15	54	吉田真・船曳和代・榎元智子	カラー表紙
28	2000/7/31	66	吉田真・船曳和代・榎元智子	
29	2001/1/31	79	吉田真・船曳和代・榎元智子	
30	2001/9/15	56	吉田真・船曳和代・榎元智子	
31	2002/2/28	71	吉田真・船曳和代・榎元智子	

私は、11号から編集を引き継ぎ、畑守有紀さんとともに、なんとか年2回の発行を実現させた。この間、1995年には「八木沼健夫先生追悼号」も出した。追悼号は私・畑守さん・金野晋さんで編集し、格安の印刷屋に持ち込んだ。73ページという大部のもので、原稿集めをはじめとして、編集作業は大変であった。くたくたに疲れたのを覚えている。

この時代の「くものいと」は薄っぺらなもので、追悼号は別として、ひどい時は10ページという貧弱なものであった。最大の原因は原稿が集まらないことで、困ったときは自分が原稿を書かざるを得なかった。

ニュー・ミレニアムに入って、船曳さん・榊元さんという有力な編集部員を得て、「くものいと」は大化けした！徳本さん言うところの、「平成の大刷新」である。表紙はカラーとなり、ページ数は倍以上となった。これはもちろん、女性2人の力によるものである。

私は「ものぐさ太郎」や「三年寝太郎」の信者だから、人にもものを頼むのはおっくうである。原稿を頼むくらいなら、自分で書いた方が早いと思っている。とくに電話は苦手である。顔が見えないのに声が聞こえるなんて、まるでキリシタンバテレンの魔術みたいで（いつの時代の話だ？）、気持ちが悪い。その点、彼女らはさっさと企画し、どんどん依頼し、原稿を集めていく。うーむ、すごい。

というわけで、ここ5回連続して50ページ以上の「くものいと」を作ってきたのだが、ここらが限界という気がしてきた。私ももう馬力がないし、原稿不足は深刻である。「KISHIDAIA」と「くものいと」を合体させましょうという東京蜘蛛談話会からの甘い誘いに、うかうかと載ってしまいそうだ。どうしよう？ 皆さん、考えてください。

編集者

「くものいと」創刊のころ

清水裕行

1. 関西クモ研究会機関誌「くものいと」の創刊

「くものいと」が創刊したのは1982年であるから、今年は20年目に当たる。早いものである。私は創刊号から7号の編集段階までを担当したので、特に感慨深いものがある。1982年に「関西クモ研究会」が発足した段階で、機関紙を年1回発行することになり、私が編集幹事をおおせつかった。話し合いの結果、会の名称は「関西クモ研究会」、誌名は「くものいと」と割とすんなり決まった。これは八木沼健夫先生の還暦記念文集の書名であった。ただし、こちらは「蜘蛛の糸」であったが。なお、この後に発行された古希記念資料集にもこの名は用いられた。

創刊号は「きじぷりんと」から謄写版の4頁だてで発行された。トップ記事は野戸章・西川喜朗両氏のヤマトホラヒメグモの採集記録で、これが1頁。八木沼先生のコラム「細蟹舎通信」も1頁を占めた。これは「細蟹舎通信」としては第4回で、それまでは先生御自身で印刷して関係者にのみ配布した情報集である。残りの2頁には会の活動報告と私の埋草2編を掲載した。

この印刷は先生の義弟である故貴治昭郎氏が格安で引き受けてくださったものだが、それでもこの調子でいくと会員が増加しても、1年に10頁程度のものが限度であった。それではスペースの制約が圧力になって、会員に気楽に投稿してもらえる雑誌にはなりにくいと考え、出血覚悟で御協力いただいた貴治氏やお世話くださった八木沼先生には誠に申し訳なかったが、より安価で、大部の印刷ができる方法を模索することにした。幸い、私の自宅にワープロがあったため、これを活用して、印刷は西川喜朗氏のお世話で追手門学院大学のコピー印刷（版下を複写機で謄写原紙に焼き付ける方法）を利用できるようになった。2号から5号までは父のワープロ"My Oasis"で版下を作って印刷した。この時期はワープロが普及し始めた時期で、専用機は100万円以上という時代であった。父のワープロは普及型で半分の約70万であったが、文字は16ドットという電光ニュース並のものであった。父はライフワークの論文執筆のために購入したのだが、よくも個人でそのような物を買ったものと思う。その後パソコンを入手して「一太郎」を使った24ドット印字に切替えて6号を発行した（1988年）。

2号以降は手元でワープロ編集したので、小出しに打込みができ、プリンタで印刷したものがそのまま版下として使えたので、省力的で締切時期にも融通が効いた。一方、原稿集めには苦勞した。連載としては八木沼先生の「細蟹舎通信」のほかに寺田孝重氏から「茶園のクモ」をテーマにした長期連載をいただいた。また、大崎茂芳氏はクモの糸の物性に関するユニークな記事を投稿してくださった。残念ながら、期待していた関西地方を中心とした分布資料（リスト等）はあまり来なかった。分類関係の啓蒙記事も企画したのだが、八木沼氏が各種の情報を提供してくださった以外には原稿が集まらなかった。これは編集者側の宣伝不足と、当時研究職に就いた方々が役職に就くなど、ちょうど多忙な時期にさしかかったことが原因しているものと思われる。ほかには私が幹事として活動報告とニュースを書いた。

会誌の発行が遅れがちになったため、会員の中からも心配の声が上がり、「製版作業（つまりガリ切り）を分担してはどうか」という提案もあった。しかし、原稿が入手するごとにワープロ入力していたので、これが遅れの原因ではない。本当の原因は原稿の集まりが悪いことだと、改めて協力を求めた。会員に頁を請負ってもらう、つまり、担当頁分の取材・執筆を分担してもらってはという案も出たが、結局、執筆者が現われないことには実行できず、この案も立ち消えになった。このアイディアは「細蟹舎通信」のような個人コラムを奨励することで実現可能ではないかとおもっている。例会の際には必ず協力を要請したが、その場では「お願いします」以上の切り込みはできず、具体的な対応は不十分であった。

この時期までは私が唯一の幹事として編集と例会の運営を担当していたが、一人ですべてを担当するのは無理があるということで、1989年に職掌分担が決まり、吉田真氏が編集担当となり、すべてを引継いでいただいた。会員が増え、行事も多様になる中で、発行回数も年2回となって、編集委員の御苦労は初期の比ではなかったと思う。激務のかたわらアイディア満載の会誌を発行してくださった吉田さんには感謝の言葉もない。榎元智子さん、船曳和代さんが加わってからは、欄外に誌名・号数を表示するなど、会誌の体裁がととのい、大変読みやすくなった。内容が第一であることは言うまでもないが、出版物としての外見も重要であることがわかる。最近では懸案であった分布資料が増えて、関西のクモを知りたい読者にとってより有益なものとなってきた。

2. 「くものいと」前史

「関西クモ研究会」と「くものいと」を語る際には、その前身であった会に触れなくてはなるまい。「関西クモ研究会」が発足した際には、特に発会式のような行事はなく、自然発生的に動き出した感がある。というのは、「関西クモ研究会」は実質的にはそれ以前に存在した「東亜蜘蛛学会関西支部」が改組したものといえるからである。学会の規約が改正され、「支部」が廃止になったため、独立した同好会として再出発することになった。

「関西支部」自体の歴史は古く、1952年の誕生である。後に学会の補助機関誌となったAtypusは元々「関西支部」の機関誌であった。どういう事情かは知らないが、当時の学会機関誌Acta Arachnologicaからはクモの記事が減って、サソリその他の蜘蛛形類と多足類が中心となっていた。この傾向は1940年代に入ってから見られたので、戦中戦後の不安定な時期に真正蜘蛛類を研究する学者の活動が鈍っていて、執筆活動ができたのは故高嶋春雄氏等の限られた分野の学者だけだったためかもしれない。この状況を補うために故八木沼健夫氏を始めとする関西の会員が「関西支部」を結成して、謄写版のAtypusの発行を始めた。ほかに不定期刊行で活版のArachnological Newsも2号まで発行された。当時の会員には故小野武比古氏・米田宏氏が名を連ねていた。「コムラウラシマグモ」に名を残す小村忠夫氏は有力なメンバーのひとりであったが、残念なことに支部の発足を前に逝去され、Atypus第1号には遺稿が掲載された。

当時、会の名前は「関西支部」であったが、機関誌を全国の学会員が購読したので、Atypusは実質的には全国誌であった。その後、1955年に学会本部が大阪に移転された

のを機会に、「支部」を解消し、Atypusは学会の補助機関誌となった。また、戦前にはAtypusの役割を果たしていたActa Arachnologica（創刊当初は情報誌的性格が強く、ここに投稿して力をつけたアマチュア会員がLansania等、外部の学術雑誌に討って出るという方針だったようである）は欧文の原著論文中心の雑誌となった。この頃には蜘蛛学者が続々復帰したため、Actaも以前のように真正蜘蛛類中心の雑誌に戻った。この時期までの組織を便宜的に「第1次関西支部」と呼ばせていただく。

この時期の学会の活動は機関誌出版中心で、役員との会議以外はこれといった行事はなく、日本動物学会の大会の際に出席者が懇談会を開いたり、来日した外国の学者の歓迎会が随時持たれたりした程度であったようである。関西でも1965年に韓国の白甲鏞氏が来日された際に八木沼氏が連絡がとれる範囲に声をかけ、7名が集まった。（私はすでに入会していたが、当時は八木先生と面識がなく、自宅に電話もなかったために連絡がとれず、これには参加していない）この頃になると会員間の交流が盛んな地域で、誌上交流にとどまらず、会合当を通じて情報交換しようとする機運が盛り上がり、まず、1968年に首都圏で「東京蜘蛛談話会」が発足し、1969年には機関誌としてKishidaiaが発行された。関西でも第1次関西支部以来の小野氏・米田氏に加えて、本多重義・西川喜朗・田中穂積・野戸章・垂水有三氏等の若手（当時）が活動を開始しており、それまで個人的に連絡を取り合っていたのを継続的な会に発展させることになった。1968年9月に第1回例会を開催し、10名が参加した。私はこの次期に八木沼先生初めてお目にかかり、会合に参加するようになった。首都圏と関西では盛んに懇親会や研究発表会を開き、このような実績が1969年の第1回東亜蜘蛛学会全国大会の開催につながったといえよう。

首都圏での集まりが独立した同好会の形をとったのに対し、関西では学会支部とした。13年ぶりの復活ということになる。これを「第2次関西支部」と呼んでおく。当時の方針として機関誌は発行せず、例会以外の行事は特になくというゆるやかな連絡組織のような会であった。従って、役員も例会の準備と連絡を担当する幹事が1人で、会長も置かなかった。この点で会としての組織を確立した東京蜘蛛談話会とは対照的であった。普通、学会の地方支部というのは全国を地域割りして、各所に設置し、全会員は自動的にいずれかの支部に属するという仕組みらしい。一方、「関西支部」は蜘蛛学会唯一の支部で、会員も自由参加であった。支部でありながら全国のクモ研究者の大部分が参加した第1次支部とは別の意味で変則的であったといえる。小規模な東亜蜘蛛学会では画一的な組織運営は現実的でないという判断も働いたものではないだろうか。

支部で機関誌を発行しなかったのは本部機関誌のActa ArachnologicaとAtypusがあり、これを盛り立てていこうという方針であったためであろう。この頃、Acta ArachnologicaがA5版からB5版に変わって間も無い時期だったが、論文の掲載が少なくなっていた。一方Atypusはそれまでの謄写版（ガリ版）からタイプ孔版に変わり、以前ほど気楽に投稿できる存在ではなくなった。これは単に体裁だけの変化ではなく、学会の運営がより組織的になったという背景がある。大阪に支部が移って以来、庶務・会計・編集と八木沼氏が実質的にすべてを担当しており、個人的負担が大きかったが、反面融通も効いた。幹事が1人で会長も存在しない（象徴的存在として福井玉

夫博士が会頭を勤めておられた) ところはひところの「関西クモ研究会」の拡大版である(というよりも、研究会が学会の軌跡をなぞってきたといえよう)。しかし、第1回大会を機に機構の整備が進められ、また、1971年の福井会頭の逝去を機会に会長制(会頭制とどう違うのかよくわからないが)に移行し、八木沼氏が初代会長に就任した。それまで一人でやっていたことを分業にすると、調整に時間がかかり、締め切り等の規約が厳しくなるのは当然である。機構が組織化すると手続きや条件が厳しくなるのはやむをえないことであるが、そのため、Atypusへの投稿に気後れする会員が出たのは否めない事実であろう。Acta Arachnologicaの記事が減ったのはそれまで教員等、いわば在野の学者であった人が多かったのが、大学や博物館の研究職が増え、機構内に自身の発表の場が得られるようになった事情も関係していたと思う。

気楽に発表できる場がないという現実の打開方法として、東京蜘蛛談話会では独自の機関誌に成果を集中し、それをActaやAtypusの内容向上に繋げるという道を選び、関西支部では各自の研究活動を支援し、その成果を学会誌に反映させるという方法を選択したといえよう。この時期、首都圏・関西だけでなく、全国各地で地方同好会が発足して独自の機関誌を発行しだした。八木沼先生はそれらの機関誌発行のためにエネルギーが分散し、Atypusが空洞化するのを恐れたのだと思う。

「関西クモ研究会」発足時に機関誌の発行に踏切ったのは、「支部ならば機関誌は出さない。研究会なら出す」という原則があったわけではなく、状況の変化により機関誌が地方会の活動に必要なになったと認識されたからであろう。学会機関誌のレベルがますます高度化して、初心者がいきなり投稿できるものではなくなれば、そこに至るまでのワンステップを地方会で準備するのが妥当な対応といえる。結果的には「東京蜘蛛談話会」の選択が現実的であったといえよう。私が「くものいと」の編集の件で八木沼先生に御相談した際に、先生は「大論文はActaに、中論文はAtypusに、小論文は地方機関誌に投稿するようになれば、各自の実力を養うことができるだろう」と言われた。その時点で、関西で地方会誌編集のノウハウを持っていたのは八木沼先生だけ(西川氏以下のかつての若手は学会機関誌のしかもタイプ印刷に移行して以後にAtypusの編集に参加している)というのは少々痛手であった。八木沼先生に御指導をいただきつつ、手探りで発行を続け、「こういう内容がこの機関誌にふさわしい」との結論が出るまでは相当な時間を要した。この点では1969年に創刊したKishidaiaに大きく遅れをとったと思う。

それでも、遅れを取り戻すための努力は実を結びつつある。特に、榊元さん・船曳さんのお二人が編集にかかわるようになって以後、特集を組んだり「フィールド紹介」などシリーズ記事を企画するなど興味深い記事が増えた。内容もさることながら、このようにタイトルを全面に出すと、読者に編集側の意図がわかりやすく、自発的に参加(投稿)しようという意欲が生まれるものである。また、ベテラン会員による分布資料の発表が増え、古くからクモ屋の活動が盛んな割にはデータがあまり公表されていない関西地方のクモ相理解のための一助となっている。リスト類を発表する際には、特に長く研究を続けていて標本の多い人は、“どこどこに採集旅行に行った時の記録”とか“今日までの自宅周辺で採集したすべての記録”とかいった、とかく「売り」を提示しないと書きにくいという気分支配されやすいものである。「目についた標本

のデータをひとつかみ、とにかく発表します」いう姿勢は、私自身もこのような脅迫観念を払拭するよいきっかけとなる。ことにベテランの研究者が提供するデータには1970年代のものもあって、昨今の環境の激変の影響を知るための比較資料としての役割が期待できる。

なお、最近ではページのアレンジにも配慮がなされている。欄外に誌名や号・発行年月を配しているが、これは部分的にコピーした際には便利であるし、誌面も引き締まる。このような一見些細な工夫で本誌は確実に読み応えのあるものに成長していると思う。

今後は私も一会員として投稿や提案の形で「くものいと」の内容向上のために協力していきたい。(尤も、前者に関しては締切を無視するなど編集担当者には多大な迷惑をかけているが) 編集者としての経験から提言したいことがいくつかあるが、これは機会を改めて述べさせていただくつもりである。

最後に現編集担当者の吉田さん、船曳さん、榊元さんには心からお礼を述べるとともに今後のさらなる活躍を期待したい。「会員皆の力で機関誌は作られる」のは真実であるが、同時に現場の担当者に負担が集中するのも事実である。これを軽減するにはやはり投稿と提案が有効であろう。他の会員のみなさんにも、誌上で果敢に発言されることを希望する。

2000年1月に発行された「くものいと27号」。ここから、それまでとはまったく違った新たな「くものいと」が出発しました。私としては、この変革は大歓迎でした。読み応えがグッと増したと感じたのは、私だけではないはずです。Kishidaiaも同じですが、同好会誌はそれぞれの地方から発信する情報をもっとも大切だと思います。自分達が住んでいる場所の自然、とりわけクモに関するさまざまな出来事について記録したものが掲載されることが肝要でしょう。27号以前の会誌にもそのようなものは多く載っていましたが、この号以降の方が情報量は格段に増したと思います。そして、「くものいと」ならではの企画が、各号の巻頭を飾る「特集」でした。「クモリスト」「クモを採る」「採集に行こう!」「クモを飼う」など、クモ愛好家そして特に初心者向けの興味をひく好企画だったと思います。ただ、はじめから少し心配していたことがありました。それは、「特集ものは息切れをしがちではないか」というものです。年2回の発行といっても編集を担当する方々の苦労は並大抵ではありません。ひとつの号を仕上げると、すぐに次の企画を考えなければならなかったでしょう。特集の企画ができて、原稿を依頼してもなかなか締切までに原稿が届かなかったり、時には書いてもらえなかったりとご苦労があったに相違ありません。

そこで、提案ですが。「特集」は年1回として、他の1回は31号のように寄稿を中心としたものにしたらどうでしょうか。そうすれば、編集担当が「企画をひねり出す」時間的、精神的な余裕が今よりはずっと増すような気がします。原稿を集める苦労はたぶんどのようなものにしても減ることはないでしょう。だからこそ、せめて時間的・精神的な余裕をいくぶんか広げられたらと思います。「おおきなお世話だ、ほっといて」と言われれば、こんな有り難いことはありません。私としては、「くものいと」の特集をいつも楽しみにしていますから…。ただ、この狭い愛好家の世界の常として、一度、編集などの役員を担当すると半永久的に続くことを覚悟せねばなりません。善し悪しは別として、このプレッシャーに耐えることは結構きついと思います。メンバーの交替を適宜行なえれば良いのですが、ままならないのが「この世界の常」でしょう。やればやったで注文や批判もそこそこ受けるものです。「辞められるものなら、辞めたいが…」という思いを、懐の奥にしまいこんで封印し、今日も編集に向かうのがこの仕事に携わるものの「掟」なのかも知れません。いつのまにか、私自身のとんだ愚痴にもなってしまったようです。ここに書いたことが、私の杞憂に過ぎなければ良いのですが、検討に値することでしたらお考えいただければ幸いです。

クモの同好会誌は、いま第二次の活動期を迎えているような気がします。第一次のブームは、1970年頃でした。各地に相次いでクモの同好会が誕生して会誌が発刊されるようになりました。そして、その後はそれぞれの会によって異なる形にせよ幾多の紆余曲折があり、消長があったようです。けれども、21世紀にまで多くの会は生き長らえ、ここ数年間にみられるようなクモ同好会の第二次黄金期(?)に至っているように思えます。東京クモ談話会の会誌Kishidaiaもここ数年間は、100ページを超す号がず

っと続いています。かつては、記念誌でもなければ考えられないページ数です。しかし、これとてずっと続くとは考えていません。栄枯盛衰は世の常、やがて少なくなることもあるでしょうが、「継続こそすべて」ではないでしょうか。それには、会を支えてくださる会員や役員が「あまり疲れないでやる」ことだと思います。クモの採集や観察を楽しみに入会したのであって、役員をやるために入ったはずはありません。まして、会の運営をめぐるやっかいな会議や議論を楽しみにしている会員がいるはずもありません。人の集まりですから、それをまとめる運営が必要になるでしょうし、時に議論もあるでしょう。けれども、互いに判り合い、譲れるところは譲りあって、会に参加することが楽しみになるようなものにしたいと思っています。

「東京には負けへんでー」というのが関西での合い言葉のようですが、我々もまた同じ、ともに競い合ってクモについてのさまざまな楽しい議論の数々を、これからも会合や会誌を通じて活発に行なっていきたいものです。そして、いままで以上に各地の同好会同士との交流が盛んになったらと願っています。おおいに遊びましょう! 楽しみましょう! さらに、飲みましょう!

「くものいと」を取り出し、改めてその20年の歴史をたどってみると、世の中の移り変わりの激しさが如実に描かれているようで面白い。

創刊号(1982)は、八木沼先生お得意のガリ版刷りである。内容も初期のAtpusを思い出すなつかしいスタイルである。

1983年から、編集者が若い清水裕行さんへ変わった(ようである)。すると、突然第2号はワープロ書きになったのでびっくりした(少し大袈裟かな?)。ワープロは、当時としては画期的な新兵器?(と、清水さんは編集後記に記している)であったからである。蛇足ではあるが、筆者がワープロなるものを初めて購入したのは、それから5年後、1988年(遅れているウ~!などといわないで)のことである。

第20号からは表紙が付けられ会報らしくなった。

さらに、第27号から厚手の用紙を使ったすばらしい表紙に変身したのである。この号を受け取ったとき、ああ、印刷屋に出して立派になったな!と思ったものである。ところが、表紙はもちろん、印刷も製本もすべてお手製だというから驚きである。有り難さで、軽い冊子が、急に重く感じた(オーバーかな?)ものである。(改めて、編集の吉田・船曳・梶元さん、ありがとうございます!)

また、これを契機に内容も一新された。とくに、専門家(田中さん・加村さん)の手による「同定指南」はすてきな企画であり、筆者のごとき浅学者にとって、涙の出るくらい有り難いものである。ぜひ続けて欲しいものである(第31号にはなかった。なぜ? 淋しい~!)

そのほか、第28号から始まった「特集」では、この号の「クモを採る」、第30号の「蜘蛛を飼う」などのテクニク的な内容が平常すぐに役立つ貴重である。次号はどんな「特集」を組もうか?と編集者にとっては頭の痛いことではあるが、これも続けていただければ、会員の調査・研究の推進策?となること確たるものである。

ところで、少しだけ、ほんの少しだけ気になっていることがある(生意気いって、ごめんなさい。編集の苦勞が判るのですぐ謝ってしまうこの気の弱さ.....)。それは、第31号から出来た「寄稿」というジャンルのことである。「寄稿」の意味を手元にある国語辞典(広辞苑)で調べてみると、「原稿を新聞・雑誌などに載せるために送ること。また、その原稿。」とある。この定義に当てはめると、この号の「フィールド紹介」「自然観察シリーズ」「クモリスト」、すべてが「くものいとに載せるために送られてきた原稿」すなわち「寄稿」になってしまうように思うが、やはり屁理屈(つまらない理屈・道理に合わない議論)だろうか。

考えてみると、内容がすばらしければこんなことは、「大海の眇(びょう)たる島」とでもいふべきことかも知れない。一方から見ると、こんな微々たることに難癖を付けなければならないほど内容が充実している、と言えるからである。

取り留めのないことを書き綴ってしまった(反省!!)。最後に「くものいと」のますますの充実・発展を祈念して筆を置くことにする。

フィールド紹介⑥

山陰海岸国立公園内 城山園地

【兵庫県美方郡浜坂町】

山本一幸

兵庫北部、但馬地方の西の端に位置する浜坂町。その市街地の西側に三角形の山が二つくっついて海に張り出している。戦国時代、この山の頂に武将塩治周防守の城があった。天正8年(1580)豊臣秀吉が但馬を攻めた際、ついでに攻めこまれた。秀吉得意とする兵糧攻めにあうが、なかなか降参しない。そのわけは海側に秘密の抜け穴があって、そこから食料を搬入していた。しかし、麓の老婆の密告により秘密がばれてしまい、あえなく落城してしまう。そんな歴史の逸話とともに、山陰海岸国立公園内に位置するこの地は、風光明媚な海岸美と豊かな自然を満喫するにはもってこいの場所である。「城山園地」と名前がつけられ、町民の憩いの場となっている。

観光パンフの案内のような前書きとなってしまったが、今回紹介する「城山園地」は、今から25年前、クモの採集を始めて間もない浜坂高校生物部のころより何度も通った、私にとって思い入れの深いフィールドである。最近は残念ながら、あまり訪れることがなくなったが、この紹介記事を書くにあたり、2002年7月20日小学2年生の息子を伴って自然観察をしながら久しぶりに徒歩で園地内の周遊道を巡ってみた。

JR浜坂駅から出発して、駅前の道路を北西に進む。浜坂小学校の前の陸橋を渡り、国道178号線にそって進むと、やがて急なカーブの坂道になり、そこを上りきったところに城山園地の入り口がある。少し行った先に「浜坂ユースホテル」があり、さらに山腹のテラスになった駐車場までジグザグの車道がついている。駅からこの駐車場まで徒歩で47分かかった。

テラスからは眼下に諸寄漁港が望まれる。山の北西側に遊歩道がついており、駐車場から10mほど進むと山頂への道と、山の中腹をぐるりと周遊する道に分かれる。山頂への道は、頂に建つ中継アンテナの管理用道路を兼ねており、コンクリート舗装となっている。山頂を目指して、つづら折の道を登ること25分。標高175mを登りきると、城のあった山頂の平坦な地に中継アンテナの建物がある。その横を通り、ホオノキやカシワ、コナラなどの木立を抜けて南東側に出ると、浜坂の市街地と岸田川の河口が一望にできる。

山頂から下山して分岐を右に折れ、「近畿自然歩道」に指定されている周遊道へと進む。海に面した北西側の中腹を巡る道は、25分ほどで次の山との鞍部に到着する。左に「崩れ浜」へと下る道がある。

崩れ浜へ下る道は、最近利用する人が少ないのかカラムシやアザミ、浜の近くではメダケやノイバラが生い茂り、通行に難儀した。下り始めて30分でようやく崩れ浜に到着、小さな砂浜であるがハマゴウやスナビキソウ、ネコノシタ、ハマニンニクなどの貴重な海岸植物が群生する。海に向かって右側、ユウスゲが群生する岸壁の下に、人が立って入れる高さの奥行き15mほどの海蝕洞窟がある。

浜から再び周遊道へもどる。鞍部から先は山の南東側を巡る。しばらく進むと郷土が生んだ登山家「加藤文太郎のふるさとの碑」のある尾根に着き、そこから先は道が細くなり、山の北東を巡るようになる。やがて海に面した痩せ尾根に出る。その先端から、岩塊の間をぬける急なコンクリート階段を下ってゆくと、眼下に矢城ヶ鼻灯台を目にするようになる。鞍部から灯台まで45分の道のりだった。灯台からは、山が海まで迫った山陰海岸特有の地形が眺望でき、今下ってきた道を振り返れば、右手に「千賊岸壁」の迫力ある眺めが見ものである。

灯台より、落石に注意しながら海沿いの道を下ると、10分ほどで浜坂漁港側からの登り口に着く。テトラポッドの建設現場に隣接しているので通行に注意しながら帰路へ。港沿いの車道を通り、「孤高の人」の文学碑がある交差点を直進して、クロマツの防風林にそって進む。浜坂町役場庁舎前を通過して、浜坂小学校から駅の方角へ。ようやく振り出しに帰りついた。全行程の所要時間は、休憩時間などを除き、4時間17分だった。

城山園地の植物は、林相としてはケヤキやエノキが主体となっており、カシワやコナラ、カラスザンショ、ヤマザクラ、ミズキ、オニグルミなどの落葉樹のほか、タブノキ、ヤブニッケイ、スダジイなどの照葉樹が混生している。また、駐車場のある南側の山腹には、道路に沿って多くのソメイヨシノが植えられている。低木としては、アオキやキブシ、ホソバイヌビワ、バイカウツギなどもあり、海岸部ではトベラ、マルバグミなどが見られる。矢城ヶ鼻灯台の周辺の岸壁にはタンゴイワガサやワカサハマギクの群生地があり、天然記念物に指定されている。今回の観察で目についた草花は、キツネノカミソリ、カワラナデシコ、ヨメナ、ツリガネニンジン、マンネングサ、ウバユリであった。

今回の観察で、野鳥ではメジロ、シジュウカラ、エナガ、コゲラ、トビ、ハシボソガラスが確認できた。特にメジロは個体数が多く、ソメイヨシノなどの枝先を飛び回っていた。いたる場所でタヌキの通り道や落ち葉を掻いた跡が確認され、イタチかテンと思われる糞が多数あった。

昆虫では、季節的にニイニイゼミやアブラゼミが多く、モンキアゲハ、キアゲハ、アオスジアゲハなど大型のアゲハチョウの仲間が多く目につき、他にモンシロチョウやキチョウ、コムスジ、ヒカゲチョウの仲間が見られた。甲虫ではラミーカミキリ、キマワリ、コガネムシの一種。その他としてクサカゲロウの一種を見つけた。

さて、本命のクモであるが、周遊道の周辺で最も多く網を張っていたのはジョロウグモの幼生とオオシロカネグモであった。それ以外に目撃したクモをノートから拾い出して列記してみると、イオウイロハシリグモ、クサグモ、ワキグロサツマノミダマシ、サツマノミダマシ、コゲチャオニグモ、ヨツデゴミグモ、トゲグモ、コガタコガネグモ、コガネグモの一種、コシロカネグモ、オオヒメグモ、ヤマジドヨウグモ、オニグモ、チリイソウロウグモ、ギンメッキゴミグモ、ゴミグモ、センショウグモ、ヤチグモの一種、アシナガグモの19種であった。

高校時代に筆者が報告した城山園地のクモは32種である(山本, 1976・1977)。その中には、但馬地方で数箇所しか採集されていないキノボリトタテグモの記録もある。城山園地は、山地と海岸部の両方をあわせ持つ変化に富んだ地形と、多数の動植物が

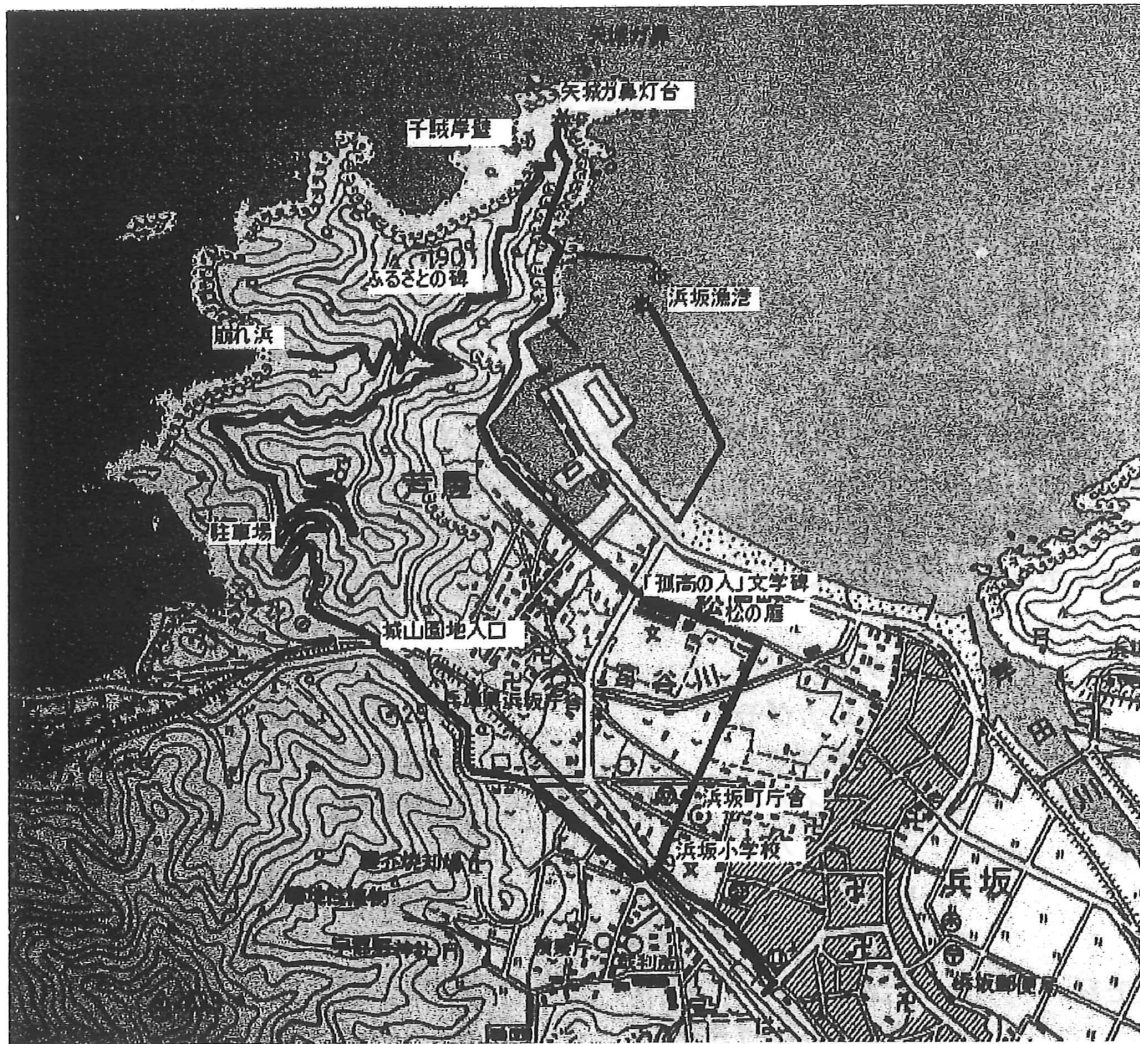
生息する豊かな自然環境を持っている。クモ相もきつと豊かで多くの種類が生息していると考えられるが、その後、まとまった報告はなされていない。

今回の紹介を期に、興味を持たれた方が多く来訪して下り、この地のクモ相がより明らかになれば幸いである。

■参考文献■

山本一幸,1976.浜坂町の蜘蛛.The biological world,(9):73-78.

山本一幸,1977.浜坂町の真正蜘蛛類について.Aculeatus,(10):5-26.



城山園地周辺の概略地図

フィールド紹介⑦

津堂城山古墳

【大阪府藤井寺可津堂】

池田勇介・幸二

津堂城山古墳は4世紀末、古市古墳群の中で最初につくられた前方後円墳です。墳丘の長さは208mで、二重の濠がめぐっていました。(この外濠にあたる所に私達は住んでいました) 現在も内濠にあたる部分は、湿地や小さな沼になっていて、ハナショウブやスイレンが咲き、カヤやイネ科の雑草類は年に3回ほど刈り倒されて地面はいつもフカフカです。国指定史跡の古墳ですが、児童公園や野球練習場もあり、花見の季節にはバーベキューを楽しむ人もいます。タマムシ、ゴマダラチョウ、ニイニイゼミなど、市内に山がない藤井寺市としてはめずらしく、様々な昆虫がいます。勇介自慢の一品、クロトリノフンダマシは内濠のオモダカの葉の上で採集したものです。夏に日当たりの悪い茂みに入ると蚊に刺された跡が50カ所ほど残るのが欠点です。300m×200mあまりの限られたスペースに、桜並木・梅林・雑木林・花畑・湿地・沼・どぶ(全て小さいものですが)などがあり、子供たちは、ザリガニや昆虫などを採って楽しんでいます。西川喜朗先生からクモを標本にする方法を教えていただいた1999年9月から、少しずつ集めたクモの中で名前が確実なものだけをリストにしました。クモ採集会の際に持参した標本を同定していただいた西川喜朗先生、吉田真先生、加村隆英先生、清水裕行先生、大阪市立博物館の標本同定会では座古禎三先生、お世話になりました、ありがとうございます。

ジグモ科	ジグモ	2000年8月29日
	ワスレナグモ	2000年8月29日
ウズグモ科	マネキグモ	2002年8月21日
ユウレイグモ科	ユウレイグモ	2000年8月29日
ヒメグモ科	オオヒメグモ	2001年9月23日
	ヒメグモ	2002年8月21日
	ハンゲツオスナキグモ	2000年8月29日
コガネグモ科	オニグモ	2002年8月21日
	ギンメッキゴミグモ	2000年8月29日
	クロトリノフンダマシ	1999年9月
	ゴミグモ	2002年8月21日
	コガネグモダマシ	2000年7月
	シマゴミグモ	2001年9月23日
	ジョロウグモ	2001年9月23日
	ズグロオニグモ	2000年7月
	ナガコガネグモ	2002年8月21日

	ピジョオニグモ	2001年9月23日
	ハツリグモ	2001年9月23日
ヒラタグモ科	ヒラタグモ	2001年9月23日
タナグモ科	クサグモ	2000年8月29日
	シモフリヤチグモ	1999年11月
	メガネヤチグモ	2000年4月
コモリグモ科	ハラクロコモリグモ	1999年11月
カニグモ科	ヤミイロカニグモ	2000年6月
ハエトリグモ科	アオオビハエトリ	2000年6月

以上25種類です。週に1回以上通っていましたが、いろんなクモに出会い、採集しているのですが、当時勇介は幼稚園児、採集年月不明なクモがほとんどでした。



近鉄南大阪線[藤井寺]下車 北へ徒歩30分
 近鉄バス[小山]下車 北へ徒歩5分

城山古墳には「まほらしろやま」という会館があります。休みの日でもトイレが利用できます。

利用時間：4月1日～9月30日／10：00～18：00

10月1日～3月31日／10：00～16：00

休館日：月曜・火曜・年末年始（12月29日～1月5日）

入館無料

同定指南 V

ワシグモ科 Gnaphosidae (その4)

加村隆英

トンビグモ属複合群

ワシグモ科のなかには、トンビグモ属複合群と呼ばれる属グループがあります。このグループの特徴は、第3, 4脚の転節腹面に浅い欠刻(凹み)(図1)があることです(第1, 2脚の転節には欠刻がない)。ただし、転節と腿節の間の膜質部が転節にかぶさっていると、この形質は観察しにくいので、腿節を背面側に持ち上げて、転節の縁を露出させなければなりません。全歩脚の転節に欠刻がない場合(図2)、あるいは、全歩脚の転節に深い欠刻がある場合(図3)は、このグループには属しません。

このグループには、腹部背面に白い斑紋をもつ種が多く含まれますが、なかには腹部に斑紋がない種もあります。日本からは7属9種が知られています。

トンビグモ属複合群の属の検索

- 1. 上顎前牙堤に3本の歯がある(図4) 2
- 上顎前牙堤に幅の広い牌板がある(図5, 6, 7) 3
- 2. 腹部に白色の斑紋がある ヒトオビトンビグモ属 *Hitobia*
- 腹部に斑紋がない ムモントンビグモ属 *Sanitubius*
- 3. 上顎後牙堤に1本の歯がある(図5, 6) 4
- 上顎後牙堤に歯がない(図7) 6
- 4. 上顎前牙堤の牌板に鋸歯がない(図5) 5
- 上顎前牙堤の牌板に鋸歯がある(図6) ノコバトンビグモ属 *Sernokorba*
- 5. 後中眼間は眼の大きさより少しだけ広い, 中窩は明瞭
- ブチワシグモ属 *Kishidaia*
- 後中眼間は眼の大きさの2倍程度, 中窩は不明瞭
- ホソミトンビグモ属 *Aphantaulax*
- 6. 後中眼間は眼の大きさとほぼ同じ ブチトンビグモ属 *Sergiolus*
- 後中眼間は眼の大きさより狭い タソガレトンビグモ属 *Phaeoecedus*

ヒトオビトンビグモ属 *Hitobia*

上顎前牙堤に3本, 後牙堤に1本の歯があります(図4)。腹部に斑紋があります。日本産として3種が知られていますが、南西諸島にのみ分布する1種はここでは省略します。

ヒトオビトンビグモ *Hitobia unifascigera* (Bösenberg & Strand 1906) (図8-11)

体長は♀ 5.4~7.6 mm, ♂ 3.9~5.3 mm。分布は本州と九州。腹部に1本の白い帯があるのが特徴です(図8)。

シノノメトンビグモ *Hitobia asiatica* (Bösenberg & Strand 1906) (図12-15)

体長は♀ 5.5~7.8 mm, ♂ 3.9~4.3 mm。分布は本州と九州。腹部に独特の形の白い斑紋があります(図12)。

ムモントンビグモ属 *Sanitubius*

上のヒトオビトンビグモ属と同様, 上顎前牙堤に3本, 後牙堤に1本の歯がありますが, 腹部は一様に褐色で斑紋がありません(図16)。

ナミトンビグモ *Sanitubius anatolicus* (Kamura 1989) (図16-19)

体長は♀ 5.3~7.3 mm, ♂ 3.8~5.5 mm。分布は本州, 四国, 九州。韓国からも記録があります。

ブチワシグモ属 *Kishidaia*

上顎前牙堤に幅の広い牌板があり, 後牙堤には1本の歯があります(図5)。また, 雄の触肢の腿節基部に突起(図23)があることが特徴です。後中眼は次のホソミトンビグモ属ほど広くは離れていません。

ヨツボシワシグモ *Kishidaia albimaculata* (S.Saito 1934) (図20-23)

体長は♀ 6.6~9.7 mm, ♂ 4.4~6.5 mm。腹部前端に横長の白斑, 中ほどに1対の白斑があります(図20)。さらに, 腹部の腹面中央が黄白色である個体が多いようです。腹部前端の白斑はまれに左右に分かれることがあります。八木沼健夫先生が, 本種のシノニムになっている *K. quadrimaculata* を記載するときに用いたタイプ標本では, この白斑が明瞭に左右に分かれています。それで, 腹部に4つの白斑があることから「ヨツボシ」という和名が付けられたのです。また, まれに腹部の白斑がきわめて不明瞭な個体もあります。分布は北海道と本州。ロシアからも記録があります。

ホソミトンビグモ属 *Aphantaulax*

上顎の牙堤の状態は上のブチワシグモ属に似ています。後中眼間は広く, 後中眼の大きさの2倍ほどあります。

ヒメトンビグモ *Aphantaulax seminigra* Simon 1878 (図24-26)

体長は♀ 5.5~10.4 mm, ♂ 3.7~6.6 mm。腹部前端, 中ほど, 後端に白帯があります(図24)。本種は旧北区に広く分布していますが, 国内ではなぜか, 南西諸島の西表島だけで採集されています(現時点で雄のみ)。

ノコバトンビグモ属 *Sernokorba*

上顎前牙堤には鋸歯のある牌板があり, 後牙堤には1本の歯があります(図6)。

マエトビケムリグモ *Sernokorba pallidipatellis* (Bösenberg & Strand 1906) (図27-30)

体長は♀ 5.1~8.2 mm, ♂ 4.2~6.2 mm。腹部に3本の太い白帯があります(図27)。ただし、標本によっては、この白帯が不明瞭なことがあります。八木沼先生の図鑑では腹部に斑紋がない状態で描かれています。分布は本州, 四国, 九州。韓国と中国からも記録されています。本種の和名の語尾が「ケムリグモ」になっているのは、本種がかつて、ケムリグモ属の下に扱われていたことによるものです。

ブチトンビグモ属 *Sergiolus*

上顎前牙堤に幅の広い牌板があり、後牙堤には歯がありません(図7)。後中眼間の距離は眼の大きさと同程度です。

ホシジロトンビグモ *Sergiolus hosiziro* (Yaginuma 1960) (図31-34)

体長は♀ 6.0~7.9 mm, ♂ 4.8~5.3 mm。腹部前端と後端に横長の白斑, 中央に1対の白斑があります(図31)。分布は北海道と本州。韓国からも記録があります。

タソガレトンビグモ属 *Phaeocedus*

上顎の牙堤の状態は上のブチトンビグモ属に似ています。後中眼間は狭く、眼の大きさの半分以下です。

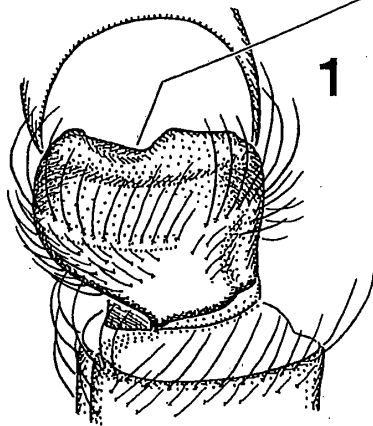
タソガレトンビグモ *Phaeocedus braccatus* (L. Koch 1866) (図35-37)

体長は♀ 4.5~6.9 mm, ♂ 4.0~5.1 mm。腹部に3対の白斑があります(図35)。本種は旧北区に広く分布していますが、国内では今のところ、長野県と岡山県で雄が1匹ずつ採集されただけです。

補足：ヨツボシワシグモとホシジロトンビグモの区別

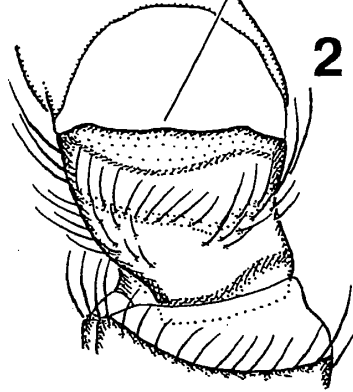
これらの2種は、腹部の白斑のパターンがよく似ています。成体であれば、外雌器や雄の触肢によって容易に区別できますが、未成熟個体ではむずかしいかもしれません。検索表に挙げたように、上顎後牙堤の歯の有無によって区別するのが確実ですが(歯があればヨツボシワシグモ, 歯がなければホシジロトンビグモ), 下顎の形態によっても見当をつけることができます。図38, 39を参照してください。

第3,4脚転節腹面に浅い欠刻



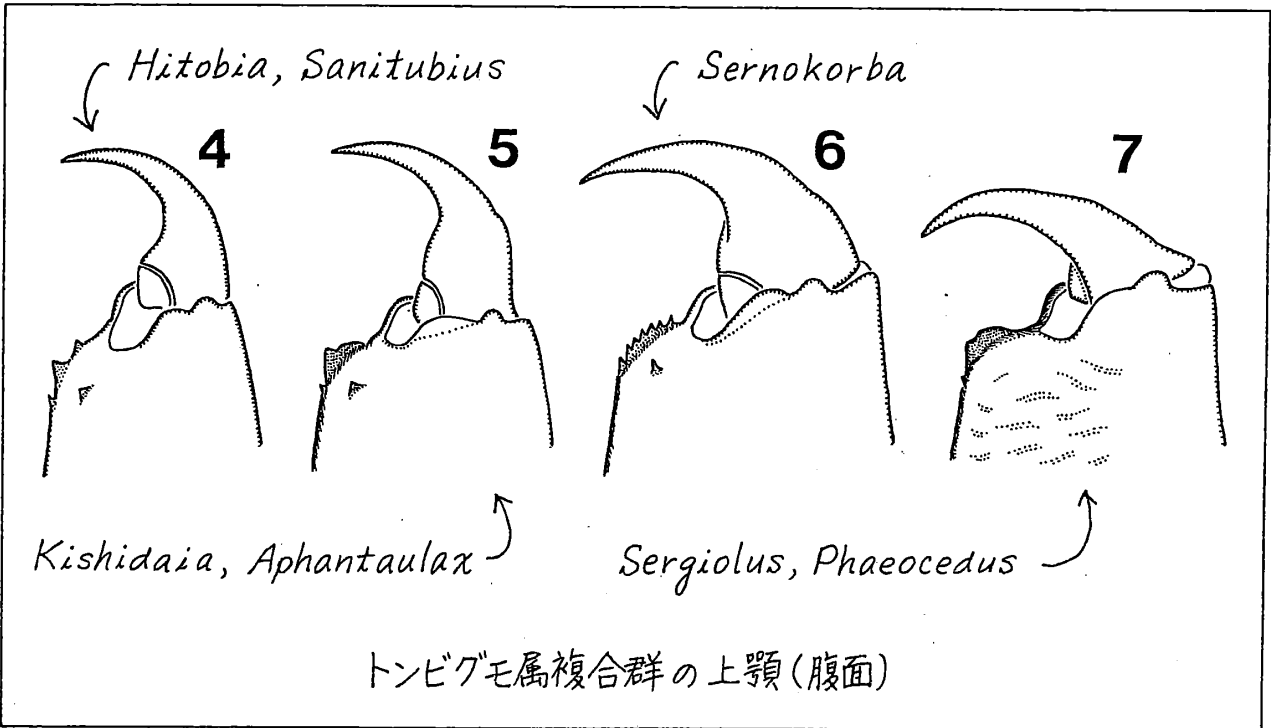
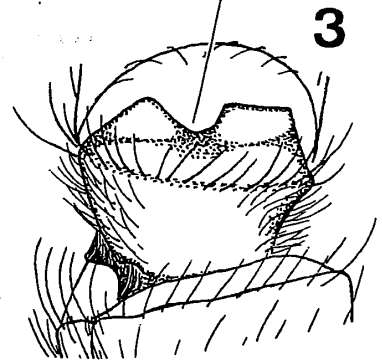
トンビグモ属複合群

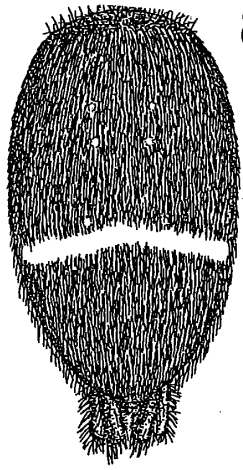
欠刻なし



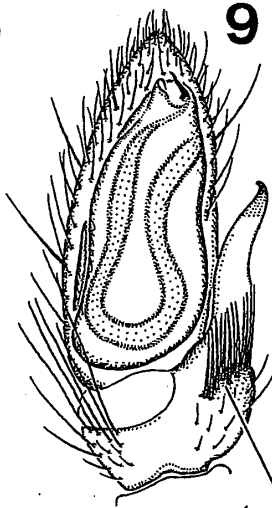
トンビグモ属複合群ではない

深い欠刻

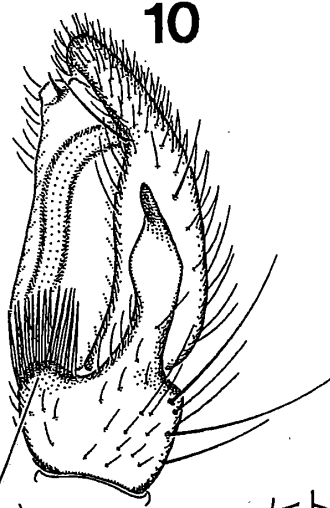




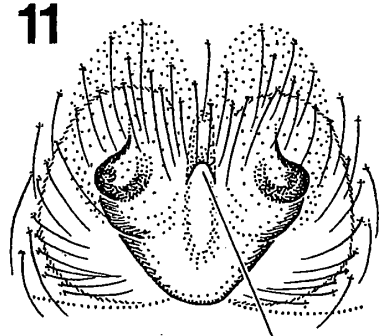
8



9



10

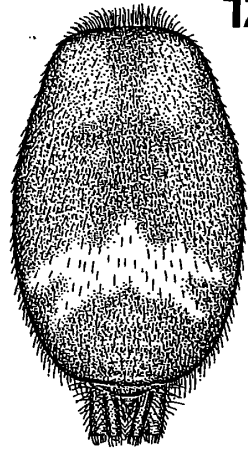


11

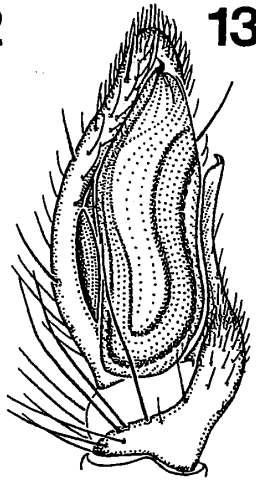
縦向き
の穴

剛毛が
密生

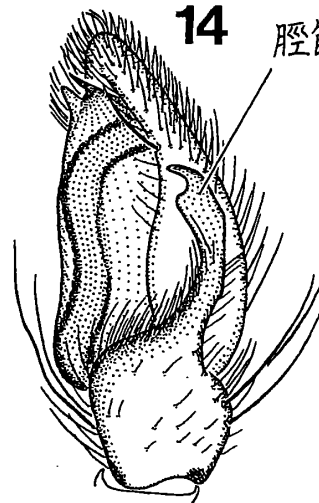
ヒトオビトンビグモ



12

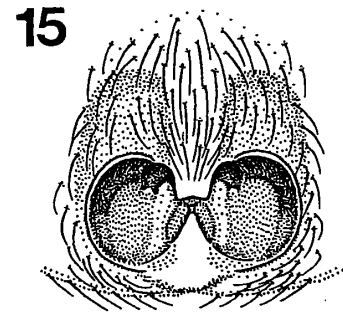


13



14

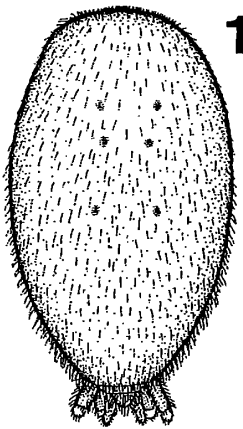
脛節突起の形が
変わっている



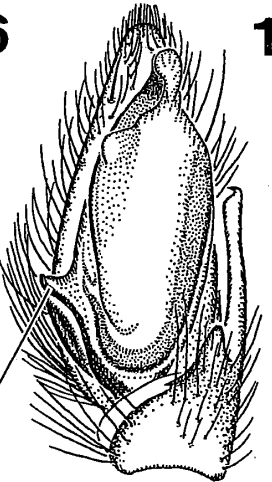
15

めがね
みたいな形

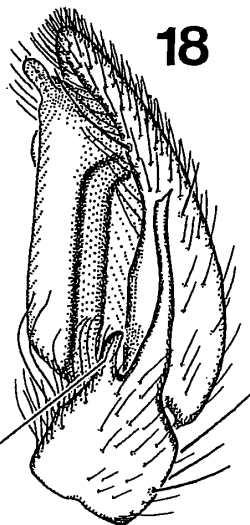
シノノメトンビグモ



16

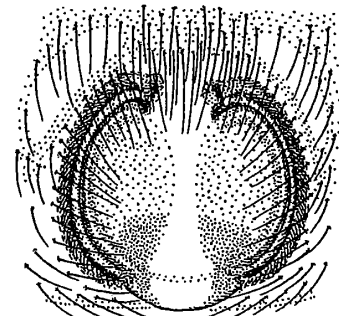


17



18

19

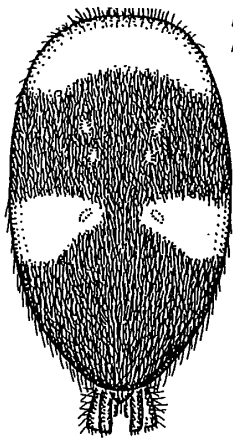


全体に丸い

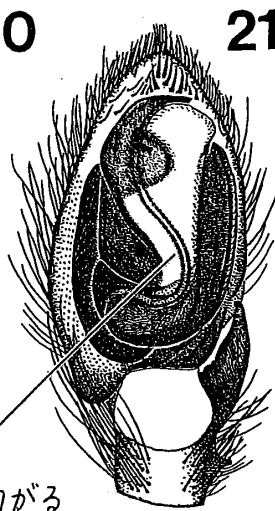
ナミトンビグモ

ここが
突出する

小突起
あり

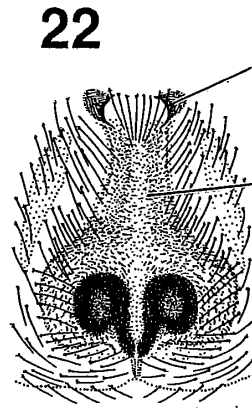


20



21

内部の管が曲がる



22

1対のポケット

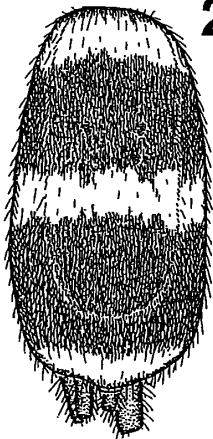
縦向き shallow 溝



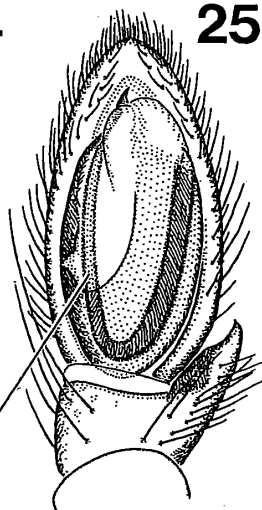
ここが突出する

23

ヨツボシワシグモ

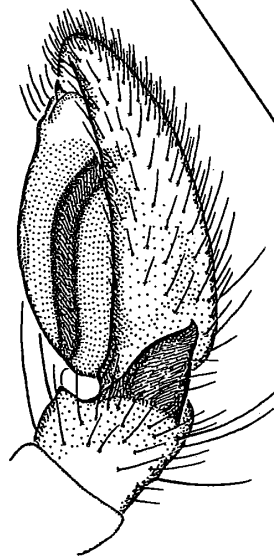


24



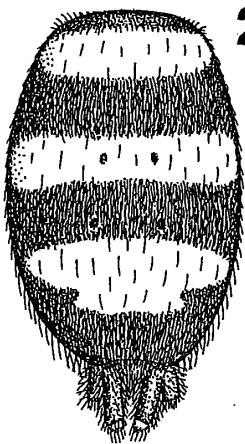
25

内部の管は曲がらない

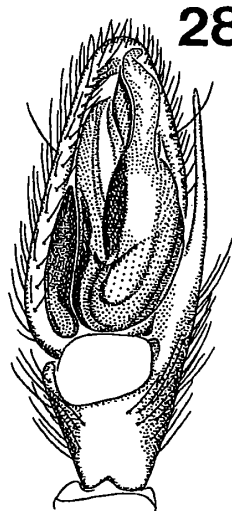


26

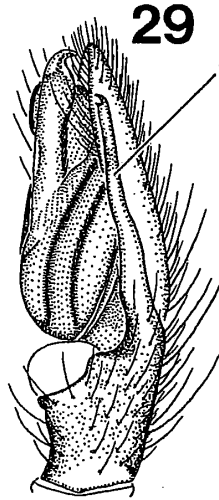
ヒメトンビグモ



27



28

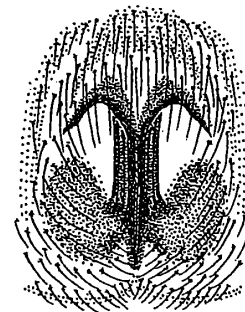


29

脛節突起が長い

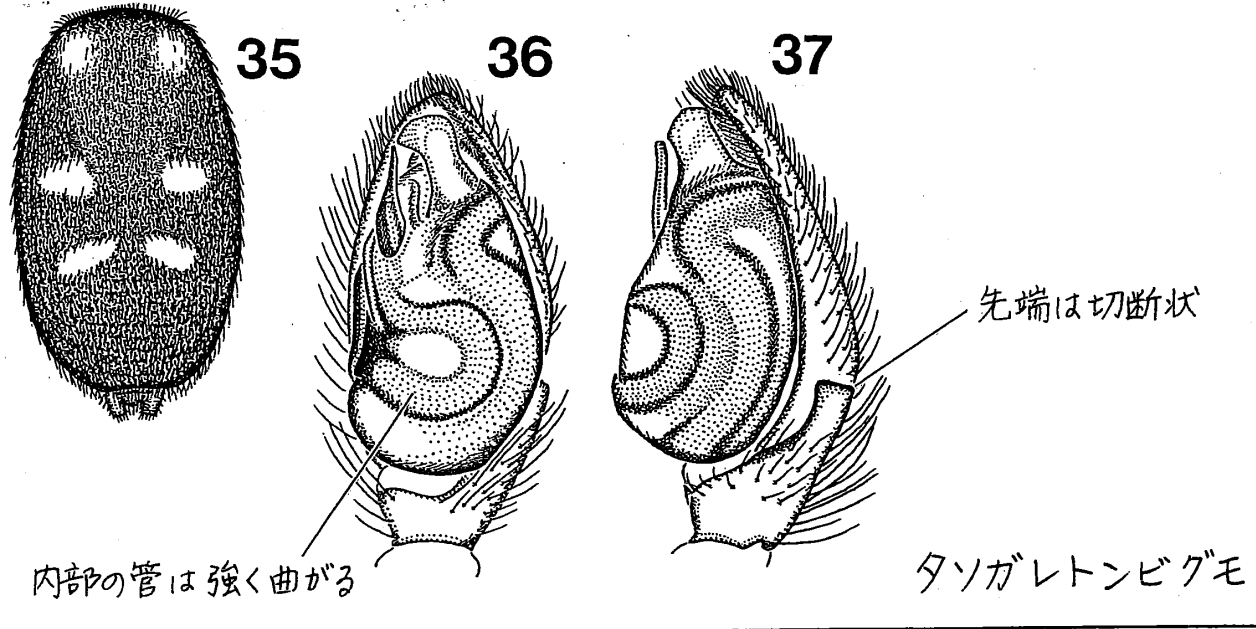
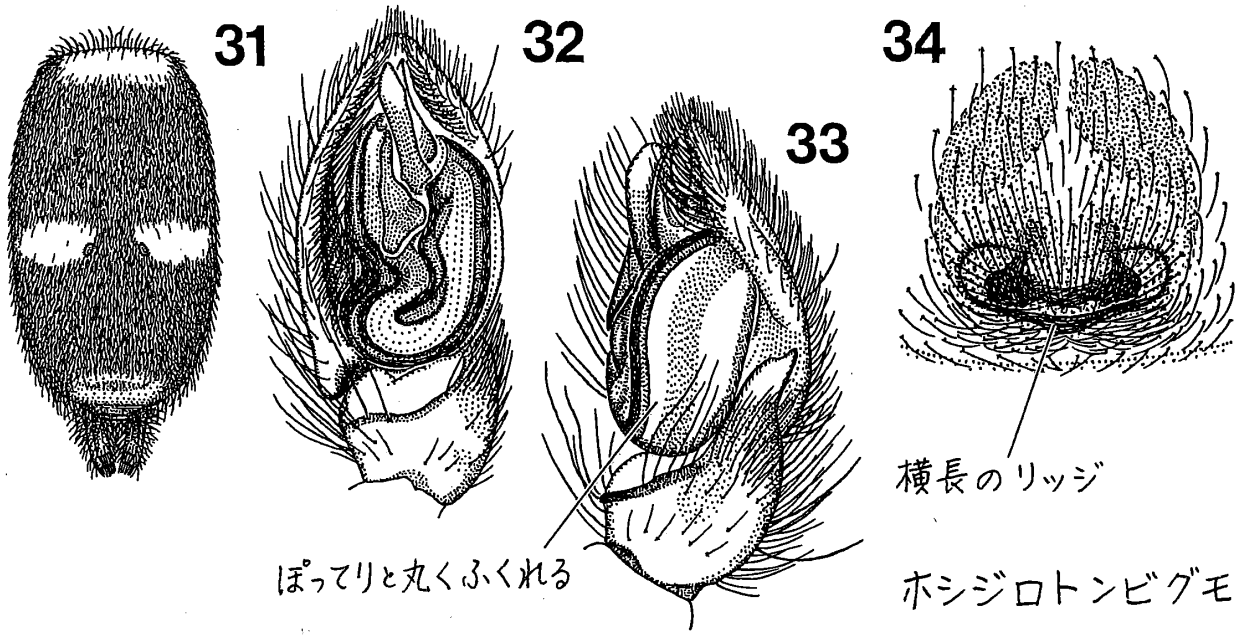
30

縦長のX字形



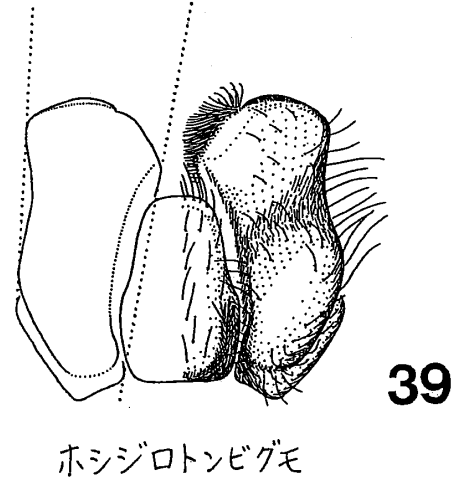
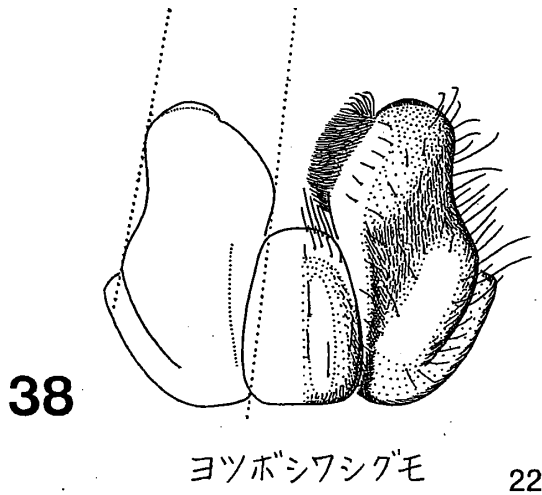
21

マエトビケムリグモ



下顎先端部の幅は基部とほぼ同じ

先端部の幅は基部より広い



同定指南VI

ワシグモ科 Gnaphosidae (その5)

加村隆英

ツヤグモ属 *Micaria*

ワシグモ科のクモは一般に、出糸突起が円筒状で、その前対が広く離れていることを特徴とします(図1)。しかし、ツヤグモ属では他の多くのクモと同様に、出糸突起前対が接近しています(図2)。全体の姿もワシグモ科の他属とは、かなり異なって見えます。むしろ、ウエムラグモ科のウラシマグモ類と似ていると感じるかも知れません。もっとも、ウラシマグモ類では、第1, 2脚の脛節、蹠節の腹面に対をなす長い刺が目立ちます(脛節に4対以上、蹠節に2対以上)。したがって、そのような多数の刺がなければ、ツヤグモの仲間と考えることができます。

この属のクモはその名のとおり、生きている時や新鮮な標本では、きらきら光って見えます。これは体全体に平たい鱗状の毛が生えているためです。

腹部には白い斑紋があり、そのパターンによってある程度、種の見当をつけることもできますが、標本によっては斑紋が不明瞭なことも多いので、正確な同定のためには、やはり外雌器や雄の触肢を見なければなりません。日本産として4種が知られています。

ヒゲナガツヤグモ *Micaria dives* (Lucas 1846) (図3-8)

体長は♀ 2.5~4.0 mm, ♂ 2.0~3.5 mm。旧北亜区に分布しており、国内では本州で採集されていますが、記録はあまり多くありません。雄の触肢が長いことが大きな特徴です。

ヤマトツヤグモ *Micaria japonica* Hayashi 1985 (図9-12)

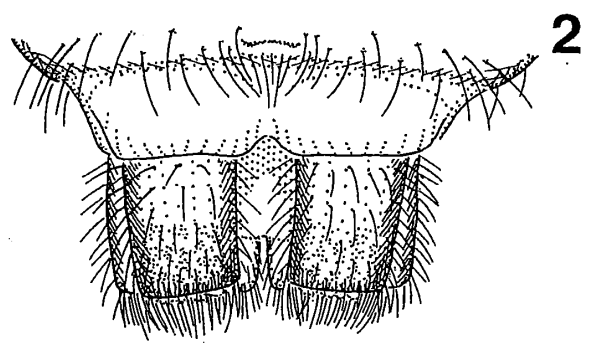
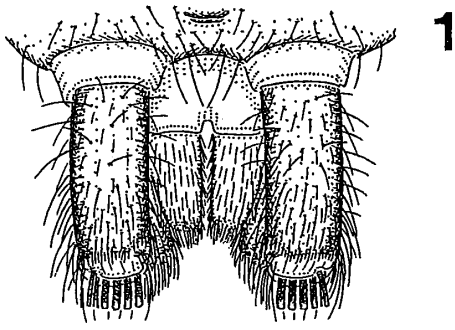
体長は♀ 3.0~4.3 mm, ♂ 2.4~3.8 mm。日本で記載された種で、北海道と本州中部以北に分布します。韓国からも記録されています。

チビツヤグモ *Micaria pulicaria* (Sundevall 1831) (図13-16)

体長は♀ 2.7~4.5 mm, ♂ 3.0~3.5 mm。全北区に広く分布しています。国内の分布は北海道。「チビ」という和名がついていますが、他種に比べて特に小さいわけではありません。

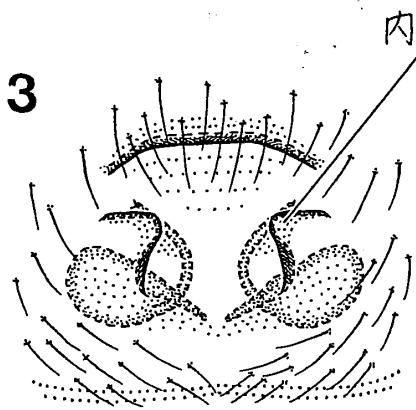
タカネツヤグモ *Micaria alpina* L.Koch 1872 (図17-20)

体長は♀ 2.7~4.2 mm, ♂ 2.7~4.0 mm。全北区に分布し、国内では今のところ、北海道の大雪山でのみ採集されています。

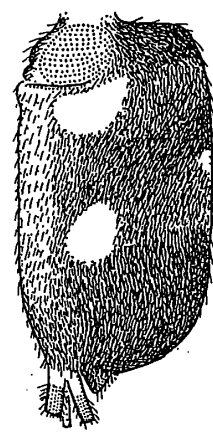
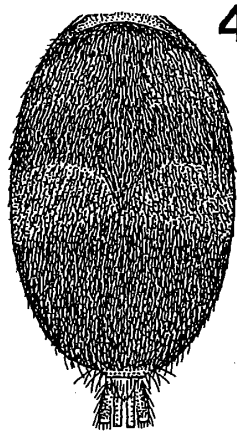


ツヤグモ属を除くワシグモ科の
出糸突起 (腹面)

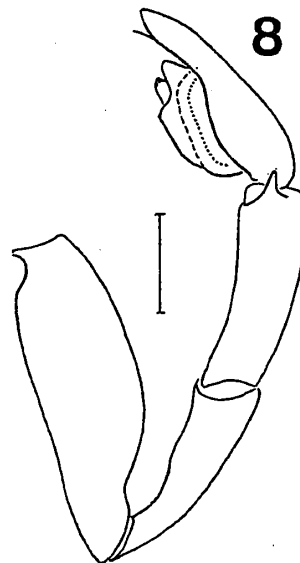
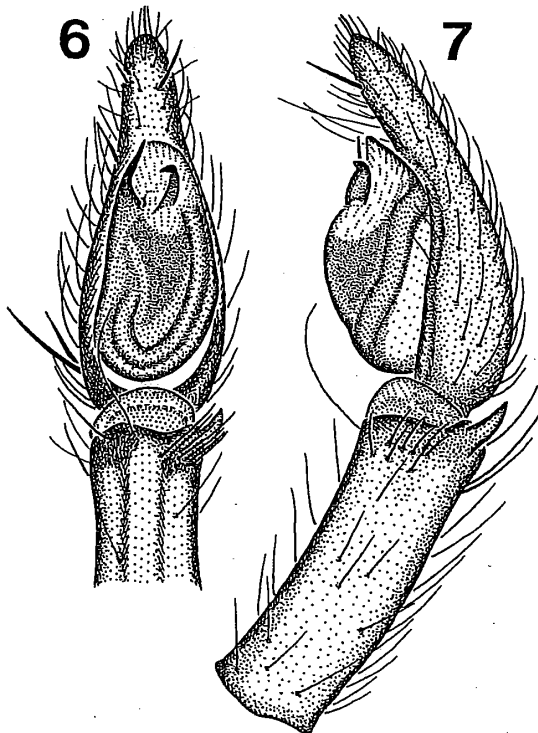
ツヤグモ属の出糸突起 (腹面)



内側に向く突起

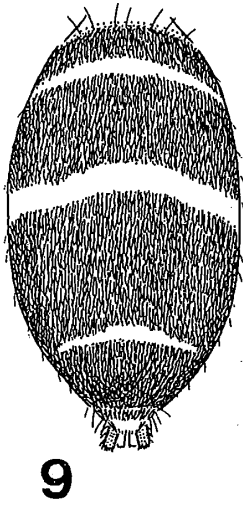


腹部側面に白斑



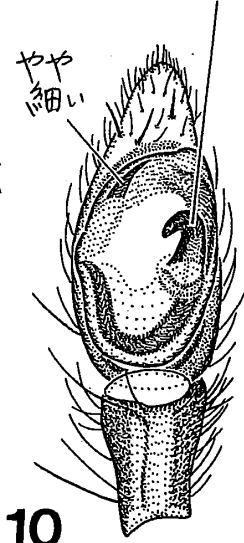
触肢の膝節と
脛節が長い

ヒゲナガツヤグモ

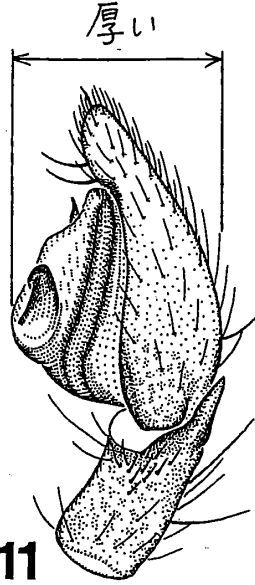


9

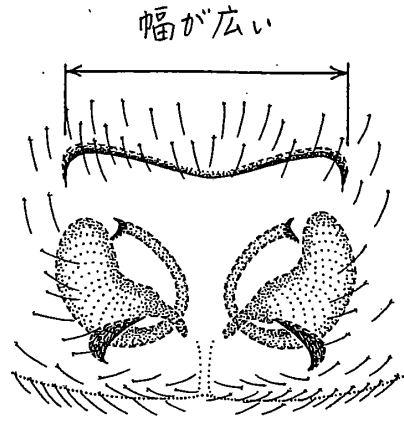
この突起が右に寄る



10

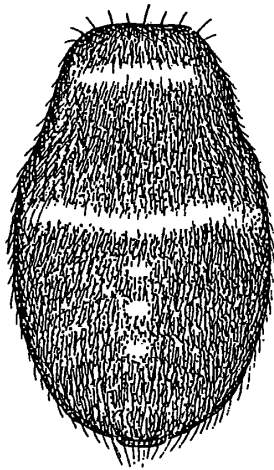


11



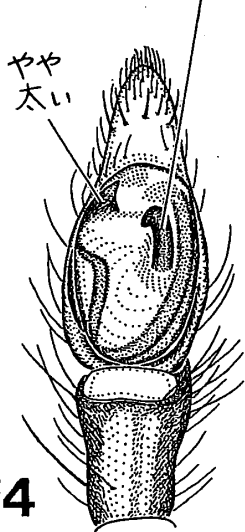
12

ヤマトツヤグモ



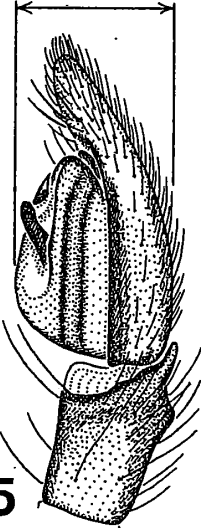
13

右に寄る



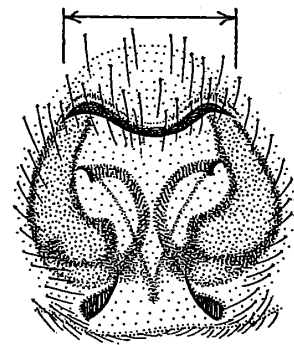
14

あまり厚くない



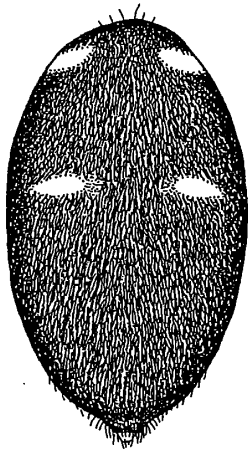
15

あまり広くない



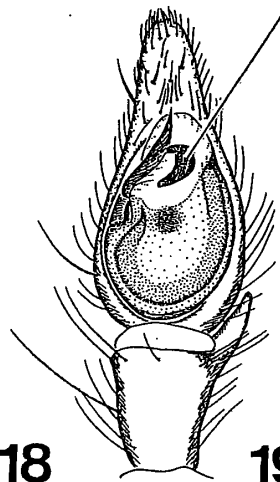
16

チビツヤグモ

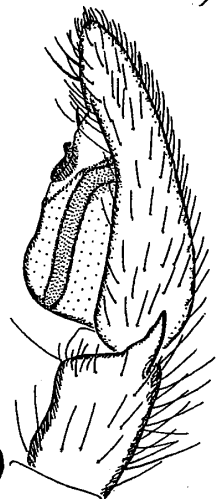


17

先端寄りのほぼ中央

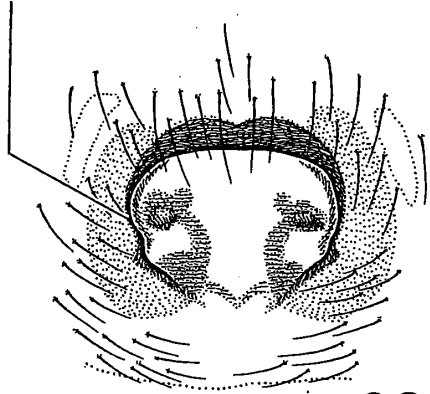


18



19

リッジが側方へ延びる



20

タカネツヤグモ

最初が最後

—ゴケグモ*Latrodectus hasselti*の雄の配偶戦略—

梶元 敏也

子どもの養育に関与しない動物の雄の繁殖成功は、普通、どのくらい多くの卵を自分の精子で受精できたかに依存する。そのため、できるだけ多くの雌と交尾（交接）した方が高い繁殖成功を得ることになる。ところが、オーストラリアに分布するゴケグモ*Latrodectus hasselti*の雄の場合、交接後、多くの雄は雌に食べられてしまう。いったい、なぜ、このようなことになってしまっているのだろうか？

クモの雌の生殖器は外雌器から貯精囊Spermatheca（昆虫では受精囊Seminal Receptacleにあたる）に続く管が1対、つまり2本あり、その先で一つになり受精が行われる。このため、理論的には、雄は一回だけパルプを挿入し、どちらか一方の貯精囊にだけ精子を入れるだけで、雌のすべての卵を受精できる。（なぜ外雌器から貯精囊まで独立した2つの管に進化したのかは、謎であるが。実際、クモ類の交接において、交接中のパルプの挿入回数は種間や種内でも違いがあるが、まだよく研究されていない。）

ゴケグモ*L. hasselti*の雄は交接の際、たいてい左右のパルプを1回ずつ使用するが、16.7-30.4%の場合で、一方のパルプだけの挿入しか行われず交接は終わっていた。交接に際して、一度目のパルプ挿入では83%の雄が雌に食べられずに済むが、もう一方のパルプを使って挿入を行うと65%の雄が雌に食べられてしまう。食べられた雄は別の雌と交配するチャンスを失ってしまう。なぜ、わざわざ左右のパルプを使って交接するのだろうか。一方のパルプだけで十分ではないのか。Andradeさんは、これらの疑問に答えるために次のような仮説を検証した。

（仮説I）精子枯渇説 Sperm limitation

1回のパルプ挿入では、雌の生涯にわたって十分な量の精子が雌の貯精囊に送り込めず、雄にとっても受精できる卵数が少なくなってしまう、という説。

（仮説II）繁殖の保険説 Reproductive investment

クモの内部生殖器は複雑なので、交接の際、生殖器に何らかのダメージが生じ、1回のパルプ挿入によって得られる精子では十分に卵を受精できないようなことが起こるかもしれない、という説。

（仮説III）最後の投資説 Terminal investment

雄には、初めに交接した雌以外の雌と受精するチャンスはほとんど無いため、現在交接している雌の卵を最も多く受精するよう、すべてを賭けて精子を注入する、という説。

彼女は、飼育した一度も交接したことの無い雄と雌のゴケグモを用いて、雌雄を交

接させ、雌に子グモを作らせることで、次のような数値を比較した。

- (a) 一方のバルブだけを用いた場合の雄の子の数
- (b) 左右両方のバルブを使った場合の雄の子の数
- (c) 左右両方のバルブを使った雄をそのまま4日間雌網に同居させたときの子の数
- (d) すでに左右のバルブを使用した雄が処女雌と交接したときの子の数

この結果、a、b、cはどれも差が無かったが、dは他の場合に比べてかなり低くなった。dの実験からは、さらに、雄グモはバルブ使用が2回目以降になるとほとんど子を作れないこと、つまり不妊化していることがわかった。

以上から、雄が1匹の処女雌に、左右それぞれ1回ずつ、合計2回バルブ挿入を行うのは、精子枯渇でも、雌側の繁殖の保険でもない。むしろ、雄自身のバルブはそれぞれ1回までしか使えず、それ以降の交接では子を作れないことから、今の雌にすべてを託すということらしい。また、雌に食べられないように交接途中で逃げた雄に比べると、雌に食べられた雄は長時間交配することができたので約2倍もの雌の卵を受精できる。つまり、これらの結果は仮説IIIの最後の投資説 (Terminal investment) を支持する。

さて、雄はなぜ不妊化するのか、ということが最大の問題となるのだが、Andradeさんは次のような2つの仮説を挙げている。

(1) 交接によってバルブが形態的なダメージを受けるという説

バルブのscleriteが取れることによってバルブがダメージを受け、その後はうまく雌の生殖器で精子挿入できなくなるのかもしれないというのがこの説である。しかし、別種の*Latrodectus mactans*では、scleriteがはずれた後でも、雄は雌と交接し子孫を作ることができるという報告もあり、単にscleriteがはずれたことだけで雄の不妊化を説明するのは、現段階では無理がある。ところで、ゴケグモの雄はバルブにscleriteとよばれる部分があり、雌の生殖器内にバルブを挿入後、scleriteは取れて雌の内部生殖器に残る。scleriteは自分より後に交接を行った雄のバルブ挿入を妨げる、いわゆる交接プラグの機能をもつのではないかと考えられていたこともあったが、ゴケグモについては否定されている。

(2) 新たに精子を補充できないという説

雄は最初の交接に十分な精子をバルブに補充し使用してしまう結果、その後は十分な精子をバルブに補充できないというもの。今回のゴケグモの雄では、交接後、バルブに精子を補充する行動を観察できなかったのも、これも可能性はあるが、検証は必要である。

どちらにしても、決着は今後に持ち越されたということになる。雄が交接後に死んでしまうという例は佐々木さんによって沖縄のナガマルコガネグモでも報告されている(Sasaki & Iwahashi 1995)が、ゴケグモのようなことがナガマルコガネグモでも起きているのかもしれない。様々なクモでバルブの使用回数やダメージなどを調べる必要がある。

参考

Andrade, M.C.B. 1996 Sexual selection for male sacrifice in the Australian

くものいと, No.32, Oct..2002

redback spider. *Science*, 271: 70-72.

Andrade, M.C.B. 2002 Value of male remating and functional sterility in redback spiders. *Anim. Behav.* 63: 857-870.

Sasaki, T. & O. Iwahashi. 1995 Sexual cannibalism in an orb-weaving spider *Argiope aemula*. *Anim. Behav.* 49: 1119-1121.

クモリスト

亀岡市で採集されたクモ

吉田 真

西川さんが1997年に発表された安威川の調査報告書(*)から、京都府で生息が確認された種を抜き出してみた。安威川の上流は京都府亀岡市となっている。筆者の知る限り、これ以前には、亀岡市のクモについては報告されていない。この報告書に掲載されたクモは17科43種に上っている。このうち、ヤマトガケジグモとトビジロイソウロウグモは京都府新記録種である(吉田記)。

*西川喜朗. 1997. 安威川流域の昆虫類およびクモ類. (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第9集『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書』116 - 201.

- Atypus karschi* シグモ
Nurscia albofasciata ヤマトガケジグモ
Hyptiotes affinis オウギグモ
Octonoba sybotides カタハリウズグモ
Octonoba varians ウズグモ
Achaeearanea kompirensis コンピラヒメグモ
Anelosimus crassipes アシプトヒメグモ
Argyrodes cylindratus トビジロイソウロウグモ
Argyrodes kumadai チリイソウロウグモ
Ariamnes cylindrogaster オナガグモ
Chrysso scintillans コガネヒメグモ
Keiffia sterninotata ムナボシヒメグモ
Phoroncidia pilula ツクネグモ
Rhomphaea sagana ヤリグモ
Takayus latifolium ヒロハヒメグモ
Ero japonica センショウグモ
Theridiosoma epeiroides カラカラグモ
Conoculus lyugadinus ヨリメグモ
Araneus uyemurai ヤマオニグモ
Cyclosa argenteoalba ギンメッキゴミグモ
Cyclosa sedeculata ヨツデゴミグモ
Eriophora sachalinensis カラフトオニグモ
Neoscona mellottei ワキグロサツマノミダマシ
Neoscona punctigera コゲチャオニグモ

- Neoscona scylloides* サツマノミダマシ
Leucauge magnifica オオシロカネグモ
Leucauge subblanda コシロカネグモ
Leucauge subgemmea キララシロカネグモ
Meta reticuloides ヤマジドヨウグモ
Tetragnatha maxillosa ヤサガタアシナガグモ
Coelotes antri ホラズミヤチグモ
Coelotes eharai ヤチグモ
Coelotes personatus カメンヤチグモ
Coelotes yaginumai カミガタヤチグモ
Dolomedes sulfurous イオウイロハシリグモ
Pisaura lama アズマキシダグモ
Anyphaena pugil イツツグモ
Anahita fauna シボグモ
Sinopoda forcipata コアシダカグモ
Sernokorba pallidipatellis マエトビケムリグモ
Diaea subdola コハナグモ
Xysticus croceus ヤミイロカニグモ
Rhene atrata カラスハエトリ

クモリスト

加茂町と南山城村のクモ

吉田 真

昨年(2001年)の8月に京都府相楽郡南山城村で開かれた日本自然保護協会の講習会に、講師として参加した。その折りに南山城村と加茂町で採集したクモのリストを報告する。このうち、ヒシガタヒメグモ、トビジロイソウロウグモ、ゴマジロオニグモ、クマダハナグモは、京都府の初記録である。

標本を同定していただいた谷川明男さんに厚く御礼申し上げる。なお、Fは成メス、Mは成オス、fは幼体メス、mは幼体オス、yは幼体、数字は頭数を示している。

1) 京都府相楽郡加茂町井平尾(2001年8月17日)

- Ero japonica* センショウグモ y 1
Hyptiotes affinis オウギグモ y 1
Octonoba varians ウズグモ M 1
Miagrammopes orientalis マネキグモ y 2
Achaearanea japonica ヒメグモ F 1
Argyrodes kumadai チリイソウロウグモ F 2
Ariamnes cylindrogaster オナガグモ y 2
Chryso vesiculosa ヒシガタヒメグモ F 1
Keijia sterninotata ムナボシヒメグモ F 1
Rhomphaea sagana ヤリグモ F 3, y 3
Trigonobothrys mustelina カニミジグモ F 1
Leucauge magnifica オオシロカネグモ F 1
Nephila clavata ジョロウグモ y 2
Tetragnatha maxillosa ヤサガタアシナガグモ y 1
Tetragnatha praedonia アシナガグモ F 1
Argiope bruennichii ナガコガネグモ y 1
Argiope minuta コガタコガネグモ M 1, F 1
Chorizopes nipponicus ヤマトカナエグモ F 1
Cyclosa octotuberculata ゴミグモ y 1
Cyclosa sedeculata ヨツデゴミグモ y 2
Eriophora sagana サガオニグモ y 1
Agelena opulenta コクサグモ m 1
Misumenops kumadai クマダハナグモ y 3
Thomisus labefactus アズチグモ F 1
Tmarus piger トラフカニグモ y 1

Plexippoides doenitzi デーニッツハエトリ y 2

2) 京都府相楽郡南山城村青少年自然の家 (2001年8月17日)

Ero japonica センショウグモ y 1
Achaearanea japonica ヒメグモ F 2
Argyrodes fur フタオイソウロウグモ F 1
Argyrodes kumadai チリイソウロウグモ F 1
Ariamnes cylindrogaster オナガグモ y 1
Leucauge magnifica オオシロカネグモ F 1
Neoscona punctigera コゲチャオニグモ m 1
Neoscona mellotteei ワキグロサツマノミダマシ F 1
Nephila clavata ジョロウグモ y 1
Hasarius adansoni アダンソンハエトリ y 1

3) 京都府相楽郡南山城村夢弦峡 (2001年8月18-19日)

Ero japonica センショウグモ F 1
Hyptiotes affinis オウギグモ M 1
Miagrammopes orientalis マネキグモ y 1
Octonoba sybotides カタハリウズグモ F 2
Octonoba varians ウズグモ F 1, y 1
Achaearanea tepidariorum オオヒメグモ M 1, F 2, y 1
Ariamnes cylindrogaster オナガグモ y 1
Argyrodes cylindratus トビジロイソウロウグモ F 5
Argyrodes kumadai チリイソウロウグモ F 4, y 1
Spheropistha melanosoma クロマルイソウロウグモ F 1, y 1
Yaginumena castrata ボカシミジンダグモ M 1
Prolinyphia longipedella アシナガサラグモ M 2, F 1
Leucauge magnifica オオシロカネグモ F 6
Nephila clavata ジョロウグモ y 2
Tetragnatha maxillosa ヤサガタアシナガグモ m 1
Tetragnatha praedonia アシナガグモ F 1
Argiope minuta コガタコガネグモ F 1
Cyclosa argenteoalba ギンメッキゴミグモ F 1, M 1, y 1
Cyclosa monticola ヤマゴミグモ y 1
Cyclosa octotuberculata ゴミグモ F 2, y 2
Eriophora sachalinensis カラフトオニグモ F 2
Neoscona mellotteei ワキグロサツマノミダマシ F 1
Neoscona punctigera コゲチャオニグモ F 2

Clubiona vigil ムナアカフクログモ F 2

Tmarus piger トラフカニグモ y 1

Harmochirus insulanus ウデブトハエトリ F 1

関西クモ研究会採集会報告

京都府八幡市 石清水八幡宮周辺
(2002年6月2日)

赤松 史憲

去る6月2日に石清水八幡宮周辺(男山)で行った採集会の採集結果を報告します。今回の参加者は用事が重なったなどで集まったのはいつもより少なく、池田幸二、池田勇介、加村隆英、清水裕行、田中穂積、西川喜朗、赤松史憲の7名でした。ただこの日は一日中晴で気候もよく、八幡宮の参道わきにはキシノウエトタテグモの巣を多数見つけることができました。採集結果について、7名全員のリストが集まりましたのでここに報告いたします。

採集結果は【学名、和名、個体数、成体・亜成体・幼体(成体は性別のみ)、採集者苗字】で示しました。

学名、配列は、谷川明男さんの「日本産クモ類目録(2000年版)」に準拠しています。

2002年6月2日 晴れ

石清水八幡宮周辺(男山) せせらぎルート
京都府八幡市高坊、馬場山 標高:20m~120m

出発10:20~終了15:00

池田幸二、池田勇介、加村隆英、清水裕行、田中穂積、西川喜朗、赤松史憲 採集分

<26科57種>

ジグモ科

1 *Atypus karschi* Dönitz 1887 ジグモ 1♀池田 1(幼体)赤松 1(幼体)西川

トタテグモ科

2 *Latouchia typica* (Kishida 1913) キシノウエトタテグモ 3♀池田 2♀赤松
2(幼体)西川 2(幼体)清水
1♀田中

3 *Ummidia fragaria* (Dönitz 1887) キノボリトタテグモ 1♀1(幼体)赤松

タマゴグモ科

4 *Opopaea sharakui* (Komatsu 1967) シャラクダニグモ 1♀1♂清水
シャラクダニグモ(?) 3♀西川
ナルトミダニグモ(?) 1♀西川

ユウレイグモ科

5 *Pholcus crypticolens* Bösenberg & Strand 1906 ユウレイグモ 1♀田中
1♀加村 1♂1♀池田
1♀2♂赤松 3♀1(幼体)西川

センショウグモ科

- 6 *Ero japonica* Bösenberg & Strand 1906 センショウグモ 1(亜成体)清水
- 7 *Mimetus japonicus* Uyemura 1938 ハラビロセンショウグモ ♀赤松
エンマグモ科
- 8 *Ariadna lateralis* (Karsch 1881) ミヤグモ 1(♂幼体)池田
チリグモ科
- 9 *Uroctea compactilis* L. Koch 1878 ヒラタグモ 1(幼体)赤松 1♀西川
1♀清水
- ウズグモ科
- 10 *Miagrammopes orientalis* Bösenberg & Strand 1906 マネキグモ 1♂加村採
- 11 *Octonoba varians* (Bösenberg & Strand 1906) ウズグモ 1♀田中 3♀加村
1♀池田 2♀赤松
1♀1♂清水
- ヒメグモ科
- 12 *Achaearanea angulithorax* (Bösenberg & Strand 1906) ツリガネヒメグモ
3♀加村 1♀池田
3♀西川
- 13 *Achaearanea culicivola* (Bösenberg & Strand 1906) カグヤヒメグモ
1♀加村
- 14 *Achaearanea tepidariorum* (C. Koch 1841) オオヒメグモ 1♀田中
1(♂亜成体)加村 1♀池田
2♀赤松 2♀西川
- 15 *Chryso argyrodiformis* (Yaginuma 1952) ? オダカグモ? 1(幼体)加村
- 16 *Episinus affinis* Bösenberg & Strand 1906 ヒシガタグモ 1♀加村
1(幼体)♀赤松
- 17 *Steatoda cavernicola* (Bösenberg & Strand 1906) ハンゲツオスナキグモ
1♀池田
- 18 *Theridion pictum* (Walckenaer 1802) セアカヒメグモ 1♀池田
- 19 *Dipoena mustelina* (Simon 1888) カニミジグモ 1♀西川 1♀清水
- 20 *Episinus nubilus* Yaginuma 1960 ムラクモヒシガタグモ 1(♀幼体)西川
1♀1♂清水
- 21 *Argyrodes cylindrogaster* (Simon 1888) オナガグモ 1♀清水
ヒメグモの一種 1♀赤松
- サラグモ科
- 22 *Diplocephaloides saganus* (Bösenberg & Strand 1906) ハラジロムナキグモ
2♀清水
- 23 *Neolinyphia nigripectoides* (Oi 1960) ムネグロサラグモ 1♀清水
- 24 *Solenysa mellottei* Simon 1894 アリマネグモ 4♀西川
ズキンヌカグモの一種 2♀西川
- ヨリメグモ科

- 25 *Comaroma maculosum* Oi 1960 ヨロイヒメグモ 9♀4♂西川
コツブグモ科
- 26 *Mysmenella jobi* (Kraus 1967) ナンプコツブグモ 1(幼体)西川
アシナガグモ科
- 27 *Leucauge blanda* (L. Koch 1878) チュウガタシロカネグモ 1♂赤松
- 28 *Leucauge magnifica* Yaginuma 1954 オオシロカネグモ 1♀加村 1♀池田
2(幼体♀)西川
- 29 *Leucauge subblanda* Bösenberg & Strand 1906 コシロカネグモ 1♀加村
1♀清水
- 30 *Nephila clavata* L. Koch 1878 ジョロウグモ 1(幼)加村
コガネグモ科
- 31 *Acusilas coccineus* Simon 1895 ハツリグモ 1♀田中 1♀赤松
Argiope sp. 1(幼)加村
- 32 *Cyclosa argenteoalba* Bösenberg & Strand 1906 ギンメッキゴミグモ
1♂田中 1♀加村 1♀池田 1♀西川
- 33 *Cyclosa octotuberculata* Karsch 1879 ゴミグモ 1♀(目撃確認)加村
- 34 *Cyclosa sedeculata* Karsch 1879 ヨツデゴミグモ 1♀赤松
- 35 *Cyclosa omonaga* Tanikawa 1992 シマゴミグモ 1(♀幼体)西川
- 36 *Neoscona scylloides* (Bösenberg & Strand 1906) サツマノミダマシ
1(幼体)西川
- 37 *Neoscona scylla* (Karsch 1879) ヤマシロオニグモ (♀垂成体)清水
- 38 *Eriophora astridae* (Strand 1917) サガオニグモ 1♀清水
コモリグモ科
- 39 *Pirata clercki* (Bösenberg & Strand 1906) クラークコモリグモ 6♀2♂西川
1♀清水 3♀2♂5(♀垂成体)1(♂垂成体)田中
- 40 *Pisaura lama* Bösenberg & Strand 1906 アズマキシダグモ 1♂田中
コモリグモの一種 1♀1♂1(幼体)赤松
タナグモ科
- 41 *Agelena limbata* Thorell 1879 クサグモ 1(♀幼体)池田 1(幼体♂)西川
- 42 *Coelotes yodoensis* Nishikawa 1977 ヨドヤチグモ 1♀西川
シボグモ科
- 43 *Anahita fauna* Karsch 1879 シボグモ 1(♀垂成体)田中 1♀3(幼体)西川
ナミハグモ科
- 44 *Cybaeus nipponicus* (Uyemura 1938) カチドキナミハグモ 1♀池田
Cybaeus sp. 1(幼体)加村 3(幼体)赤松
ウシオグモ科
- 45 *Badumna insignis* (L.Koch 1872) クロガケジグモ (目撃確認)加村
ガケジグモ科
- 46 *Coelotes luctuosus* L. Koch 1878 メガネヤチグモ 1♀池田

ウエムラグモ科

- 47 *Itatsina praticola* (Bösenberg & Strand 1906) イタチグモ 1(♂垂成体)加村
1♀池田 1(幼体)赤松 4(幼体♀)3(幼体♂)8西川
1(♀幼体)1(♂幼体)1(幼体)清水

48 *Phrurolithus coreanus* Paik 1991 キレオビウラシマグモ 2♀1♂加村

49 *Orthobula crucifera* Bösenberg & Strand 1906 オトヒメグモ 1♀清水

ハウシグモ科

- 50 *Asceua japonica* (Bösenberg & Strand 1906) ドウシグモ 1♀池田
2(幼体)西川 1♀1♂清水

アシダカグモ科

- 51 *Sinopoda forcipata* (Karsch 1881) コアシダカグモ 1(幼体)赤松
4(幼体)西川 1(♀幼体)1(幼体)清水

エビグモ科

52 *Philodromus spinitarsis* Simon 1895 キハダエビグモ 1♂西川

53 *Tibellus tenellus* (L. Koch 1876) シャコグモ 1(♂幼体)清水

カニグモ科

54 *Thomisus labefactus* Karsch 1881 アズチグモ 1(幼体)加村

55 *Xysticus croceus* Fox 1937 ヤミイロカニグモ 1♀田中
1(♂幼体)池田 1♀西川

56 *Ozyptila nipponica* Ono 1985 ニッポンオチバカニグモ 2♀1♂2(幼体)西川

ハエトリグモ科

57 *Siler cupreus* Simon 1888 アオオビハエトリ 1♂加村 1(幼体)西川



八幡市石清水八幡宮の東下、大谷川の橋の上で撮影。後左から時計回りに田中さん、赤松さん、加村さん、清水さん、西川さん、池川(幸)さん、池川(男)くん

ヒトエグモの分布記録

吉田 真

先日加治木町で開かれた日本蜘蛛学会第34回大会の自然保護委員会の席上、新海栄一さんが発表された資料の中に、「ヒトエグモ 浜松市（鈴木）」の記述があった。びっくりして、新海さんにその詳細を尋ね、記載された文献のコピーなどを、後日ファックスで送っていただいた。

それによると、発見されたのは鈴木忠夫さんという方で、「略歴と研究歴」には、昭和28年に静岡大学を卒業され、静岡の高校や中学校の教諭をされたとある。東亜蜘蛛学会の会員であったようだが、日本蜘蛛学会の現在の会員ではないらしい。昭和28年に22歳であったとすれば、現在は73歳くらいになられているはずだ。

新海さんに送っていただいた文献は、遠州自然研究会が昭和61年（1986年）に発行された雑誌（書名は不明）の96-98ページに掲載された「浜松市湖東地区の真正クモ類」である。この報告は、「56年度から60年度に至るまでに採集・記録した浜松市湖東中学校区内の真正クモ類」のリストである。彼は、19科85種を記録し、その中の1種としてヒトエグモを挙げた。

新海さんはファックスのなかで、「鈴木氏はヒトエグモに似ているアワセグモもエビグモ類も皆知っておりますので、まず間違いないと考えております」と述べ、「夜間における古い寺社の調査を徹底させれば、京都以外でも見つかる可能性は高いと思っています」と指摘している。

新海さんが保証するなら、「まず間違いない」のであろう。これは、京都・大阪・奈良以外の「まず間違いない」はじめての分布記録である。これでいっそう謎が深まった。ヒトエグモは関西から東海にかけて広く分布しているのか？探せば本当に、「見つかる可能性が高い」のか？

これとは別に、平松毅久さんからつい先日、京都市におけるヒトエグモの採集記録を教えていただいたので、ここに報告する。平松さんの実家の屋内での採集という。

- 1) 1990年12月13日 京都市北区平野鳥居前町 ♀成体1頭
- 2) 1997年3月30日 京都市北区平野鳥居前町 ♂成体1頭

《研究・観察報告》

社会性ウズグモ (*Philoponella* sp.) の行動と日周期

吉田 真

昨年(2001年)の夏に、神奈川生物研究会の「エクアドル自然観察の旅」に参加した(この概要については、前号に掲載された加村隆英さんの「エクアドルに行ってきた」に詳しい)。その際、アマゾン源流のカパウイ地区で、社会性ウズグモを観察したので、その行動と日周期について報告する。この機会を与えてくれた神奈川生物研究会の皆さんとこのクモについての情報を頂いたDr. Eberhardに感謝の意を表す。

社会性ウズグモの発見と調査方法

カパウイ地区に到着した日(7月30日)に、加村夫人と佐藤さんが宿泊するキャビンの玄関付近で、社会性ウズグモのコロニーを発見した(図1)。7月31日(8:55-9:05, 11:55-12:55, 14:25-15:55, 16:35-18:15, 20:55-21:10)と8月1日の朝(6:25-8:00)に、コロニーの大きさ、クモのサイズと数、卵の

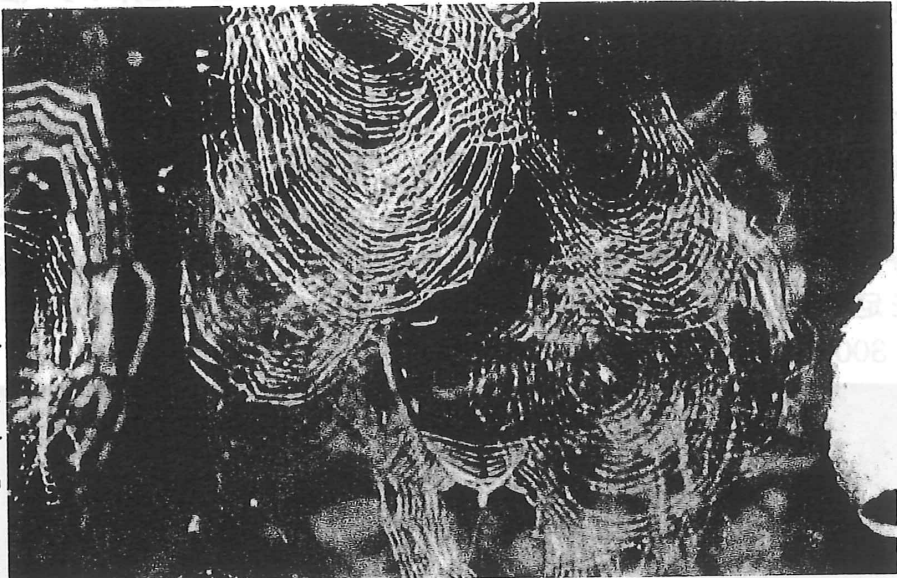


図1 社会性ウズグモ (*Philoponella* sp.) の集団網。

うの数、網にかかった餌の数、捕食行動、造網行動、クモ同士の個体間干渉などを観察した。クモと網にかかった餌の体長は、目視により推定したものである。

調査終了後、クモと卵のうを採集したが、8月3日にシェルという町で盗難に遭い、カメラとともに貴重なクモの標本が盗まれてしまった。幸い、撮影済みのフィルムは無事であったので、後日、コスタリカのEberhardさんに写真を送ったところ、*Philoponella* sp. ということであった。彼自身は、南米で*Philoponella semiplumosa* と*P. republicanus*を見たことがあるという。

結果

1) コロニーの状況

7月31日の朝に観察されたコロニーの状況を、図2に示す。集合網は、高床式キャビンの縁の下からキャビンの外にかけて張られていた。造網の足場として、キャビン

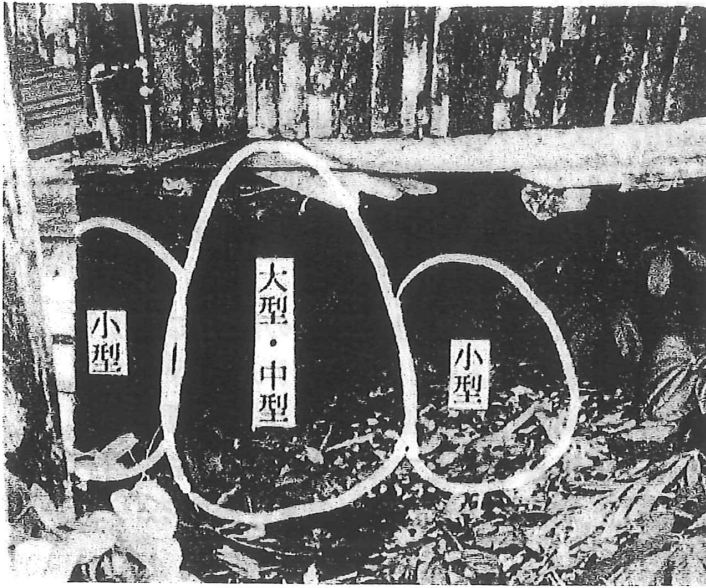


図2 コロニーの状況。中央に大型・中型個体、周辺に小型個体がいる。

と通路の丸太や地面から生えている草本植物などが使われていた。コロニーは、大型（体長約7mm。図3）と中型（約5mm）のクモで構成される集団網と、その左右に位置する、小型（1-2mm）のクモのみで構成される集団網からなっていた。

大型・中型個体からなる集団網は、幅約80cm、高さ約70cm、奥行き約200cmであり、奥の方は高床式キャビンの縁の下となっていた。雨の当たらない縁の下には、約30個の卵のうがぶら下がっていた。穴があいた卵のう（図4）もあり、触ると穴から体長1-2mmの子グモが多数、這い出してきた。

この集団網には、大型個体43匹と中型個体が5匹含まれていた。大型個体は黒っぽい体色をしていて、中型個体は赤っぽい体色をしていた。ひよっとすると別種であったかもしれないが、標本がないので、いまとなっては確かめようもない。ほとんどのクモが網を持っており、その直径はおおよそ10cmほどであり、個々の網は共通のサポートラインを足場として張られていた。小型のクモは、正確に数を数えることができなかったが、300-400匹もいたであろう。

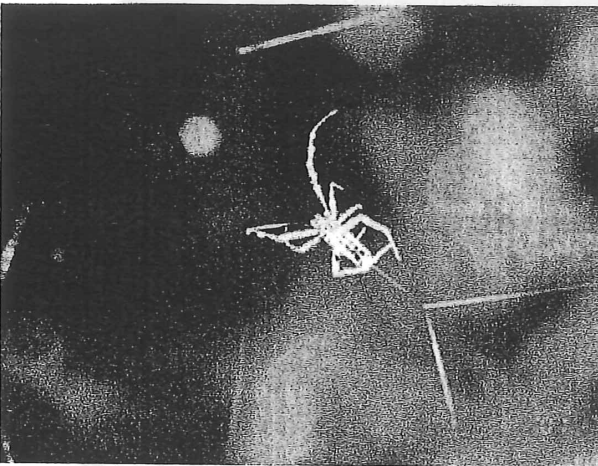


図3 大型の個体。

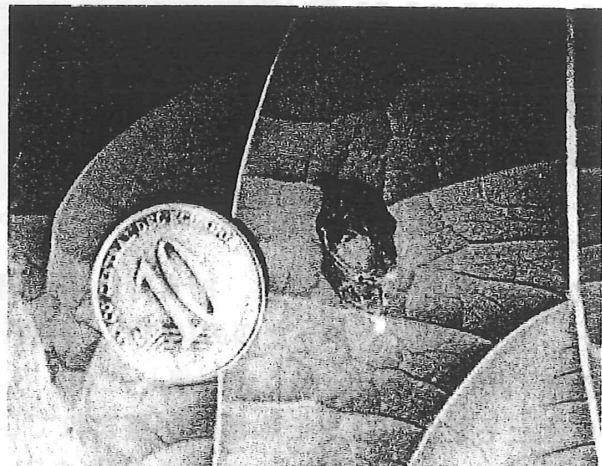


図4 穴があいた卵のう。

2) 観察された行動

イ) 造網

8月1日朝の観察（6:25-8:00）によれば、午前7時頃から大型・中型個体の造網行動が見られた。子グモの網や前日の網の残骸など、造網のじゃまになるものは壊され、空いたスペースに網が作られていった。8時までには、約20個の網が張られた。7月31日の観察（8:55-21:00）では造網が見られなかったため、今回の断片的なデータから

判断すると、この種の造網は早朝に限定されていると思われる。

ロ) 餌捕獲

ウズグモ科のほかの種と同じく、この種は網にかかった餌(図5)に糸を投げかけて(attack wrapping)餌を捕らえた。網の持ち主だけによるラッピングが10例、複数個体によるラッピングが8例、観察された(詳細は後述)。

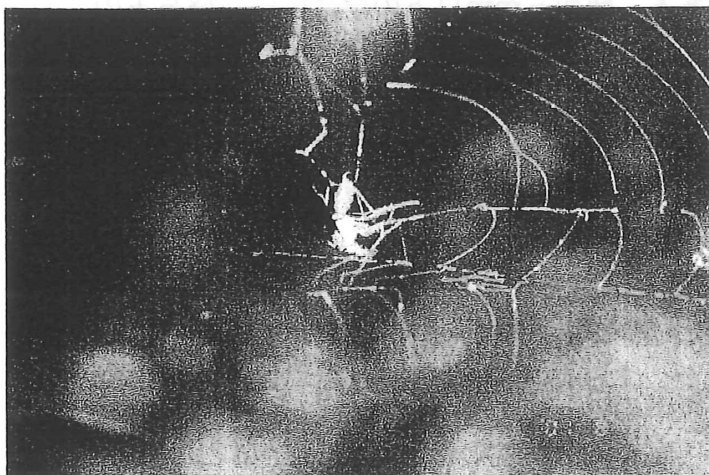


図5 網にかかった餌(体長約7mm)。

ハ) 個体間干渉

2匹の個体が近づいたときに網を揺する行動が見られた。侵入を試みる個体に対して網の持ち主が行う場合や、造網の初期過程で2匹が近づきすぎたときにどちらかが行う場合があった。より大型の個体が行うことが多く、その結果、小型の個体が遠ざかることが通例であった。8月1日(6:25-8:00)には、造網の過程で約40回の網揺すりが観察された。

複数の個体が1つの餌をラップした後でも、餌の引っ張り合いなどの争いが起こった。ただし、つかみ合いになることはなく、大きな個体が小さな個体を追うと、後者は殆どの場合まったく抵抗をせずに逃げ出した。

二) 餌盗み

7月31日の16:35-18:15に、網に侵入して餌を盗む行動が5例、観察された。4例が中型個体、1例が大型個体によるものであった。5例のうち、4例は持ち主のいな

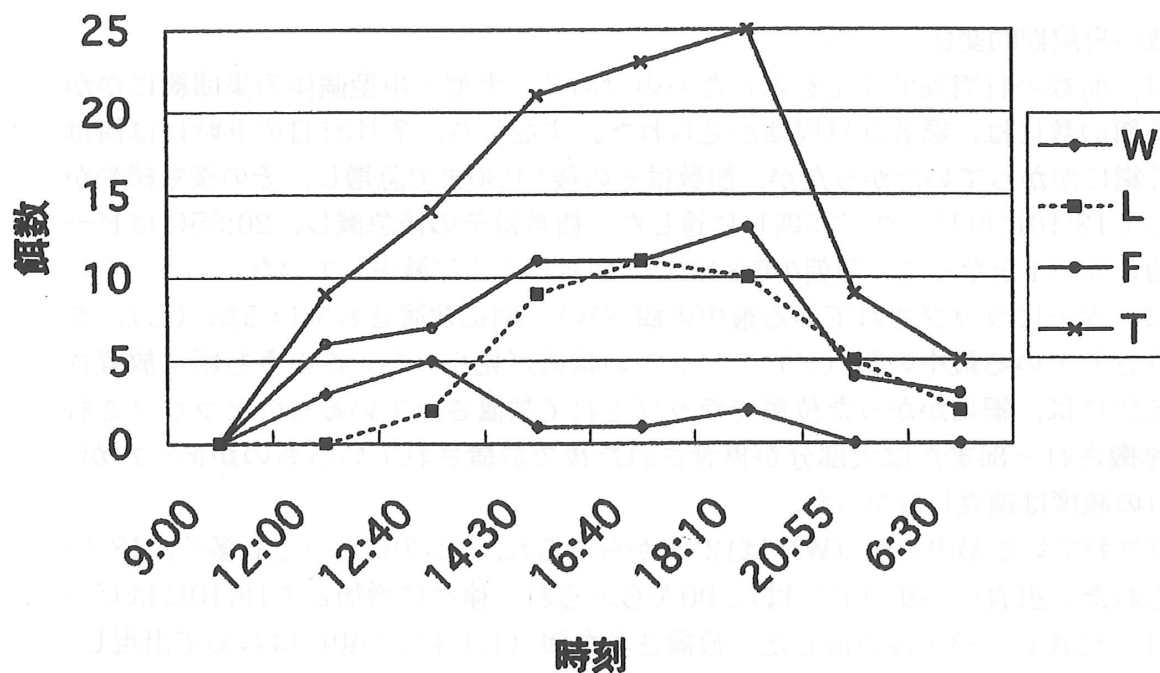


図6 餌数の日周期的変化。W:クモにラップされている最中の餌, L:ラップされた後で網に放置されている餌, F:クモに摂食されている最中の餌, T:餌の総数。

い網に侵入したもので、言うならば「空き巣」に当たる。残りの1例では、持ち主が何度も網揺すりを行って警戒していたが、新たにかかった餌の捕獲のために持ち主がコシキを空けた隙に侵入して盗んだものであった。

3) 餌サイズと捕獲に参加したクモの数

表1は、餌捕獲の詳細をまとめたものである。餌が5mm以下の場合には、持ち主のみがラッピングを行い、餌を捕獲した(10例)。これに対して、餌が5mmより大きい場合には、持ち主以外の個体も網に侵入し、持ち主とともにラッピングを行って餌を捕らえた(8例)。このうち、餌が5~7mmの場合には、持ち主と侵入者の2匹がラッピングを行った(6例)。これに対して餌が10mmの場合には、持ち主と2匹の侵入者の計3匹が同じ餌に対してラッピングを行った(2例)。

次に、クモの大きさと餌獲得の関係を見ると、持ち主<侵入者の場合には例外なく侵入者が餌を獲得した(5例)。持ち主>侵入者の場合には、持ち主が餌を獲得したのが2例、侵入者が獲得したのが1例であった。すなわち、8例中7例において、大きな個体が餌の所有者となった。

表1 餌サイズとクモ数の関係。

()内の数字は、持ち主が勝者になった場合を示している。

餌サイズ (mm)	<5	5~7	10	
ラップしたクモ数	1	2	3	合計
観察数	10	6	2	18
持ち主>侵入者	—	3(2)	0	3
持ち主<侵入者	—	3(0)	2(0)	5

4) 餌数の日周期的変化

図6は、餌数の日周期的変化を示したものである。大型・中型個体の集団網にかかっている餌の数には、顕著な日周期が見られた。すなわち、7月31日の9時には餌はまったく網にかかっていたが、餌数はその後14:30まで急増し、その後も緩やかに増加して18:10にはピーク(25匹)に達した。餌数はその後急減し、20:55にはピーク時の約3分の1となった。翌朝の6:30には、餌数はさらに減少していた。

餌には、クモにラップされている最中の餌(W)、網に放置されている餌(L)、クモに摂食されている最中の餌(F)の、3つの状態が見られた。このうち網に放置されている餌には、網にかかった位置でラップされて放置されているものとラップされた後に運搬され一部または大部分が摂食された後で放置されているものがあったが、それぞれの頻度は調査しなかった。

ラップされている最中の餌(W)は12:00からみられ、12:40にもっとも多く、18:10まで見られた。摂食中の餌(F)は12:00からみられ、徐々に増加して18:10にはピーク(13匹)に達し、その後急減した。放置された餌(L)は12:40にはじめて出現し、その後急増したが、18:10から20:55の間に急減した。

5) 大型・中型個体の休息と小型個体の侵入

7月31日の16:35-18:15の観察までは、網はかなり壊れているものの、大型・中型個体は当初の集団網の範囲（幅約80cm、高さ約70cm、奥行き約200cm）に広く散らばっており、この範囲への小型個体の侵入は見られなかった。しかし、20:55-21:00には、大型・中型個体はすべて集団網の中央部（幅40cm、高さ40cm、奥行き80cm、）に集まり、個体間距離1-2cmのルーズな塊を形成して、休息していた。そして、日中は外側にいた小型個体（1-2mm）が約20匹、この範囲に侵入し、網を持っていた。

6) 休息状態の解消から造網まで

8月1日朝の6:25には、大型個体4匹と中型個体1匹がすでに、上述のルーズな塊からかなり離れた位置に進出していた。また、小型個体（1-2mm）が約15匹、大型・中型個体の集団網（の残骸）の内部にいて、その約半数は網を持っていた。その後、休息状態の塊から離脱する大型・中型個体が徐々に増え、ひんぱんに網揺すりを繰り返しながら、個体間の距離を広げていった。前述したように、8時までに約20個の網が張られ、その間に約40回の網揺すりが観察された。8時には、大型・中型個体が張った網は、前日のそれとほぼ同じ範囲に散在していた。

最後に、これらの観察から分かったことをまとめると：

- 1) このコロニーには、大型（約7mm）、中型（約5mm）および小型（1-2mm）の3つのサイズ・グループが存在する。大型個体が黒っぽいのに対して中型個体は赤っぽく、色彩が異なることから、中型個体は別種であるかもしれない。小型個体は、卵のうから出てきた子グモとほぼ同じサイズであることから、出のう直後の大型個体の子であると思われる。
- 2) 小型個体の集団網は日中は、大型・中型個体の集団網に隣接していた。
- 3) 大型・中型個体は夜間にルーズな塊を作って休息し、その周りに小型個体が進出して造網していた。
- 4) 大型・中型個体は早朝に活動を再開し、干渉を繰り返しながら広く散らばり、7時前から造網を開始した。7月31日の9時には造網中の個体がまったくいなかったことから、たぶん9時前までに造網は完了すると思われる。
- 5) 大型・中型個体の餌捕獲は日中であり、夜間にはラッピング中の餌は見あたらなかった。
- 6) 小さな餌は網の持ち主が捕獲するが、大きな餌は持ち主と侵入者がともにラッピングを行う。後者の場合、餌は通常、大きなクモのものとなる。
- 7) 餌盗みが夕方になっており、その多くは空き巣、すなわち持ち主のいない網に侵入しての盗みであった。

考察

ここでは、大型個体=親、小型個体=子と仮定して、議論を進める。今回の調査で、疑問に思ったことが2つある。一つは、共同ラッピングに関する疑問である。今回の結果からも、共同ラッピングの機能がより大型の餌の捕獲であることが示唆される。しかし、ひとつの餌に複数の個体がラッピングを行なった場合、小さな個体は圧倒的

に不利であり、たとえ網の持ち主であっても、捕らえた餌は通常大きな侵入者のものとなる。このような現象は、*Philoponella*の他の種でも報告されている (Lahmann & Eberhard 1979; Binford & Rypstra 1992; Masumoto 1998)。

それならばなぜ、小さな個体は大きな個体といっしょに餌を捕獲するのであろうか? Binford & Rypstra (1992) は、*Philoponella republicana* で、3匹が餌を一緒に食べていた例を挙げている。これは例外的な現象らしいが、もしこのようなケースが時々あれば、小型個体によるラッピングもまったくのただ働きにならないであろう。

別の解釈も可能である。ラッピングを行なった際にはまだ相手のサイズが分かっておらず、その時点では餌は当然自分の所有物になると思っているのかもしれない。所有権争いをやって初めて相手の実力が分かるのだ。円網を張るクモは持ち主がコシキにいる場合には、通常、振動によって侵入者のサイズを押し量ることができる (たとえば、吉田 1977) けれども、ラッピングの最中に侵入されたり侵入したりすると、ラッピングによる振動がいわばノイズになって、自分より大きな相棒の振動の大きさを測り損ねることがあるかもしれない。

もう一つの疑問は子グモの行動である。子グモは日中には親たちの集団網の外にいるが、夜間には子グモの一部がその内部に侵入してくる。これらの子グモは、十分に確認できなかったが、早朝、親たちの造網の過程で、網を破壊されたり網揺すりによって威嚇されたりして、周辺部に追いやられているようであった。それにしても、親たちが休息しているときに、子グモたちはなぜ、親たちの集団網の内部に侵入してくるのであろうか? それは、親たちが食べ残した餌を子グモたちが利用するためかもしれない。

図6に示したように、18:10から20:55の間に餌数は25匹から9匹へと、差し引き16匹減少した。この減少は何によるものであろう? それはひとつには、親たちが摂食中の餌が消化されてしまったためであろう。実際、この期間に摂食中の餌は13匹から4匹へと、差し引き9匹減少している。しかし同じ期間に、放置された餌も5匹減少している。これは、休憩前の親たちまたは中型個体による摂食かもしれないが、休憩後に侵入した子グモたちが消費したとも考えられる。

もちろんこれは、餌が多くかかって親たちが飽食している場合にのみ可能な、子グモたちの餌獲得の戦略である。子グモの小さくて弱い網では大きな餌を捕らえることができないので、親の網にかかっている大きな餌は、子グモにとって大変なご馳走であろう。親の放置網に侵入して子グモが餌を盗む行動は、タニマノドヨウグモでも見られる (Yoshida 2001)。

このようにしてみると、日中は競争本位の實力社会、夜は弱者にも餌を保証する心やさしい社会という、社会性ウズグモの構図が見えてくる。もちろん、断片的なデータからここまで言うのは、あまりにも行き過ぎで、妄想といわれても仕方がなかろう。もう一度、この種の調査をやってみたいものだ。

引用文献

- Binford G. J. & A. L. Rypstra. 1992. Foraging behavior of the communal spider, *Philoponella republicana* (Araneae; Uloboridae). *J. Insect Behav.*, 5: 321-335.

- Lahmann, E. J. & W. G. Eberhard. 1979. Factores selectivos que afectan la tendencia a agruparse en la araña colonial *Philoponella semiplimosa* (Araneae; Uloboridae). *Rev. Biol. Trop.*, 27(2): 231-240.
- Masumoto, T. 1998. Cooperative prey capture in the communal web spider, *Philoponella raffrayi* (Araneae, Uloboridae). *J. Arachnol.*, 26: 392-396.
- 吉田真. 1977. 溪流付近に生息するクモ4種の造網場所選択-餌量を中心とした共存条件についての一考察. *Acta arachnol.*, 27: 261-282.
- Yoshida, M. 2001. Kleptoparasitic behaviors of two orb-weaving spiders in webs abandoned by *Metleucauge kompsonensis* (Araneae: Tetragnathidae). *Acta arachnol.*, 50 (1): 5-10.

アマゾン源流の半円網について

吉田 真

発見の経緯

昨年7月末、エクアドル東南部カパウイ地区の熱帯雨林で、船曳和代さんが垂直に張られた奇妙な半円網を発見した。ここは、アマゾン川の支流であるパスタザ川の川辺のエコロッジ。雨期に水かさが増えて歩けなくなるのを防ぐために、船着き場からロッジまで、丸太を並べた高廊下が続いている。船曳さんは、廊下を歩いていて、この奇妙な網を発見したのである。網は2本の木の間、地上から約2mの高さに張られていた。私は廊下にイスを置き、その上に立って、約1m前方の網を撮影した。図1は、写真に基づいて描いたものである。

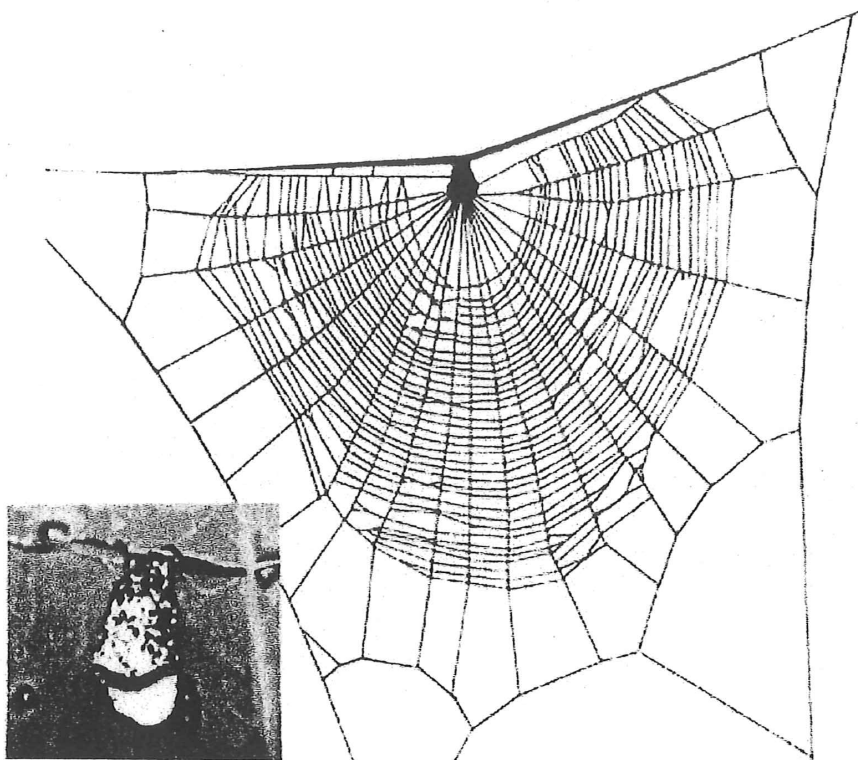


図1 *Micrepeira* sp.の網と隠れ家 (左下)。Levi (1995)を改変。

網の特徴

この網で一番奇妙なのは、橋糸から吊り下げられた隠れ家である。これは、糸で作られた釣り鐘状のもの（長さ約1cm、幅約6mm）で、下方に開口していた。隠れ家の内部は真っ白であるが、外側には黒い粒々が多数付着していた（図1左下）。隠れ家は、非常に太い糸から吊り下げられていた（図1）。

網の大きさは20cm強。隠れ家はコシキの位置にあり、21本の縦糸が隠れ家から放射

状に張られていた。横糸は、隠れ家から下の端までで35本、隠れ家から左の端までで20本であった。場所によって横糸の数かなり違うので、当然ながら、あちこちに横糸の折り返し構造が見える。橋糸とそれに隣接する縦糸の間には、横糸は張られていないようであった(図1)。

網を張ったクモ

廊下から手を伸ばして、隠れ家ごとクモを採集しようとしたが、クモはいち早く網から落下して逃げてしまった。黒っぽいクモであったことしか覚えていない。幸いなことに、谷川明男さんが別な場所で同様の網を見つけ、クモを採集した。後日、Levi (1995)の論文などから、谷川さんはこのクモを*Micrepeira* sp.と同定した(谷川, 2001)。

*Micrepeira*について

Levi (1995)によれば、これは中南米の属であり、*Micrepeira fowleri*, *M. hoeferi*, *M. pachitea*, *M. albomaculata*, *M. velso*, *M. smithae*, *M. tubulofaciens*の7種の生息が確認されている。このうちエクアドルからは、1984年にアマゾン源流のCuyabeno保護区から*Micrepeira fowleri*のメス成体が1頭だけ採集されている。谷川さんが今回採集したのも成体だが、上述の7種ではないという(谷川, 2001)。

*Micrepeira hoeferi*と*Micrepeira* sp. の網の比較

Leviによれば、この属では3種(*Micrepeira hoeferi*, *M. velso*, *M. tubulofaciens*)の網が知られている。図2は、*Micrepeira hoeferi*の網である。

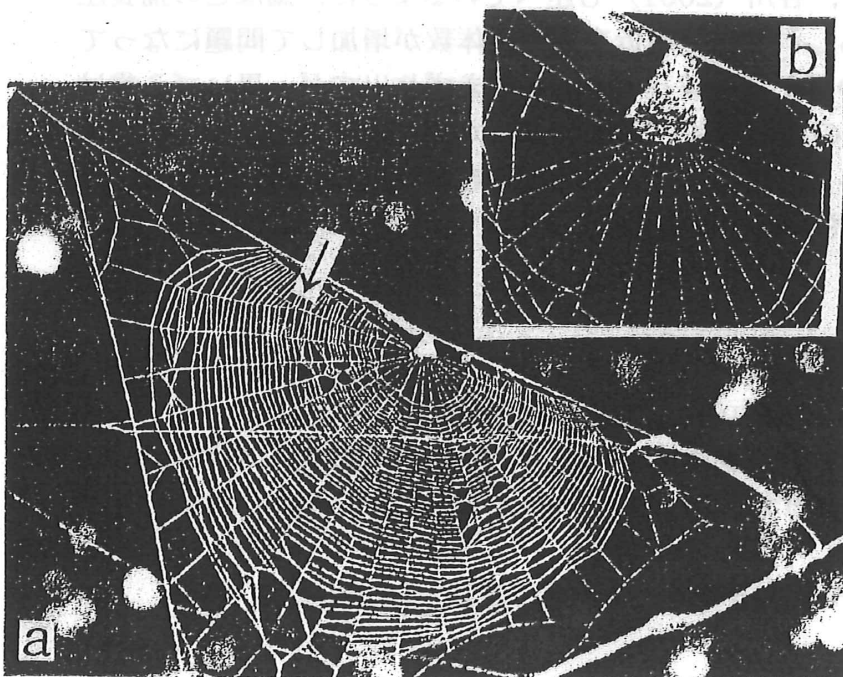


図2
*Micrepeira hoeferi*の網(a)とコシキ部分の拡大図(b)。矢印は縦糸の分岐を示す。

1) 隠れ家

Levi (1995)によれば*M. hoeferi*の隠れ家は、破片の粒(detritus particles)と糸で作られている(図2b)。しかし、私が今回見た*Micrepeira* sp.の隠れ家は、基本的には糸で作られており、外側の黒い粒々は何かの破片というよりも、土粒が付いているように見えた(図1左下)。アシナガグモは葉っぱなどに卵囊を付着させるが、その表

面にも黒い粒々が付いている。新海・高野 (1987) はこれを、「表面に黒色の糸がゴミのように付いている」と表現している。私が一昨年に飼育したアシナガグモは、管瓶の中で無精卵を生んだが、その卵囊の表面にも黒い粒々が付いていた。管瓶の中には破片 (detritus) や土がなかったので、私はそれをクモの分泌物ではないかと思っている (吉田, 未発表)。それはともかく、*Micrepeira* sp.の隠れ家は、エクアドルのシェルという町でカメラとともに盗まれてしまったので、その粒々が何であったかを調べることはできない。

また、*M. hoeferi*を採集したHöferによると、隠れ家には閉じることのできる蓋があったという。しかし、今回観察した*Micrepeira* sp.の隠れ家には、そのような蓋はなかった。

2) 網の構造

*M. hoeferi*の網が横長で半円に近い (図2) のに対して*Micrepeira* sp.の網は縦長であった (図1) が、いちばんの違いは足場糸の有無であった。*M. hoeferi*の網には3, 4本の足場糸からなるコシキがある (図2) が、*Micrepeira* sp.の網では足場糸は張られていなかった (図1)。また、前者の網には、二分岐している縦糸 (→で示す) があった (図2)。

終わりに

今回のエクアドルの旅で日中に円網を見たのは、身体に鋭い棘を持つ種 (*Micrathena*の数種と*Gasteracantha cancriformis*) や、網の中心や網の縁に隠れ家を持つものが多かった。これは、谷川 (2001) も述べているように、鳥などの捕食圧が高いことを示しているのかもしれない。最近東京で個体数が増加して問題になっているハシブトガラスは、透明のゴミ袋を破って食物を引きずり出すが、黒いゴミ袋は見向きもしないという。中南米の鳥たちも、*Micrepeira* の隠れ家に潜むクモを探知できないのかもしれない。しかし、糸であのような隠れ家を作り表面を汚してカモフラージュするとは、なかなかやるもんだと思った。

引用文献

谷川明男. 2001. エクアドルで観察したクモ類.

<http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/ecuador.pdf>

Levi, H. W. 1995. Orb-weaving spiders *Actinosoma*, *Spilasma*, *Micrepeira*, *Pronous*, and four new genera (Araneae: Araneidae). Bull. Mus. Comp. Zool., 154: 153-213.

新海栄一・高野伸二. 1987. クモ基本50. 森林書房, 東京. 128pp.

《研究・観察報告》

兵庫県におけるセアカゴケグモの生息状況に関するやや大胆な推理

清水裕行

1995年に大阪府で初めて「毒グモ」セアカゴケグモが多数見つかって大騒ぎとなった。その後、三重県と和歌山県でも確認され、兵庫県では1997年に西宮市内の2ヵ所、人工島の「西宮浜」と内陸部の「東山台」で発見された。その時点では発見された個体は少数であった(注1)が、その後、2000年に西宮浜から多数見つかり(注2)、翌2001年にかけて県内では神戸市内の4ヵ所、芦屋市内の1ヵ所からも確認された。特に、内陸部の神戸市西区井吹台東町からは千頭以上(推定)が見つかり、改めて注目を浴びた(注3)。

大阪・三重で発見された当初は「このままでは海風に乗って瞬く間に平野部全体に広がるのではないかと危惧する人もあった。実際、大阪平野ではかなり内陸に生息地を獲得している様子である。ただし、実状は予想とは若干異なる様相を呈している。私は一昨年以來、兵庫県内の生息地を観察してきたので、気付いた点を述べてみたい。各地の具体的な状況やクモ相等については改めて詳しいデータを提示するつもりなので、今回の報告はその予報(予想?)的なものとして御理解いただきたい。従って、考察は省略して結論のみを並べたものであることを御了解いただきたい。

阪神地方で多数発見された際に、先ず考えられたのは海外からの直接渡来である。「港神戸」の周辺であるからその判断は直感的なもので、ごく自然といえる。『週刊文春』でも井吹台での発見に関して、「公園に隣接する分譲住宅の輸入建材にくっついてきたとしか考えられへん」という池田博明氏の談話を紹介して、海外からの侵入を示唆している(注4)。しかし、兵庫県内の発見地に限っていうと、沿岸部の4ヵ所でも海外からの直接渡航とは結びつかない。「ポートアイランド」はその名の通り、神戸港の旧埠頭の機能を補うために造成された人工島であるが、クモが見つかったのは「ポートアイランド第2期」と呼ばれる新しい区域で、そこではまだ貿易物資の陸揚げはされていない。また、『週刊文春』で触れていた「輸入建材」についてであるが、これは木材を指すのであろうか。熱帯地方から輸入した木材にサソリがついていたという例があるので、その可能性がないとはいえない。このクモの生息環境は乾燥地のようだが、オーストラリアで野積みされている間に付着したとう場合も考えられる。ただし、後述するように兵庫県での発見例はすべて屋外であることから、「輸入建材に付着」と特定するのは困難である。

次に考えられるのはすでに生息地として定着した大阪府の沿岸部からの移動である。当初の「風に乗ってセアカゴケグモが分布を広げる」という観測の場合、想定されたのは言うまでもなく、クモのお家芸のブルーニングである。同じ大阪湾の対岸であるから、これは十分に考えられる。しかし、「風邪に乗ってきた」にしては分布が局地的である。場所的には大阪に最も近く工場地帯で生息に適していると考えられる尼崎市

では全く見つからず、相当に離れた西区で大発生するのはうなづけない。自力で飛んできたというよりも、人為的に運ばれてきたと考えるほうが自然である。ポートアイランドでの発見地であるK-CATは新関西空港への連絡船の港であるから、以前、人が嘔まれる事件の起きてこのクモの生息が確認された、関空から直接運ばれてきた可能性は高い。問題はその運ばれ方である。一般の荷物に付いてやってきたとなると、やはり、新しい分布が局地的なのが気になる。

これまでの兵庫県内の発見地に共通しているのは「ニュータウン」ということである。すべてが埋め立て地か丘陵を拓いた造成地で、道路も建物も全く新しく造られている。もうひとつのキーワードは「排水溝」で、現在までのところ屋内からは見つかっていない。ほとんどが地上すれすれか少し下の位置に生息していた。セアカゴケグモの原産地は乾燥地と考えられるので、建材や荷物に付いてきたクモが屋内から排水溝にすべて移ってしまったとは考えにくい。雨が降れば浸水状態になる場所は彼らにとっては決して住みやすい環境とは考えられない。排水溝（雨水系）でたくさん見られるのは、そこが出发点であったと考えるほうが無理がないのではないだろうか（注6）。U字溝や土管等は建築現場で作るものではないから、（多分、大阪府内の）製造工場の屋外に野積みされていた期間にクモが入りこんで、そのまま兵庫県側に運ばれた、つまり、ニュータウンができてから移入されたのではなく、建設過程ですでにクモが存在していたとは考えられないであろうか。そのほうが、各地の生息状況が一樣で、個体数が多いのにもかかわらず、2年間で生息範囲がほとんど広がっていないことにも説明がつく。

セアカゴケグモが最初の侵入場所である排水溝から外に発展できない要因としては競争相手の存在が考えられる。ニュータウン的環境に生息するクモとしてはオオヒメグモやユウレイグモ類、セアカゴケグモ同様にオーストラリアからの外来種と考えられるクロガケジグモなどが挙げられるが、今回、実地に調査してみて目立ったのはマダラヒメグモである。私はこのクモをこれまでには採集したことがなかったのだが、ニュータウンでは多数見ることができた。しかも地下の排水溝から屋内の地上約2mの位置にまで網を張っている。一部ではセアカゴケグモと共存しているわけで、私が2002年の1月にセアカゴケグモの越冬個体を採集した際にも一緒に採ることができた。マダラヒメグモはニュータウンで最も勢力を張っているクモといってよい。このマダラヒメグモが天敵とは別の意味でセアカゴケグモの分布拡大に対する圧力になっているのではないだろうか。NHKによると北海道の知床半島がヒグマの楽園になっている理由は食物が豊富なことと競争相手となるツキノワグマが生息していないためだという。ヒグマは腕力では勝っていても、より雑食性の強いツキノワグマには生活の上では劣勢だということである。セアカゴケグモも毒性は強くても、必ずしも生活力の点で優勢だということにはなるまい。セアカゴケグモにとって必ずしも快適な環境とはいえない排水溝の中から抜け出すことができないのは、すでにマダラヒメグモが外部を制覇した後だからではないだろうか。

この仮説が正しければ、セアカゴケグモ駆除のためにむやみに殺虫剤を散布するのはやはり考えものである。薬剤に対する感受性はクモの種によってあまり違いがないだろうから、散布による被害は、より広い空間に進出したマダラヒメグモのほうが大

きいと考えられる。下手をすると薬剤散布によって、セアカゴケグモに新天地を準備してやる結果になるかもしれない。

以上、状況をもとに推理してみた。この考えが正しいことを証明するには、生息地の継続的な調査観察が不可欠である。機会を改めて、生息地のクモ相等、具体的な情報も報告していきたい。

(注1) 東山台では1個体のみで、その後は見つかっていない。1997年当時の西宮浜での詳細は不明。御存知の方、情報提供をお願いしたい。

(注2) 西宮市からの報道は山口県岩国市の米軍基地周辺から「クロゴケグモ」が見つかった直後であった。まるで歩調を合わせたようなタイミングの良さであった。「クロゴケグモ」の方はその後の詳報を聞かない。果たして本当にクロゴケグモだったのか、事情を御存知の方、御教授願いたい。

(注3) 神戸市内の発見場所は脇浜・ポートアイランド(以上、中央区)・井吹台東町・伊川谷駅駐車場(西区)。

(注4) 両年の新聞報道については、本誌の29号と31号に報告してあるので御覧いただきたい。

(注5) 神奈川県在住の池田氏が関西弁で応対した理由は次のどれかであろう。

- ①池田氏は関西に住んだことがあったので、関西弁が自然に出た。
- ②池田氏がサービスで関西弁を話した。
- ③関西の話題なので、編集者が勘違いし、取材メモから対話を復元したつもりでこう表記した。

(注6) この点に関しては、西川喜朗氏に示唆をいただいた。

ウズグモとカタハリウズグモが張る様々な形の網

船曳和代

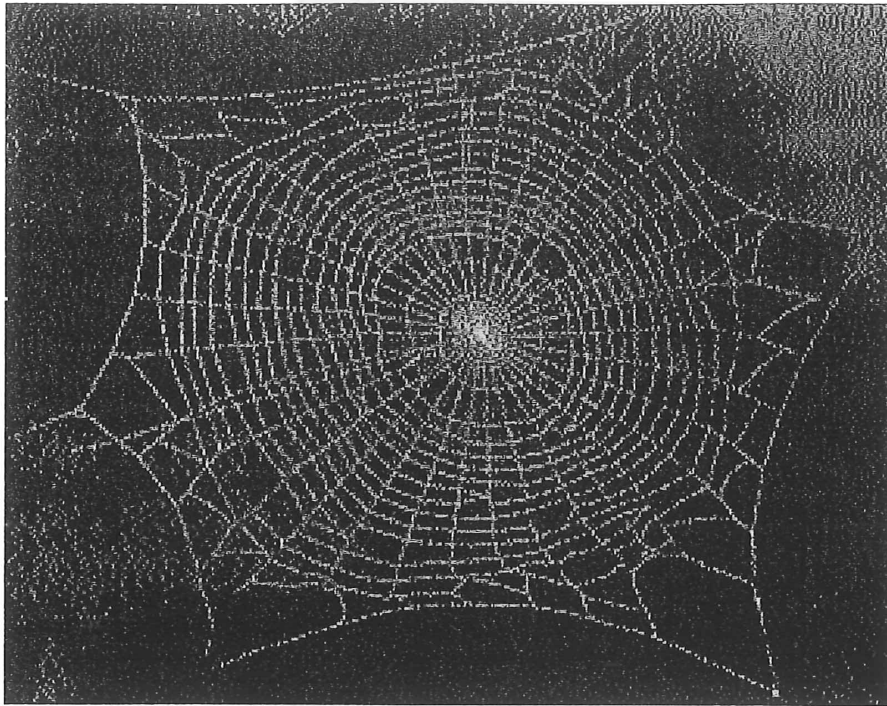
今、私はウズグモたち（正確にはウズグモとカタハリウズグモ）の網にはまっている。きっかけは今年5月5日に宍粟郡安富町でシンプルだが奇抜な形の網を見つけたことによる。

この日はなぜか茶色い腹を見せて網にいるこのクモがたくさん目についた。ウズグモの網など今までたくさんとってるし面白くもなんともない、と無視していたが、あまり目につくので軽い気持ちでホワイトラッカーを吹き付けてみた。すると浮き出て来たのは今までに見たこともない奇妙な形の網であった。私は早速これを採集し、この日は“面白い形の網”を求めて周辺を歩き回った。そして4つばかり似たような形の網を採集することができた。

このような形の網はこの日以後採集できなかった。しかし、7月から8月にかけては子グモの変化に富んだ網が見つかるようになった。

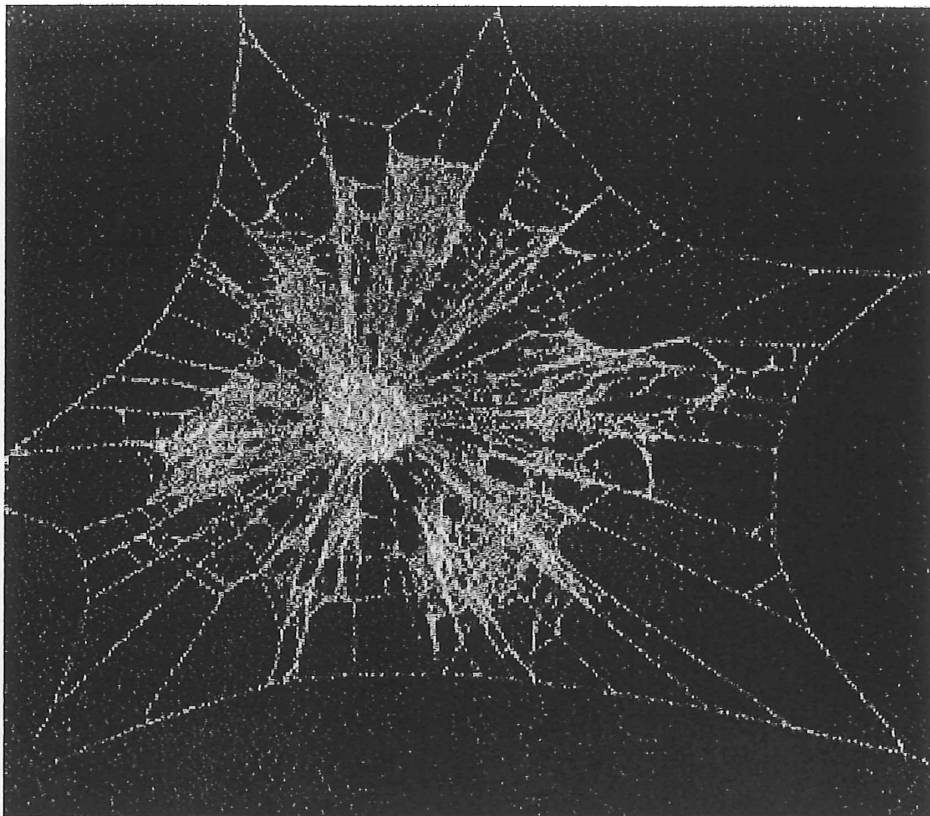
子グモの網は肉眼ではほとんど見えない。見えるのはうっすらとつけられた、かくれ帯だけである。かくれ帯は直線型や渦巻き型、ぽつぽつと点のようなものが2つ、あるいは3～4個直線上に並んだものなどあるが、いずれも淡く、ラッカーを吹き付けて紙にのせるとまったく消えてしまう。かくれ帯を付けないものも多く、崖地のくぼみやシダなど下草の間に、軽くホワイトラッカーを吹きつけてみると、小さな網が層を成して張られているのが分かり、こんなにたくさんのクモが住んでいたのかと驚く。

以下に子グモたちの網を始め、ウズグモやカタハリウズグモがつくる変化に富んだ網の一部を紹介したい。



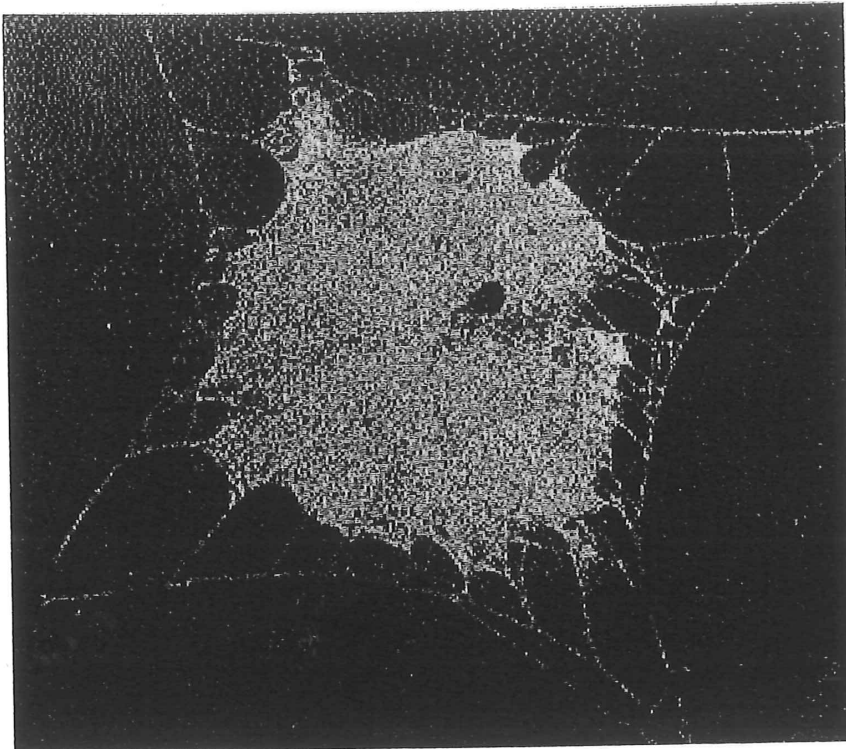
1, 1999,9,18 宍粟郡安富町 18cm×25cm

ウズグモたちの普通の網。横糸が途中で何度も折り返されているのが分かる。また一番外側の横糸がジグザグ状に張られていて美しい。



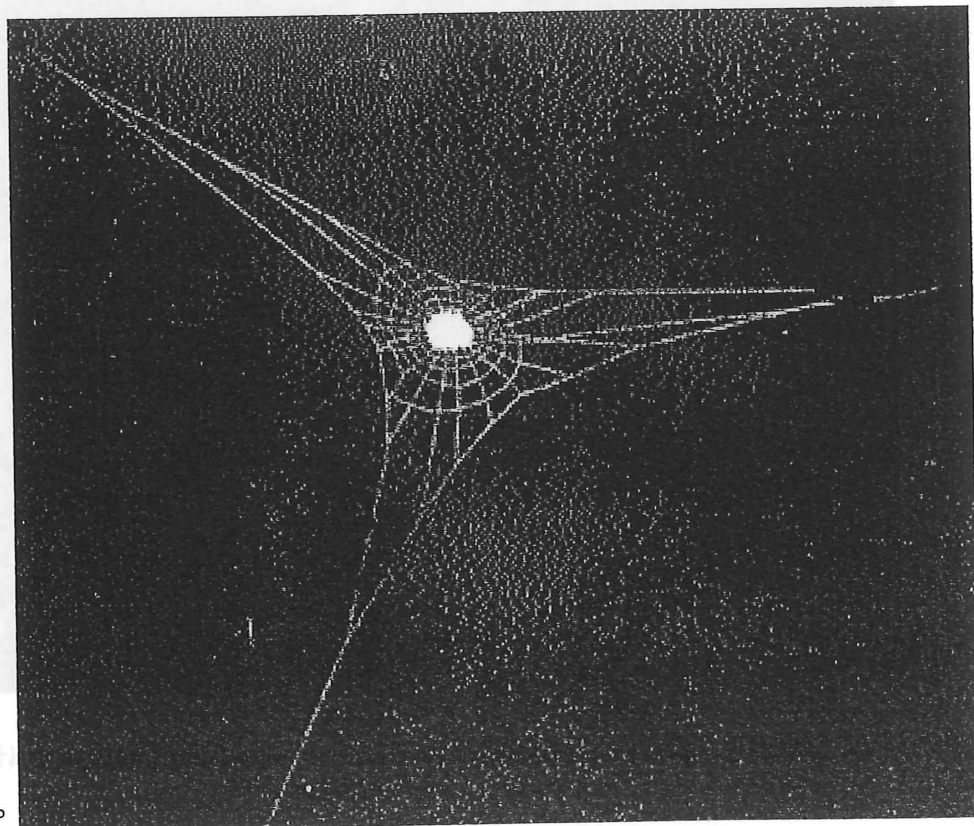
2, 2002,7,21 宍粟郡安富町 12cm×16cm

雄成体が作った網。縦糸と足場糸の間にはシート状の網が部分的に付けられている。



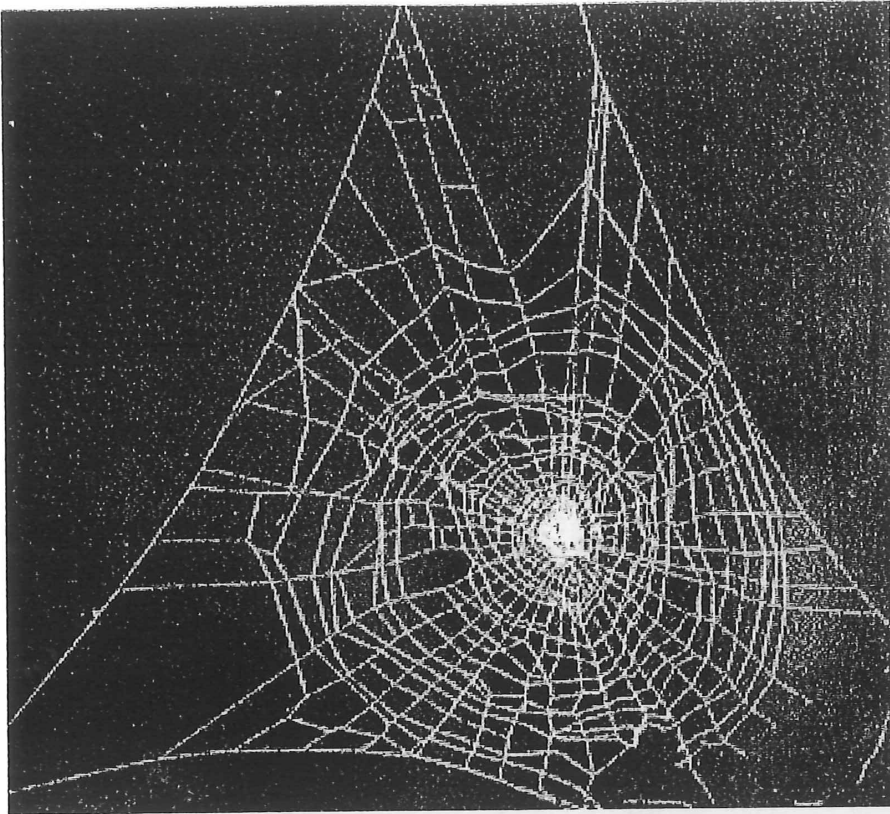
3, 2002,5,25 宍粟郡安富町 17cm×23cm

こちらも雄成体が作った網であるが、シート状の糸は網全体にまんべんなくつけられ、縦糸と足場糸は隠されてしまっている。

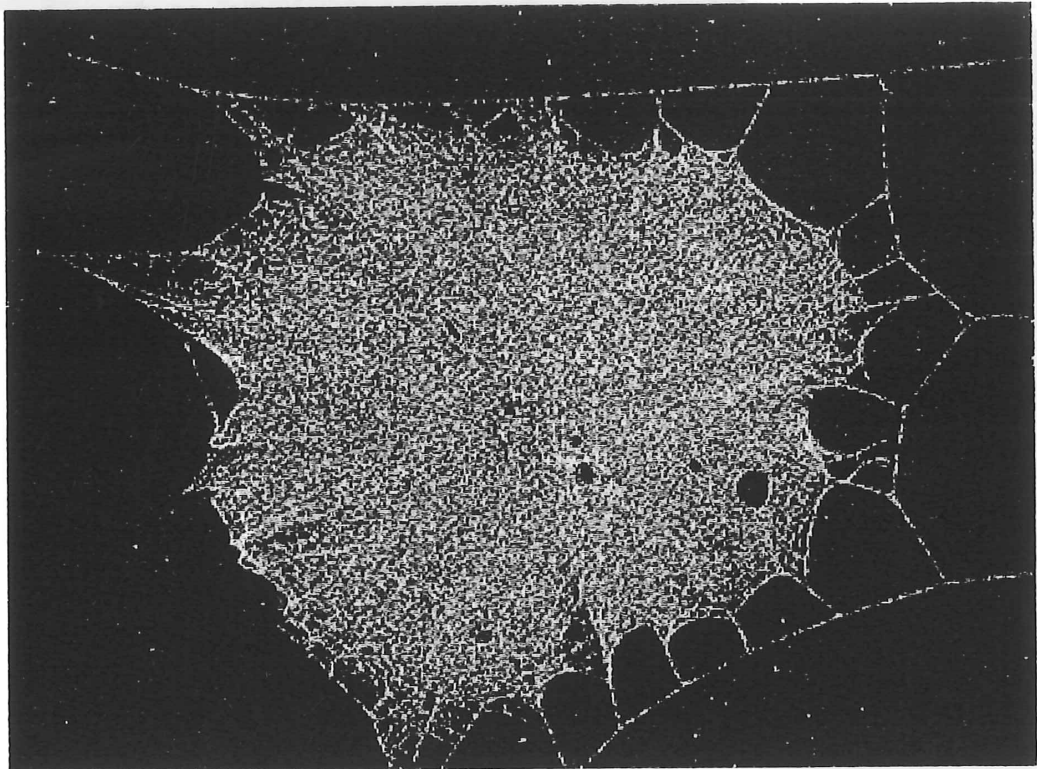


4, 2002,5,5
宍粟郡安富町
15cm×22cm

少ない縦糸と数巻きの足場糸状のもので作られたシンプルで奇抜な網。私がウズグモたちの網に興味を持つきっかけになった網。

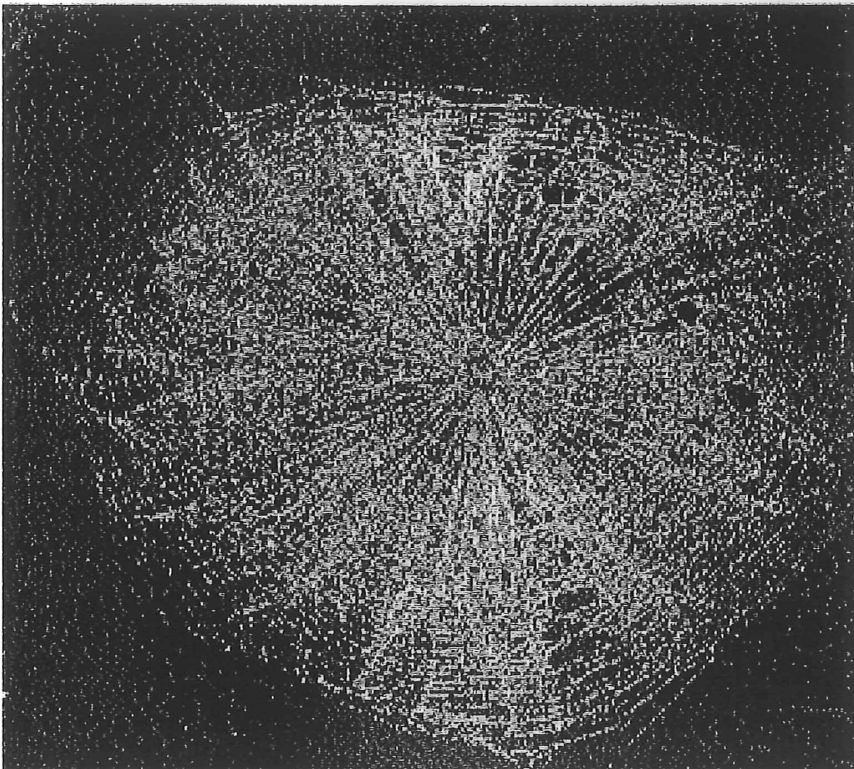
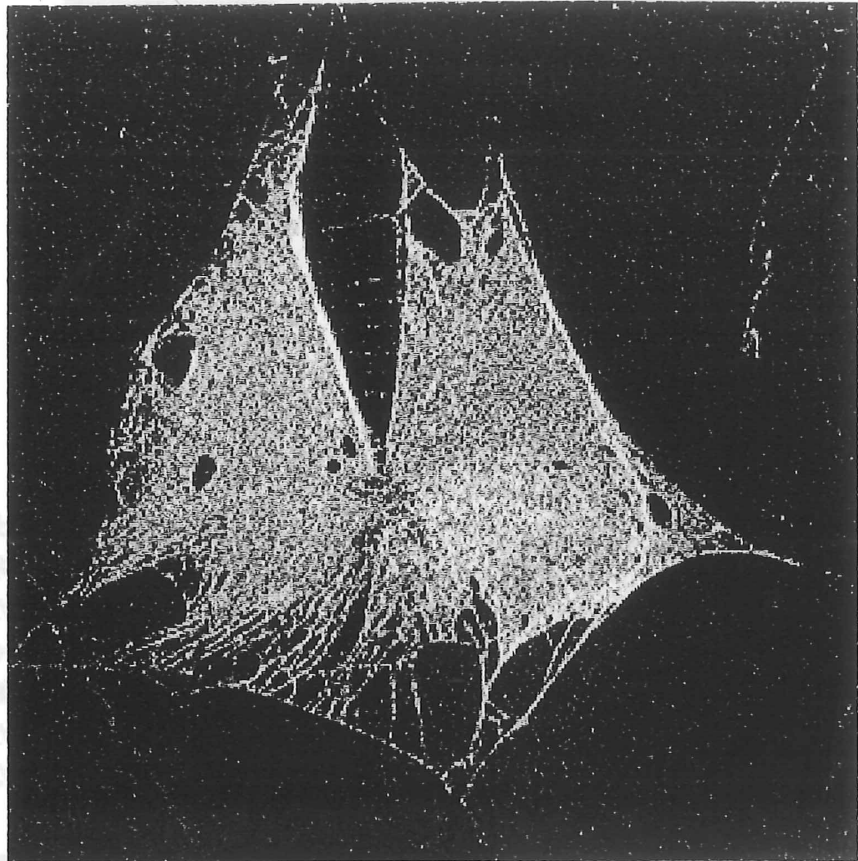


5, 2002.8.5 姫路市
刀出 25cm×28cm
縦糸の上に足場糸か横
糸か分からないが、ぐ
ちゃぐちゃに付けられ
た網。クモはこの日機
嫌が悪かったのもし
れない。

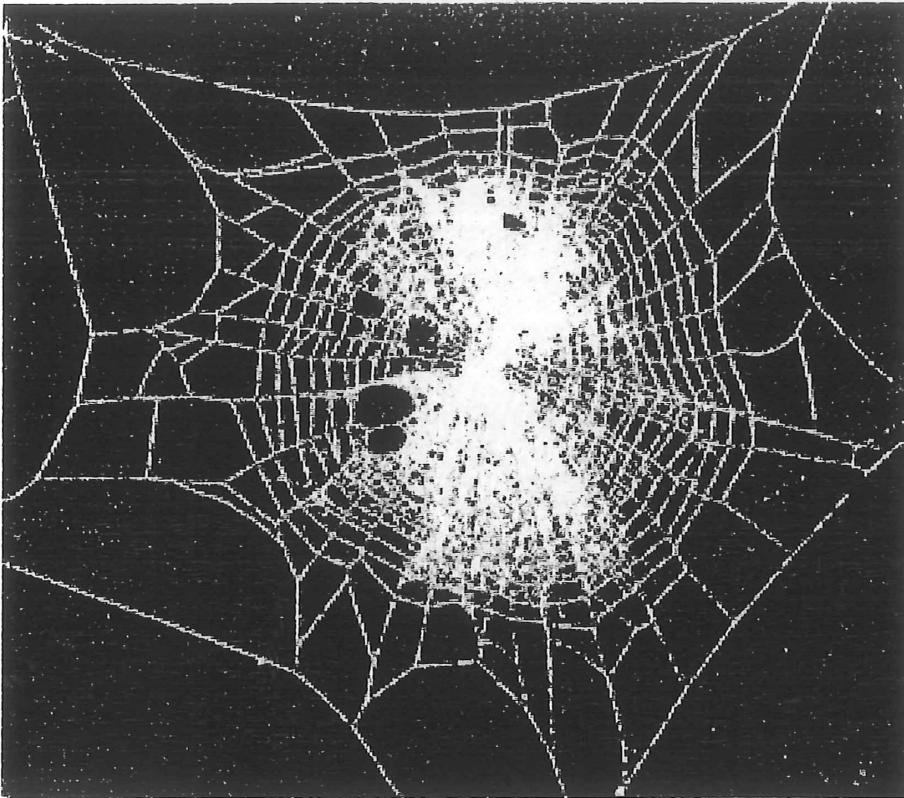


6. 2002,8,5 姫路市刀出 10cm×12cm
出囊してきた子グモが作った網。ホワイトラッカーを吹き付けると網は一枚
のオブラートのように出てくる。淡くかくれ帯を付けているものもあるが、
紙に採ると分からなくなる。

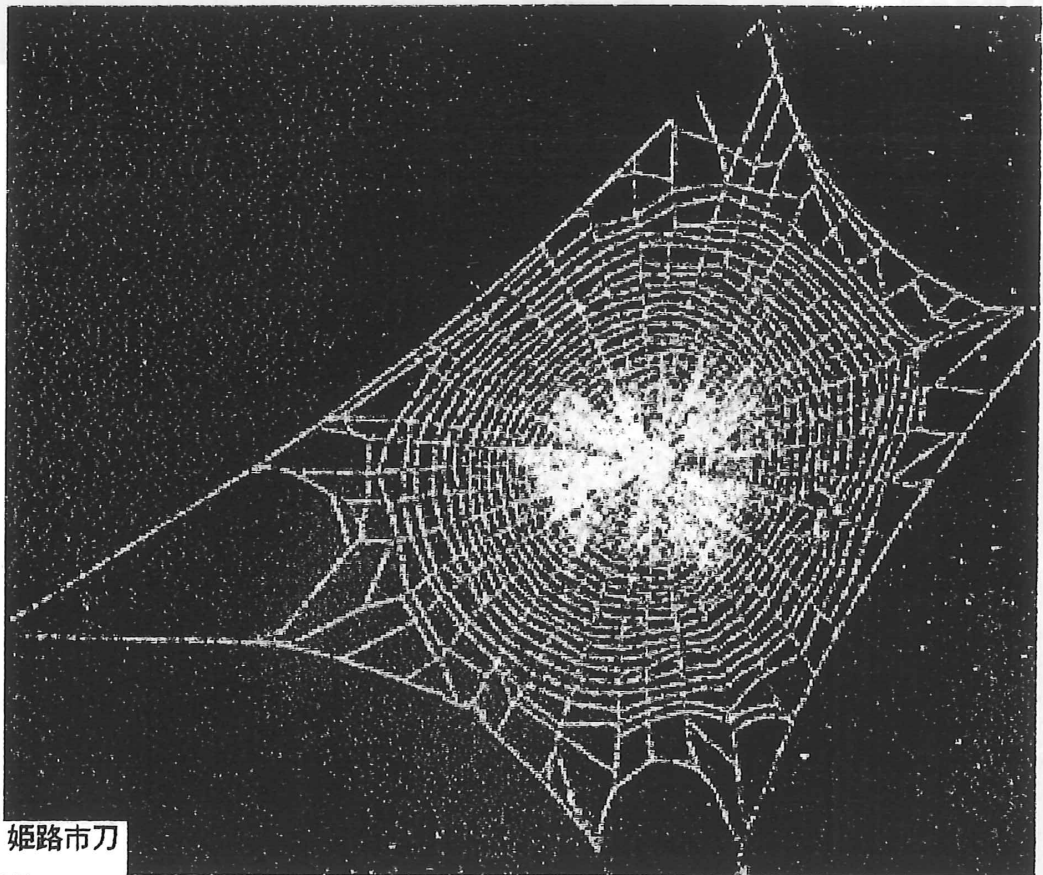
7, 2002,7,29 宍粟郡
安富町 10cm×10cm
これも6と同じ子グモが作
ったシート状の網。シート
状の網は縦糸と足場糸を付
けた後に張られるようで、
シート状の網がめくれた部
分にうすく足場糸があるの
が見える。



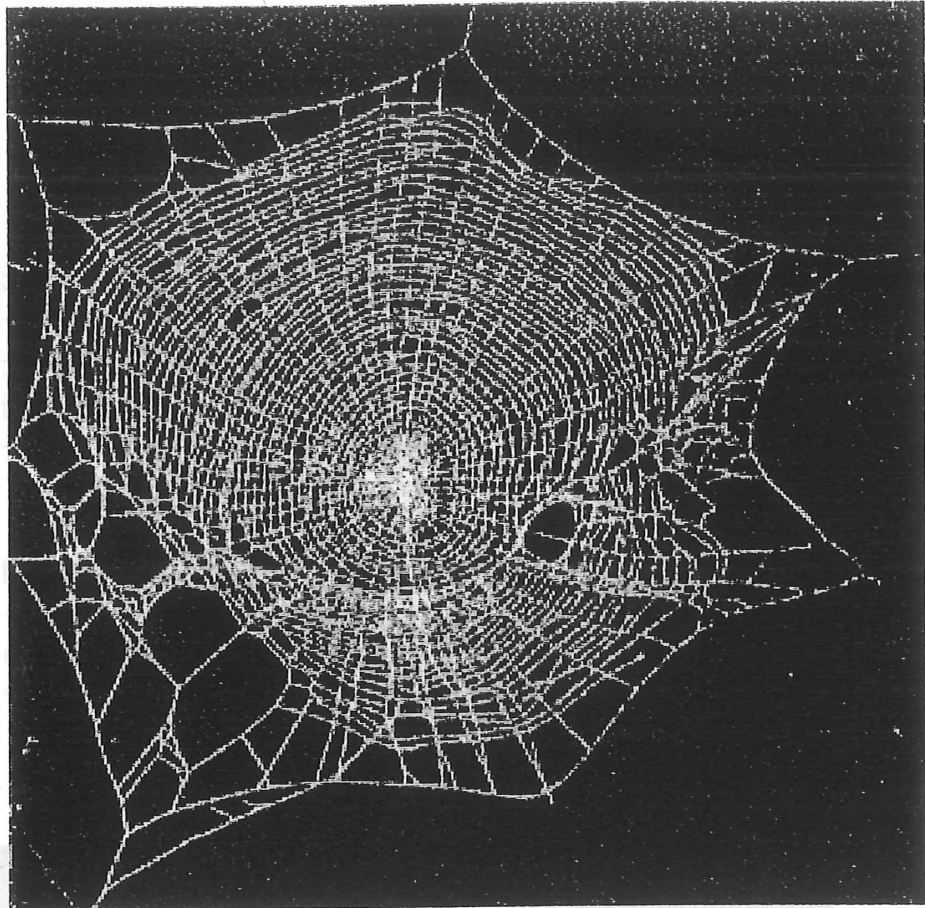
8, 2002,7,29 宍粟郡 安富町 12cm×15cm
シート状の網はラッカーを吹き付けてしまうと均一に、白くオブラートのようになってしまう。
そこでこのような網が、どのように張られるのか疑問であった。ATYPUS、No.85に書かれた新
海明氏の文章「ウズグモ属の幼体とオス成体の網について」を読むと、中心から引かれる無数の、
普通の縦糸よりさらに細かい縦糸によって作られるらしい。この網はそれをよく現している。



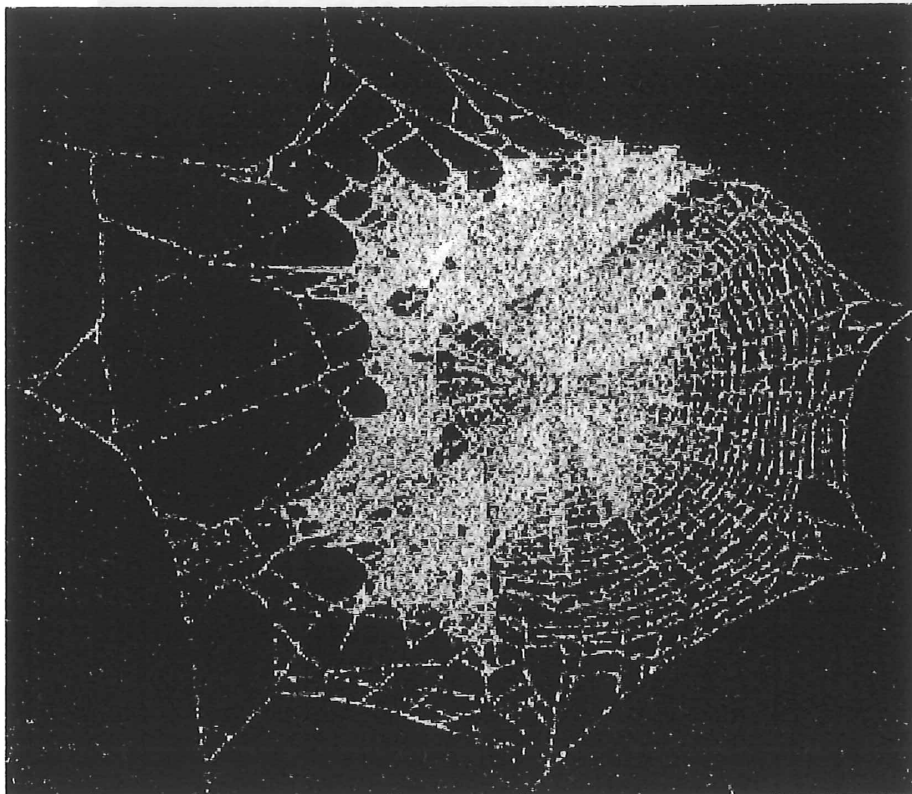
9. 2002,7,29 宍粟郡
安富町 8cm×10cm
新海明氏の記述によれば、出囊してきた子グモはシート状の網を張るが、3令以降になると縦糸と横糸を持った普通の網を張るようになる。しかし、時には中間型のものも張るとのことである。さしずめこれは中間型のものであろう。



10、2002,8,5 姫路市刀
出 9cm×12cm
これも同じ中間型のもの。シート状の網は中心付近のみになっている。

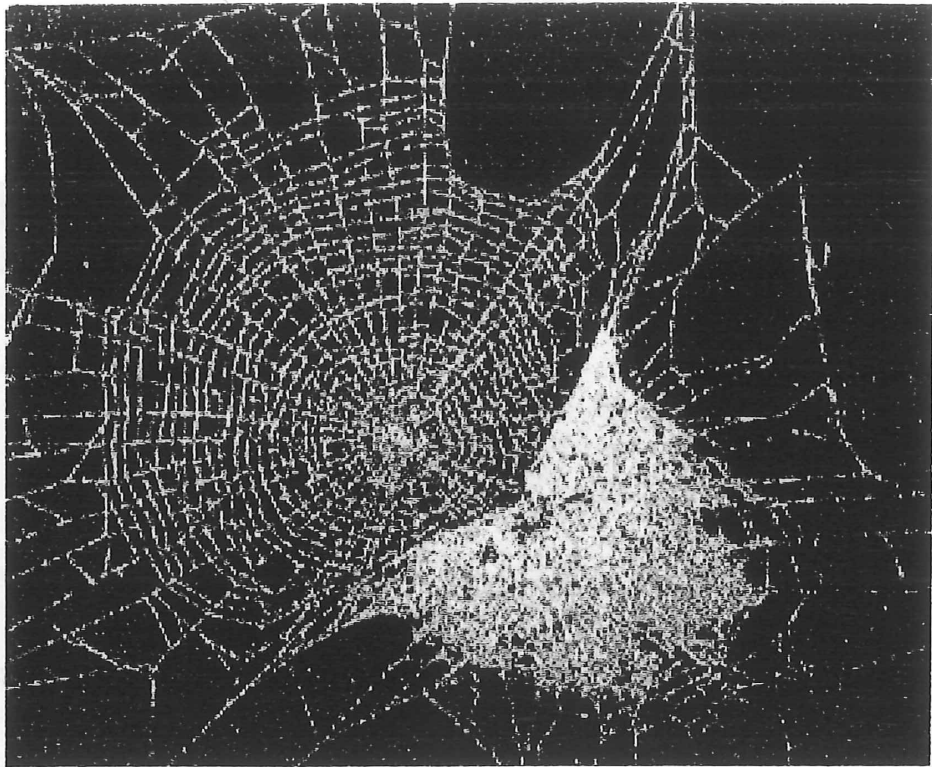


11-1 2002,7,29
中央郡安富町
11cm×11cm



11-2 2002,8,9
姫路市刀出
10cm×12cm

11-3 2002,8,3
姫路市刀出
12cm×14cm



11, さて、ウズグモたちの網をたくさんみていると、前の網を完全に壊さず一部残した網をよく見かける。私のように不精者なのか、はたまた使えるものは使うという合理主義者なのか。これまでウズグモの網はなんだか汚い、という印象を持っていたのはこのせいである。今回採集した子グモの網の中にも何点かこのような網があった。よく見ると小さい故にか、なかなか乙な味わいがある。(11-1、11-2、11-3)

以上、13点の網を紹介した。このようににウズグモたちが様々なタイプの網を張ることは、糸を出す器官の発達に深く関わりがあるらしい。しかし、そのような学術的なことはさておき、それぞれが持つ幾何学的な美しさは十分鑑賞にたえることができると思うがいかがでしょうか。

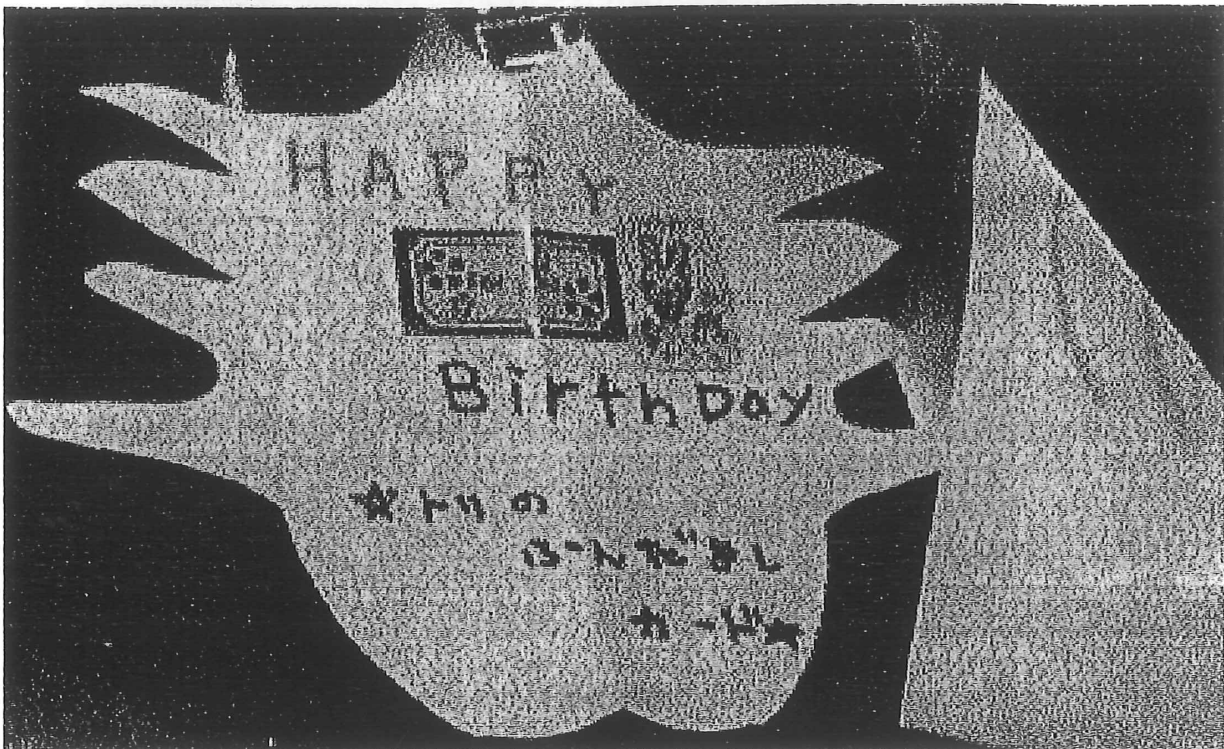
参考文献

新海明 (1984) ウズグモ属の幼体とオス成体の網について ATYPUS No,85

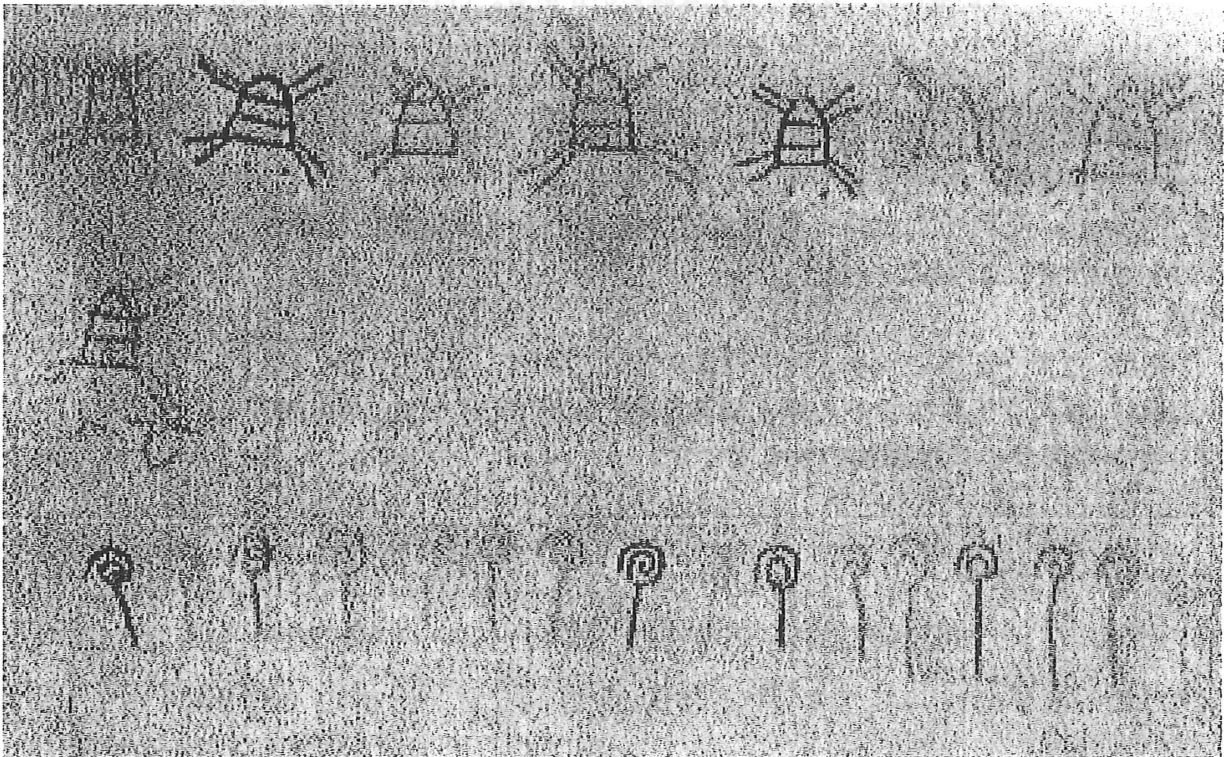
吉田真 (1991) ウズグモ科のクモの網と補食行動 ATYPUS No,98/99

※キャプション中のサイズは原図のサイズです。

Spider Kids



秋山八幡^{もゆ}萌ちゃん (12歳) がお父さんの誕生日に送ったトリノフンダマシカード。



八幡秋山^{きわ}沙和ちゃん (5歳) の絵。
「こがねぐもが、うんどうかいでぺろぺろきやんでいーめざしてはしるところ。」です。

Photo-Report

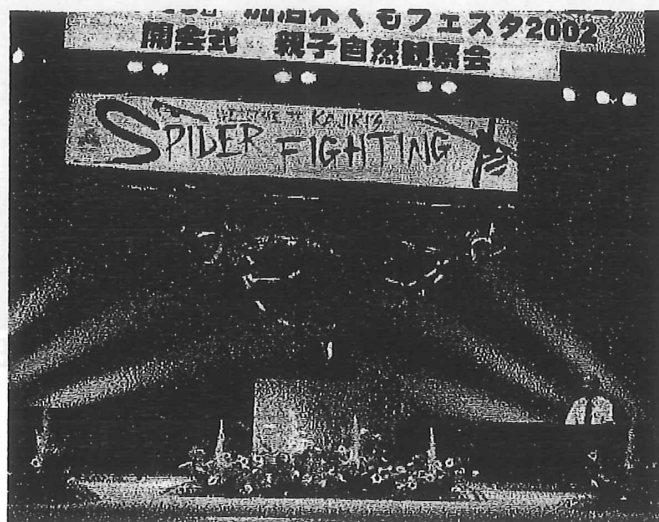
クモ学会 加治木町大会

柘元敏也

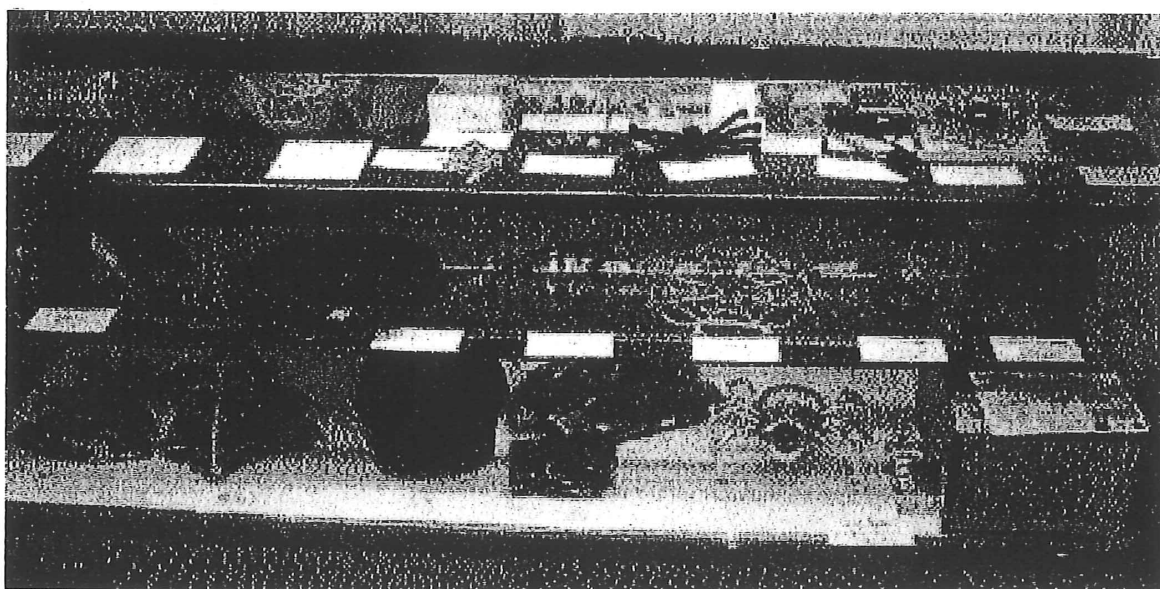
日本蜘蛛学会大会が鹿児島県加治木町で開催されました。細かい内容については他の紹介記事におまかせして、ここでは大会でとったスナップ写真を紹介します。



加治木町のバス停には、なんとクモ合戦の図柄が描かれていました。



中央の講演をされている方は加治木町の町長で、右は蜘蛛学会会長。空中にぶら下がっている巨大なコガネグモのフィギュアに注目。



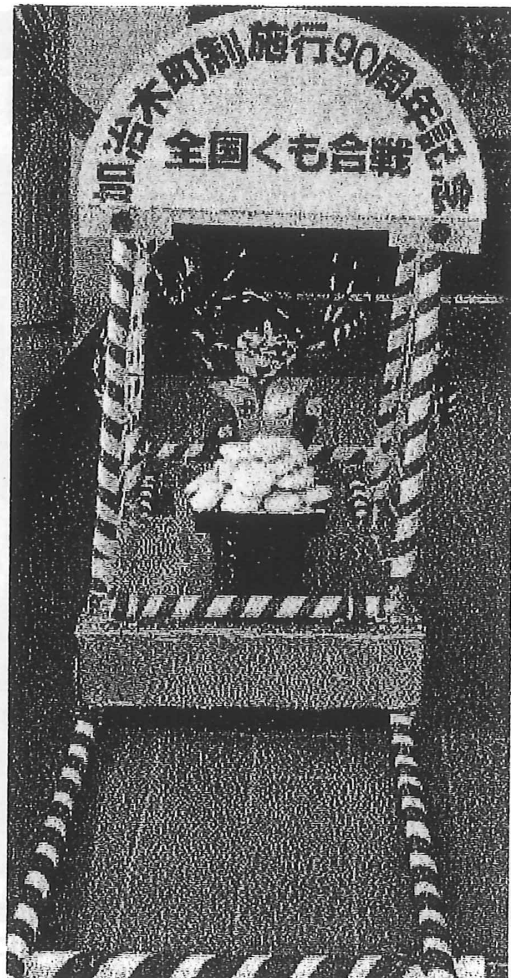
ずらりとそろったクモグッズ。



今回は滋賀の立命館大学で行われた大会以来、久しぶりのクモ文化論がテーマのシンポジウムでした。



日本蜘蛛学会奨励賞の授賞式。今回の受賞者は渡部健さん(写真右)でした。おめでとうございます。



可愛いくもみこし

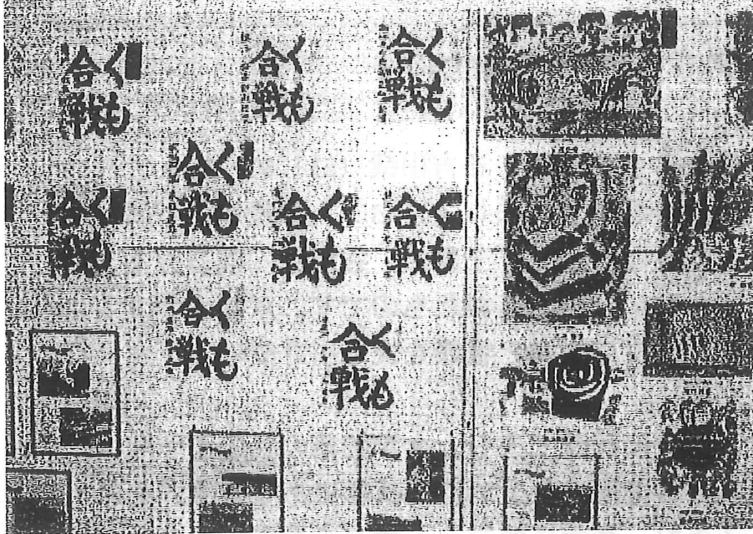


子供たちと一緒にクモの網を作る新海明さん。勝手に振る舞う子供たち相手になかなか見事でした。

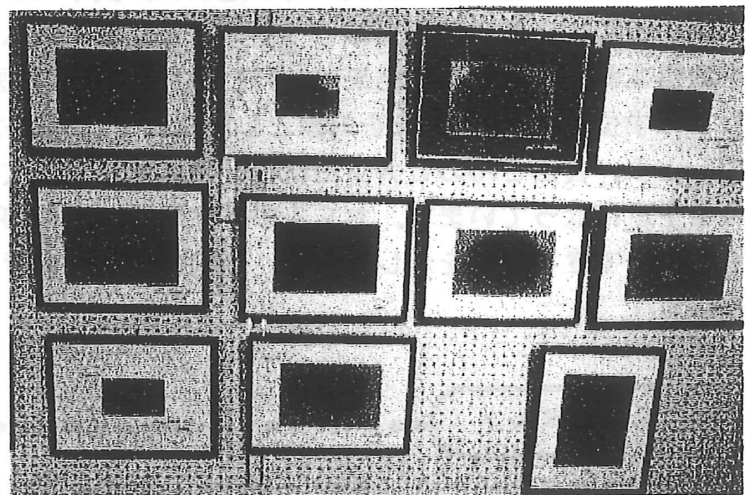


人工のクモ網に、こどもの作った多くのクモがついています。

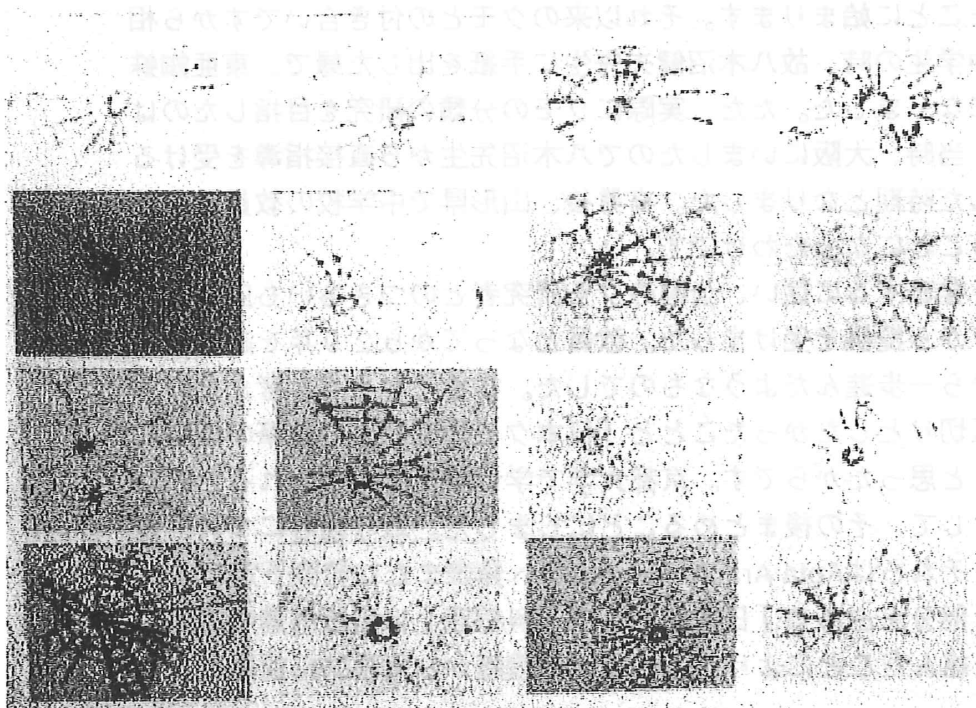
くも合戦絵画・書道コンクール入賞作品



クモ合戦がテーマの加治木町の
絵画・書道コンクール入賞作品。
加治木町ならではのですね。



中程さんによるWeb Artの作品。
こちらはカラフルです。



船曳さんによるWeb Artの一つ。
ウズグモの網を和紙につけた作品。

トピックTOPICトピック

吉田哉さんと谷川明男さんが理学博士に！

先日、日本蜘蛛学会会員で関西クモ研究会の会員でもある吉田哉（はじめ）さんと谷川明男さんが、京都大学の理学博士の学位を取得されました。お二人の長年のご研究が実ったもので、喜ばしい限りです。吉田さんはヒメグモ科の、谷川さんはコガネグモ科の分類学的研究が、博士としてふさわしいと認められたものです。京都大学大学院理学研究科の疋田先生は、お二人の学位論文の指導と審議を快く引き受けて下さいました。厚く御礼申し上げます。

吉田さんと谷川さんは、それぞれ中学と高校の教諭であり、大学勤務の私のような者に比べて、時間的にも環境的にも研究者として恵まれていない状態にあります。そのような中で寸暇を惜しんで研究に打ち込まれ、長年にわたって論文を量産されてきたお二人に対して、深い敬意をはらうものです。昔、故八木沼先生も高校教諭として学位を取得されました。その結果は、「日本原色クモ類大図鑑」に結実しています。教諭としての学位取得は、クモを対象としたものでは最近は全くなく、快挙といってもいいでしょう。吉田さんのヒメグモ科の分類に関する和文の総説も、単行本として出版される予定になっています。お二人の学位取得は、「研究職」に従事していない方でも学位が取得できることを示した点で、全国のクモ研究者を元気づけるものです。

（吉田真記）

吉田哉さんのコメント

クモの研究をするようになったきっかけは、小学校3年生の時の理科の自由研究にクモのことを取り上げたことに始まります。それ以来のクモとの付き合いですから相当の年月になります。中学生の時、故八木沼健夫先生に手紙を出した縁で、東亜蜘蛛学会にも入会することになりました。ただ、実際にクモの分類の研究を目指したのは大学に入ってからです。当時、大阪にいましたので八木沼先生から直接指導を受けることができ、研究が進んだ時期となりました。卒業後、山形県で中学校の教員となり、細々と研究を続けることになったわけです。

少しずつ研究の成果を発表するに従い、全国のクモ研究者とのつきあいも広がり、特に標本では多くの方々から提供を受けました。教員となってから20年を越えましたが、これまでは趣味から一步進んだようなものでした。学位をとろうと考えたのは、これまでの研究の区切りとしたかったことと「日本クモ類図説」の執筆の機会にヒメグモ科をまとめようと思ったからです。京都大学で学位論文を受け入れるとの話を吉田真先生からお聞きして、その後まとめることにしました。取り組むにつれ、新しいことが次々わかり、それらはActa Arachnologica等へ発表または発表予定です。また、学位論文の主要な部分を占める「日本産ヒメグモ科総説」は出版準備中です。

今回、学位論文に取り組んだことにより、これまでの段階から飛躍的に前進しまし

た。とても良かったと思っています。ヒメグモ科はまだ完全にまとまったとはいえませんが、今後とも研究を続けます。さらに、日本だけでなく、これまでも一部手がけている台湾や東南アジアのヒメグモ類にも取り組みたいと思っています。今回の学位取得では、京都大学の疋田努先生をはじめ、吉田真、田中穂積、加村隆英の各先生、その他多くの方々にお世話になりました。大変感謝しています。

・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・

関西発のクモに関するホームページ

清水裕行

本誌31号にクモに関する内外のホームページが榎元敏也氏によって紹介されている。その多くは首都圏発信のようである。関西発のHPはまだ少ないようだが、そのうちから私が受信できたものをいくつか紹介する。地域の自然史研究の一環として紹介されたものが多いことが特徴といえる。

1. Neighboring Nature <http://www.cyberoz.net/city/sekine/jindex.html>

生きものエッセイ虫めづる <http://www.cyberoz.net/city/sekine/MMZ.htm>

1998年5月23日開設、どちらもせきねみきお氏主催で、一見独立したサイトだが、相互にリンクできるように構成されている。古典文学や美術史でおなじみの信貴山周辺の自然をテーマとしたサイトで多くのページに英語版がある、「生きものエッセイ」の英語タイトルが "In Harmony with Neighboring INSECTS and SPIDERS" となっているように、クモの比重は大きく、生態写真も多い。この優雅なタイトルはいうまでもなく『堤中納言物語』の中の『蟲愛づる姫君』に由来する。

ここから分岐できる頁としては上記の「生きものエッセイ」のほかに「里山の四季」「信貴山付近のクモ類目録」、子供向けページとして「くものページ」「くもの図鑑」「くものあみ」がある。また、「蟲愛づる姫君の話」(英題 "The Little Princess Who Loved Insects") のページもある。写真で紹介されたクモのほとんどは広範囲に分布する種が多いが、中にはせきね氏が奈良県で始めて採集したクロガケジグモのように分布的に重要な種もある。

「信貴山付近のクモ類目録」には107種が記録されていて、一部の種では写真を見ることができる。生駒山地は19世紀にイコマオニグモ (=スズミグモ) の模式産地となった名所にもかかわらず、その後まとまった報告がなく、貴重な分布資料である。是非とも「くものいと」に投稿していただきたいものである。

2002年8月16日現在の訪問者数は延べ39830名。

2. 但馬のクモ図鑑 <http://brookspider.hp.infoseek.co.jp>

2002年1月15日開設、クモ山人氏主催。「クモ山人氏」(注)の実体は日本蜘蛛学会および本会会員の本庄四郎氏であろう。但馬(竹野町が多い)で撮影されたクモの生態写真を見ることができる。現在呼び出せる頁には「クモってどんな生き物?」「自然の中でのクモの働き」「クモのオスとメス」「網を張るクモ」「網をはらないクモ」「洞くつのクモ」が、準備中の頁には「クモを探そう」「土の中のクモ」「海辺のクモ」「水辺のクモ」「草原のクモ」「落ち葉の中のクモ」「森のクモ」「田んぼのクモ」がある。但馬地方あるいは兵庫県でこれまで未確認だった種の写真も多く、動物地理学的にも

・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・

意義が大きい。いまだ本庄氏によって公表されていないので、種名の紹介は控えたが、すべて公表されたならば、竹野町のクモが200種を越えることはまちがいない（現時点では181種）。

ここからはクモ山人氏と訪問者の対話の頁としての「アラクネBBS」にもリンクでき、意見や質問を述べられる。クモ山人氏の近況や自然に関心を持つ人の素朴な質問が掲載されているほか、“同業”のせきね氏やみるかしひめ氏のメッセージも見られる。

今年になって開設されたばかりなので、2002年6月3日現在の訪問者数はまだ少なく、3695名、と書いていたら、その後急増して8月16日には7607名に達した。すごい人気である。

(注)「クモ仙人」と間違える例がしばしばある。「仙人」の方が思い浮かびやすいのだろうが、これでは枯れ過ぎの感がある。自然に分け入る生身のナチュラルリストに対してはやはり「クモ山人」の方がふさわしいように思える。

3. くもとりにっこうの自然がたり

<http://homepage3.nifty.com/ikkouyama/index.html>

2002年7月30日開設と思われる。主催者はクモ山人氏と同様に但馬で大活躍中の山本一幸氏（浜坂町在住）であろう。いっこう氏の住んでいる兵庫県美方郡浜坂町久斗山（くとやま）の自然を紹介している。HPを開くとオオトリノフンダマシの見事な写真が迎えてくれる。一般の人はクモというとオニグモやアシダカグモに代表される、地味で毛むくじゃらな姿（注）を連想するようだが、この写真を見て認識を改めた人もいようで、後述する「掲示板」には驚きの声が寄せられている。インターネットの啓蒙効果大である。

ここから分岐した頁には「くもとりにっこう自己紹介」「ふるさと久斗山だより」「いっこう関わりのイベント情報」「くもとりにっこうの書きたい放題掲示板」がある。写真等クモに関する情報はまだ少ないが、おいおい増えていくと期待している。「掲示板」には「アラクネBBC」同様に多様な内容の便りが寄せられている。私も御挨拶を送っておいた。

2002年8月16日現在の訪問者数は延べ313名。

(注)「但馬のクモ図鑑」の現在の冒頭写真はオニグモで、こちらの方はたいそう迫力があって良い。以前は都会でも街灯に大きな網を張っていたが、最近ではあまり見られなくなったのは残念。

4. 加村研究室 <http://www.res.otemon.ac.jp/~kamura/index.html>

追手門学院大学のHPの一環で「私のプロフィール」「学内とその周辺の植物」「クモの研究」に移ることができる。「クモの研究」からはさらに「クモの同定の手引き」「クモの網の標本」「トピックス」を見ることができる。

「プロフィール」は自己紹介だが、公設の研究者紹介サイトとしては

http://www.res.otemon.ac.jp/kenkyusha/kamura_takahide.htm

がある。ちなみに、西川喜朗氏のサイトは

・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・

http://www.res.otemon.ac.jp/kenkyusha/nishikawa_yoshiaki.htm

である。是非とも西川氏にもクモのHPを開設していただきたいものである。

2002年8月16日現在の訪問者数は延べ6430名。

5. クモに関するインターネット情報の活用と留意点

インターネットは映像と文書両方の効果を兼ね備えた新しいタイプの情報媒体である。リアルタイムで情報が入り、時には利用者がそれに参入できる。クモに関する情報交換や宣伝、教育にも効果が期待できる。実際、意見交換の頁への参加者の大半はクモに関しては門外漢で、「クモがこんなに面白いものとはしらなかった」という新鮮な驚きを吐露している。出版では不十分であったクモに対する誤解を解き、本当の姿を理解してもらうという教育面での期待ができる。

反面、利用者が新しいメディアの特性を理解して接しないと、せっかくのものが活かせないばかりか逆効果になる可能性さえある。

第1に注意しなければならないことは情報の劣化である。先に「リアルタイム」という言葉を使ったが、画面に表われる情報が常に最新とは限らない。長期間更新をしていないものだと、そこから得られる情報はむしろ出版物よりも古いものになってしまう。丹念に更新履歴を表示しているHPばかりでないので、この点注意を要する。手入れの悪いHPだと、そこからリンクしたHPが引越したあとだったり、すでに閉鎖されたりで繋がらないケースがままある。また、そのHPに示されたEメールアドレスに意見を送っても梨の礫であったりする。これは、新しいアドレスを使うようになって、旧い方を滅多に開かないケースであることが多い。旧い住所の郵便受けに手紙が詰まって顧みられないのと同じ状況である。一般の住宅ならば出向いて直接対話する手があるが、メールの場合は確認困難なことが多く、かえって始末におえないものである。

次に、手軽なだけに誤った情報も容易に流通して、時にはそれが独り歩きする危険がある。この危険は出版の場合でも同様であるが、インターネットでは第三者による校正のような作業がないため、検討する期間が短く、誤情報が容易に発信される。Eメールを多様する人だったら、ミスパンチや誤返還はしばしば経験していることと思う。ミスの多くはたわいのないもので容易に判断がつくが、時にはそれで意味が通じて、送り手の意図とは異なる情報が流通する恐れがある。

第3に、原則としてHPの内容は「文献」として扱えないことに留意しなければならない。これは旧来の出版中心主義の名残というよりも、インターネットの特性が文献の本質と相容れない面があるためというべきである。

論文の末尾に引用文献が列挙されているのは、読者がそれを参照して著者と認識を共有するのが主要な目的である。著者と同じ文献を読んで、「確かに著者の主張の通りだ」とか、「著者は事実誤認を犯している」と判断する基準にするのである。先に述べたように、HPは随時更新が可能である。従って、「引用文献」として提示されても、著者が読んだのと同じ内容を再現できるとは限らない。双方が、何回も推敲された原稿の異なるバージョンをもとに論争するような状況となり、議論が噛み合わない場合があ

・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・ ・ ・ OPINION ・ ・

りうる。その意味で、インターネット等の映像情報は「私信」と同様とみなすべきであろう。

ここで紹介したHPのほかにもクモの写真とともに貴重な分布情報等が紹介されている。その多くが出版物に未公表で惜しいと感じることが多い。うっかり私が「くものいと」にでも紹介すると、最初の発表者は私になってしまう。これはモラルの問題というよりも、情報の信頼度にからむ問題となる。採集者（あるいは観察者）や同定者のように標本を実見した者以外は責任ある情報提供者になりえず、いたずらに不確かな情報を流布させる恐れがある。各HPの主催者には、「今さら」と考えずに、定期的に分布情報を出版物に公表されることを希望する。

Essay

重箱通信(1)

「過修正」と地名の読み方

清水裕行

言葉の使い方の誤りに「過修正」というものがある。主に発音上の誤りを正したつもりで、かえって誤ったケースである。訛りなどのコンプレックスをもっていると陥りやすい。

「青二才」というのがそれに当るらしい。「二才」は本来「ニセ(新背)」で若者を指す。ところが、「アイ」を「エー」と発音する癖のある江戸っ子から見ると「ニセ」の方が訛りに聞こえ、直したつもりで「ニサイ」になったそうである。やはり江戸っ子が「ヒ」を「シ」と発音することに神経過敏になるあまりの誤用に「布団をヒク(敷く)」というのがある。ある名優がテレビドラマで「公平無私」というべきところを「公平ムヒ」といってしまったことがある。「公平無比」などとは自分から言う言葉ではあるまいに。

外国語に接するようになると日本人特有の発音の誤りを気にして過修正をやらかす。「ピッチング」と言った野球人がいたらしい。t i, s i, z iなどに相当する音が日本語になく、「チ」「シ」「ジ」のような摩擦音になるのが垢抜けなく感じられるため、余計に気になるのだろうが、投手は「ピッター」ではなく「ピッチャー」なのだから、「ピッチング」のほうが正しいはずである。ほかには「ゼントルマン」「ゼムクリップ」「リーゼント」のように「ジェ」を「ゼ」にしてしまうケースがある。もっとも、1音をカタカナ2文字で表記するのは比較的最近のことだから、大分以前からあるこの種の表記法を「過修正」とみなすのは適当でないかもしれない。私が幼いころはジェット機を「ゼット機」と表記していた。そう書いて、「ジェット機」と読んでいたのかもしれない。これに関しては、日露戦争の映画を見ていて「Z旗」という言葉が出た際に、「そんな新兵機があるのに、なぜ旅順であれほど苦戦したのだろう」と不審に思った、今考えると馬鹿馬鹿しい経験がある。

多くの言い間違いが知識に欠けるがゆえに生じるのに対して、「過修正」のほうはむしろ教養があったがために犯す過ちといえる。これと似た誤りに「白身の魚」を「シラミの魚」と読んだOLの例がある。漢字を覚えたての子供ならば戸惑いなく「シロミ」と読めたはずである。

蜘蛛学の世界にもこのような現象はしばしば見られる。故八木沼博士によるとサガオニグモを「サガノオニグモ」と書く人がいたという。これは「嵯峨野」のつもりであろう。小学生にとって「サガ」から連想する地名は「佐賀」だろうが、歴史や文学の教養を身につけると「嵯峨」のうほうが風雅に思えるようである。無論、「サガオニグモ」の場合は「佐賀」が正解である。この種の誤りはやはり地名に関するものが多い。兵庫県の分布資料を検討して見つけた例に「佐用町クチバセ」(原文はローマ字表記)というのがあった。「口長谷」(クチナガタニ)の誤りではないだろうか。ついで

ながら、「佐用郡」「佐用町」はしばしば「サヨ」と読まれるが「サヨウ」が正しい。同じく兵庫県内の町名「大河内町」を「オオコウチ」とした論文があったが、「オオカワチ」が正しい。これらも漢字に精通した人のほうが誤りやすいのであろう。なお、「大河内町」は手元の府県別地図帳では「オオカワチ」だったが、JISのハンドブックでは「オオコウチ」とまちまちだった。私は迷った末に町役場に照会して確信を得ることができた。

地名の読みは地域によっては特殊な場合がままあるから、事情に通じていないために生ずる誤りももちろん多い。「扇ノ山」を「オウギノヤマ」、「篠ヶ峰」を「シノガミネ」、「柏原」を「カシワバラ」とした例があるが、それぞれ「オウギノセン」、「ササガミネ」、「カイバラ」が正しい。「山」を「セン」と読む例は鳥取県との境界に多く、クモの記録が多く出ている「蒜山」(ヒルゼン)もそのひとつである。これらの中心にあるのがかの「大山」(ダイセン)であろう。「篠」を「ササ」と読む例としては「篠山」が有名で、大阪市内にも同名の丘がある。だからといって兵庫県内の「篠」をすべて「ササ」かというのと、「シノ」と読む例もあるので、素直なだけでは誤りを避けられない。特に「柏原」は「カシワバラ」が最も素直な読み方であろう。氷上郡柏原町は「カイバラ」だが、大阪府柏原氏は「カシハラ」であり、猪名川町にも「カシハラ」がある。「山」は素直に読んでも「サン」、「ザン」、「ヤマ」といった違いがあるので油断できない。能勢妙見山は「サン」で、但馬妙見山は「ヤマ」とのことである。但馬妙見山の読みを「ザン」とした論文があったので、著者には「重箱通信個人版」としてお知らせしておいた。なお、この著者の論文中の「町」(チョウ・マチ)と「ソムラ」の使用例を調べてみたが、一つの誤りもなかった。このように慎重な著者だからこそ私の挙げ足取り的な指摘も冷静に受けとめてくれたのだと思う。

結局、地名の読み方はケースバイケースであるから、資料をしっかりと調べて誤りがないようにしなければならない。えらそうなことを書いてきたが、私もこの点では失敗をしている。三重県の篠立の風穴産のホラヒメグモが未記載だったころ、故八木沼健夫先生は"*Nesticus shinodachiensis*"という学名を用意しておられた。これに対し私は「地名の読みは『シノダテ』が正しいのです」と“助言”をしてしまった。実際には「シノダチ」が正解であった。甲虫の学名にshinodateensisというのがあったので、そちらが正しいと思い込んだのだが、後に甲虫学者のミスであったことがわかった。似た例としては京都府芦生に因む*Arcuphantes ashifuensis*がある。和名はアシュウヤミサラグモとなったが、学名は綴りの誤りを理由に改訂することは許されないのだから、そのまま放置される。この点でも地名の扱いには慎重さが要求される。

「重箱」と自ら称したように、この種の問題提起は「細か過ぎる」と受けとめる読者も多いことと思う。しかし、別に郷土史の専門家になれと言っているのではない。図書館まで行かなくても、調査の際に現地で人にたずねたり、道路や駅の表示に気を付ければ解決することである。科学する者にとってデータの正確を期するのは当然ではないだろうか。発表時のちょっとした注意でその後の混乱を防ぐことができるのである。最後にクイズを少々。実際に分布データとして公表された兵庫県の難解地名を列挙してみました。これらはすべてクモの採集地として文献上で発表されたものです。このうちいくつ読めましたか。

- ①火打岩（篠山市）②大名草（青垣町）③栗鹿峰④鬼神谷（竹野町）⑤稲葉（日高町）
⑥神谷（姫路市）⑧中垣内（龍野市）⑨箸荷（加美町）⑩淡河（神戸市）

- [正解] ①ヒウチワン②オナザ③オウガネ（「アワガミネ」とも読まれているようです）
④オジンダニ⑤イナンバ⑦コダニ⑧ナカガイチ⑨ハセガイ⑩オウゴ

お詫びと訂正

【31号に以下の誤りがありました。訂正してお詫びします】

◎P.41

清水さんの近況報告で、「淡水魚を捕食するハエトリグモ類」とあったのは、「淡水魚を捕食するアオグロハシリグモ」の誤りでした。

◎P.54

採集会参加者氏名に、山野忠清さんのお名前が抜けていました。

◎P.56

写真に撮影場所と氏名が入っていませんでした。

撮影地：八坂神社（奈良市）

写真左から坂口佳史さん、清水裕行さん、榊元ともこ、西川喜朗さん、吉田真さん、池田和穂さん、池田勇介くん、船曳和代さん、池田亮太くん、池田幸二さん

撮影者：山野忠清さん

◎目次

41 クモ関係簡体字早見表 → 43 クモ関係簡体字早見表

48 兵庫県（数カ所）の採集記録”の訂正 → “兵庫県（数カ所）の採集記録”の一部訂正

57 兵庫県宍粟郡関のクモ → 兵庫県宍粟郡安富町関のクモ

◎P.70

仲程さんの新聞記事がコンテンツに入ってしまった。この記事は仲程さんの著作ではありません。

編集後記

●9月16日夜から17日にかけて雨が降った。雨らしい雨が降ったのは約2カ月ぶりのことである。木は葉をおとし始め、草は茶色く枯れはじめていた。そのせいかクモの成長も悪い。庭にいるジョロウグモは皆小さくてやせぼっちである。大人になるには、まだまだ時間がかかると思うのに、網にはもう雄が待っている。ある部分を取り出すと、遅れたり早まったりしているように見えるが、大きく見ればやはり季節の移り変わりに反応しながら推移している。「くものいと」も遅れながらも発行にこぎつけることができた。遅れた分すぐ次の発行が近づいている。次号にもたくさんの原稿をお寄せくださるようお願いしたい。(船曳)

●毎度、発行が遅れたお詫びを言っているような気がします。この号は予定では6月末に出ているはずのものです。とくに、早くから原稿を出していただいていた方々には、本当に申し訳ないことです。そのかわりといっは何ですが、中身はかなり充実しているのではないのでしょうか？それにしても、関西に池田勇介君あれば、東京に八幡秋山(秋山八幡?)、萌ちゃんと沙和ちゃんあり。将来が楽しみです。ちなみに、今日(9月26日)は僕の誕生日なのですが、僕もトリノフンダマシカードが欲しい！もっとも友人によると、今日はたくさんの台風が被害をもたらした「台風特異日」だそうで、「まあ、お前の誕生日だからな」とのこと。もらう資格はないそうです。

(吉田)

●やっと終わりました。一応、年2回発行できればいいやってぐらいの気持ちで続けたらいいんじゃないですか？何月に出さなきゃならないって思うと、けっこう大変だもん。毎回「遅くなりましたって」謝らなくてもいいようにしましょうよ。(柘元)

〈関西クモ研究会〉 会長 山野忠清
編集 吉田 真
船曳和代
柘元智子
庶務 加村隆英
会計 牧野達也
顧問 西川喜朗

くものいと32号 発行年月日 2002年10月20日
発行者 関西クモ研究会(代表 山野忠清)
住所 〒567-8502 大阪府茨木市西安威2-1-15
追手門学院大学 生物学研究室内
TEL: 0726-41-9550 (加村研)
